
パパなんか大嫌い！

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパなんか大嫌い！

【Nコード】

N6024T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

いつまでもパパはパパだと思っていたある日、パパはパパじゃなくなって……

大嫌い！

『パパなんか、大嫌い！』初めて言ったのはいつだろう。

確か小学校でパパについて作文を書く為に、パパの会社に見学に行つた時だと思う。

パパは今でも藍花商事あいかしやうじという大きな総合商社で仕事をしている。

パパとママの友人の四谷小夜ちゃんよつやなよに連れられて私はパパの会社に行つた覚えがある。

今も変わらないんだけど小夜ちゃんは背が高くスタイルが良くって、軽くウエーブの掛かつたミディアムヘアで花柄のワンピースの上に茶系のジャケットを羽織っていた。

小夜ちゃんが玄関ホールにある受付で受付のお姉さんに尋ねた。

「すいません、営業二課の神楽坂係長かぐらまかをお願いしますのですが」

「神楽坂ですね、しばらくお待ちください」

受付のお姉さんが優しい笑顔で私の顔を見ながらどこかに電話していて、直ぐに裏手にある駐車場に居るはずだと教えてくれた。

小夜ちゃんに手を引かれながら大きな本社ビルの裏にある駐車場に行くと、駐車場の隅でホースを使ってパパが何かを洗っていた。

「優ゆう、あなた何をしているの？」

「ん？ 小夜か。何をつて見れば判るだろう、クーラーのフィルタ掃除だよ」

「あのね、今日は何の日だか判っているんですよ」

「あつ、美奈の会社見学か。ミーナ、良く来たね」

パパは小夜ちゃんに言われて気付いたみたいだった。

私は凄く不安になった。

だって小夜ちゃんからはスーツをビシツと着てエリートマンだって聞いてたから。

それに友達の真弓ちゃんちの自慢のパパも大きな会社の係長さんで、いつもスーツを着て格好良く仕事をしているって自慢してた。

だから、パパも…… だけど目の前に居るパパは上着を脱いで、ネクタイを緩めてワイシャツの袖を捲くり四角くって黒いクーラーのフィルターを持って満面の笑顔だった。

「パパのお仕事はお掃除屋さんなの？」

「今日のパパの仕事はクーラーの掃除をする事だよ」

そんな事をパパに言われて段々悲しくなってきた、だってパパの会社から帰ったら真弓ちゃんの家と一緒に作文を書く約束をしているんだもん。

「パパなんか、大嫌い！」

「優！ あんたは本当に！ 待ちなさい、美奈！」

そんなパパを見ているのが嫌で思わず叫んで走り出してしまっ、直ぐに小夜ちゃんが追い掛けてきて腕を掴まれて捕まってしまった。

「美奈ちゃん、パパに言っでちゃんとお仕事をしている所を見せてもらおうね」

「もう嫌！ パパはお掃除屋さんなんだもん。作文にはお掃除屋さんだって書く！」

「そんな事を言わないで、ね」

私は小夜ちゃんが必死に宥め賺しているのに、決して首を縦に振らずに小夜ちゃんの手を引っ張って歩き出した。

好き・嫌い

校庭の向こうに見える私立青城中学校の校門をなんとなく眺めていた。

学校の前の通りに植栽されているプラタナスの葉がすっかり落ちて、曲がりくねった樹冠と白と緑の斑模様の樹幹が不思議な感じで見蕩れていた。

もう数ヶ月もすれば高校生になりこの校舎にも来なくなるんだと。そんな感傷に浸る余地は無いか。

中学を卒業してこの校舎には通わなくなるけれど、隣接している青城高校に通うだけの事だから。

「ミーナ、ミーナ！ ミーナってば」

「へえ？ 何？」

「何じゃないってば、授業中だよ」

私の背中をシャーペンで突っ突いて私の意識を現実に引き戻してくれたのは親友の大久保麻美おおくぼあまみだった。

麻美は中三にしては幼く見えるけど中身は……

「コラ！ 神楽坂と大久保。授業中なのお喋りとは良い度胸だな。

ちゃんと聞いていたんだろうな。神楽坂、これを訳してみる」

「……………」

「ミーナ。ここだよ、ここ」

ムスっとした表情で私と麻美を睨みつけているのは英語教師の淀橋いづはし先生だった。

淀橋先生は夏休みが終わった頃に赴任してきた先生で良い意味でクールだけど、私はどちらかと言えば苦手な先生だった。

沈着冷静でとても機械的な感じがするといえれば良いのだろうか、全て計算尽くで頭の中にはコンピューターが組み込まれているのではないかと思えるほどだった。

そのくせ顔つきは動物ぼく、何処と無く狐か鼠に似ていて眼鏡の奥

で何を考えているのか判らない気がした。
目を細めていつもと変らない表情なのだけどいつもより3割増しで
機嫌が悪い。

英語の授業を私が真面目に受けないのはいつもの事なのに。

麻美が教科書を指差して教えてくれた先生が私に和訳をさせようとしたのは『葉っぱのフレディー〜いのちの旅〜』と言うミュージカルにもなった物語の一場面だった。

「次の朝、初雪が降った。」

風が吹いて、とうとうフレディーも 風に飛ばされた。

そんなに痛くは無かったよ。

彼が飛ばされたとき、彼は初めて自分が生まれた木の全体を見た。

彼は思い出した。ダニエルが言ったことを。

『人生はいつまでも続く』

フレディーは柔らかい雪の上に着地した。

そして目を閉じ、深い眠りについた。

フレディーは知らないが、木の中、そして地面の中には、 来春に

生まれてくる葉っぱ達の命が宿っていた。

で良いですか？ 淀橋先生」

「……………」

淀橋先生が苦々しい顔をしながら私の言葉を無視して、黒板に向って授業を続けようとしている姿を見てカチンと来た。

何故、私の問いに答えようとしなののか。

いつも麻美には一言多いんだよって言われるけれどここは譲れなかった。

「先生？ 淀橋先生は生徒が問いに合っているか聞いているのに何故答えようとしなのですか？」

「正解だ、神楽坂。君に聞いた私が間違いだったよ。もう良いから座りなさい、それと授業もきちんと聞いて欲しいのだが」

「前向きに善処いたします」

政治家みたいに嫌味を込めて言うと淀橋先生は何事も無かったかの

様に授業を再開した。

4時限目の授業が終わり昼休みになると周りのクラスメイト達は机をガタゴトと動かし仲が良い友達と食事をし始める。

私立だからなのか給食と言う物が無くお弁当を持ってくるか、学食で食べるか購買で何かを買うかの選択が出来る。

チャイムと同時に麻美が私の前に来て私の机で弁当を広げ出した。

「もう、ミーナは授業中なのにボーとしてさ」

「英語の授業をまともに受けないのは今日だけじゃないじゃん」

「そうだけどさ授業態度とか内申に響くよ」

「中学なんかテストで評価されるから良いんだよ」

「そう言われたちゃったら私には何も言えないよ。ミーナは成績優秀だもんね、英検も1級を持っているし、TOEFLでも凄いスコアを持っているんでしょ。だから英語の授業なんてつまらないんだよね」

「そう言う訳じゃなくって」

「まあ、他の授業も似たようなもんか」

「もう」

そんな事を話しながら私もお弁当を広げると麻美の顔が今度は私のお弁当に釘付けになっている。

毎日の事なので気にしないでお弁当の蓋を開けると麻美の目がキラキラと輝いていた。

「うわあ、今日も美味しそうだね」

「いつもと変わらないじゃん」

「ええ、そうかな。毎日食べていると判らないのかな、この愛情がいっぱい詰まったお弁当の違いが」

「それは……」

「今日も大好きなパパの手作りお弁当か羨ましいな」

「しょうがないじゃんか、ママは居ないんだから」

私のママは私がまだ小さい頃に急性骨髄性白血病で永遠の別れをし

てママの記憶は殆ど無い。

そして今の歳に成るまでパパが色んな人の力を借りながら私を育ててくれた。

そんなパパを……

「ミーナは大好きなんだよね」

「好きとかじゃない」

「それじゃ、嫌いななの？」

「嫌いじゃないけど……」

「微妙な年頃だもんね、私達は。私だって親父が好きかって聞かれたら迷わず『嫌い』って答えるもん」

「それは仕方が無い事だつてパパが言つてた。遺伝子の問題なんだつて。男と女は遺伝子が違えば違うほど惹かれあい、似ている場合には拒む事が多いつて。それは近親間の……」

そこまで言つと麻美が呆れた視線を私に投げかけて来ていた。また、やつてしまったのかも。

「ミーナはパパさんと普段どんな会話をしているの？ 不思議だわ、普通はそんな会話はしないでしょ親子で。でもミーナのパパさんつて素敵だよ、私の親父なんかと大違いだよ。背が高くつてスマートで物腰が柔らかくてさ、それに若い！ もてるんだろうな、アレだけ優しかったら」

「そうかな、パパはママ一途だからね」

「でも、こんな事を言つるのはミーナのママに悪いけどもう10年以上経つんでしょ、再婚とか考えなかったのかなあ」

「それは……」

私だつて気になるし何度も聞いたことがある。

パパは身長も180センチくらいで痩せては居ないけどスマートで誰にでも優しい。

顔だつて私的にはイケてる方だと思う。

でもその度に『バーカ』つてはぐらかしてまともに話を聞いてもらえなかった。

だから私はママ一途なんだって思っている。

「それにミーナのパパさんは料理も上手だしね」

「でも、それ以外はまるつきり駄目駄目だよ。片付けなんて出来ないし、キッチンだけはいつも綺麗だけど。それはゴチャゴチャした所で料理をしたくないからって理由でさ」

「普段のパパさんってどうなの？　うちの親父なんかおっさん丸出しでさ、いつもジャージ姿で家でゴロゴロしててお母さんにいつも怒鳴られてるけど」

「うん、あんまり変らないよ。ソファでゴロゴロしてて、時々一緒に買い物に連れて行ってってくれて」

「はあ？　買い物に一緒に行くの？」

「うん、ウィンドーショッピングで欲しい物があれば買ってってくれて、食事してパパは少しだけお酒を飲んで帰ってくるの」

「ふうん、パパさんとデートしてるんだ」

「買い物だよ」

「あのね、男と女がそういう事をするのをデートって言うの。判った？」

「う、うん」

本当はパパの事が大好きなの。

でも麻美の言うとおり私達の年頃は微妙でファザコンって言われてしまえばそうなのかも知れない。

時々だけパパの仕草にドキッとしてしまう時があるの。

それは私がパパを親子ではなく一人の男の人として見てしまうからかも知れない。

「そんなデートまでしちゃうパパさんの事を授業中に考えていたと？」

「そんなんじゃないけど、子どもの頃の事をちょっと思い出していただけ」

「もう、ミーナは『おもひでぼろぼろ』の『タエ子』みたいだな」

「おーい、神楽坂。お呼びだぞ」

お弁当を食べ終えてそんな話をしてしているとクラスメイトの男子に呼ばれて、教室の入り口を見ると見慣れない男子生徒が立っている。

『またか』そんな事を呟きながら心を沈ませて教室の入り口に向うと男子生徒が覚束ない態度で話しかけてきた。

「あの、神楽坂さんにお話があるんですが」

「何の話？」

「あの、ここじゃ」

「ここじゃ話せない話なんか私は聞く気はないし、私は誰とも付き合う気は無いから」

そう言うと男子生徒が下唇を噛み締めて走り去ってしまう。

クラスメイト達から冷やかしの言葉が上がる。

「うひよ、また撃沈か」

「流石だな、月の女神」

「すげえ、まだ命知らずが居たんだ」

そんなクラスメイトを一瞥して自分の席に戻ると直ぐに麻美が話しかけてきた。

「ミーナ、あんな断り方をしないで話だけでも聞いてあげれば良いのに」

「同じでしょ、断るんだから。なまじ話しなんかを聞いたら期待させているみたいじゃない」

「まあ、結果は同じか。それにしても『ものけ姫』の『サン』みたいだよな。ツンデレというかクーデレと言うか」

「私の何処がデレているの？」

「ああ、ツンとクーは認めるんだ。デレはパパさんの隣に居る時じゃない！ 本当に鈍いんだから、誰が見ても一目瞭然でしょ」

麻美の言葉に何もいえなくなり俯いてしまう。

少しだけ顔が赤くなるのを自分でも感じ、誤魔化す為に麻美に話を振ってみる。

「そ、そんな麻美の好きなタイプはどんな人なのよ」

「もちろん、『ユパ様』！」

「はあ？ 『ナウシカ』の？」

「うん、それに『マルコ・バゴット大尉』に『おソノさんの旦那さん』」

「あのね、『紅の豚』のポルコ・ロツソに『魔女の宅急便』のパン屋の旦那さんって。親父趣味？」

「酷いよ、年上の方が好きなの。普段は口数が少なくて、それでもいざと言う時に颯爽と助けてくれる年上の人だよ」

話の内容どおり大久保麻美はアニヲタと言うよりジブリフリークで外見と同じ様な中身をしている。

けれど色んな事を私に気付かせてくれる大親友だった。

「でも、ミーナはパパさんが側に居る間は恋愛なんて無理かもね」

「だって、パパは私を一生懸命に育ててくれたんだよ。脇目も振らず恋もせずに。私だってパパはもてると思ってるもん。それなのに私が恋愛に現を抜かしている訳にいかないじゃん」

「あのね、恋愛も私達の年ごろじゃ大切な事なんじゃない？ まあ、

ミーナのパパさんは若く見えるもんね。どう見ても親子と言うより歳の離れた兄弟か恋人だよな」

「親子だもん、全然似てないけど。確かにパパはまだ32だけだよ」

「ふえ？ い、今なんて言ったの？」

「え？ パパの歳が32だって」

私がパパの年齢を言うと麻美の動きがピタリと止まりまるでお地蔵様みたいになって口をパクパクさせている。

確かにパパは若いと思うけど……

「み、ミーナのママって何歳だったの？」

「パパの6つ年上だから生きてたら38かな」

「信じられない、と言う事はパパさんって未成年の時からミーナを育ててるって事なの？」

「う、うん。そう言う事になるのかな。色んな仕事をしてたって言うってたよ」

だからこそ私は恋愛なんてしてられない、それにパパは普段はだらしなく見えるけど会社では凄く格好良いんだから。
そんなパパに憧れて私は勉強も特に英語は頑張ってきたんだもん。

お仕事

あれは、小学校の時に小夜ちゃんとパパの会社に見学に行つて、パパの格好悪い掃除姿を見た後のことだった。

私はヘソを曲げてしまつて、パパの仕事姿を見ずに帰つてきて。

友達の小夜ちゃんちに行つて約束どおり小夜ちゃんちのリビングで作文を書いていた。

だけどパパの仕事がお掃除屋さんだなんて書けるわけも無く、書いていたつてと言うより書く振りをしていた。

「ミーナちゃんのパパも私のパパとは違うけど、そうとうそうじゃ、お仕事をしているんですよ」

「う、うん。そうだよ」

「どんな事をしているの？」

「『えいぎょう？』つて言う所で働いてるんだつて、小夜ちゃんが教えてくれたんだ」

「小夜ちゃんつて誰なの？」

「パパとママのお友達だよ。今日、一緒にパパの会社に行つてきたの」

「ふうん、それでどんなお仕事してたの」

「あ、あのね。お掃除してた」

「お掃除？」

「う、うん」

私は恥ずかしくなつて唇を噛み締めて俯いてしまった。

そこに仕事がお休みだった小夜ちゃんのパパがやつてきたの。

小夜ちゃんのパパは熊さんみたいに大きな体でポロシャツにズボンを穿いて、リラックスした格好だったんだよ。

私のパパとは大違い、おじさんつて感じだった。

「いらつしゃい、美奈ちゃんだったかな」

「こんにちは」

私は真弓ちゃんのパパに挨拶するのが精一杯だった。

「おや、真弓と宿題でもしているのかな？」

「うん、パパの事作文に書くの。ミーナちゃんはパパの仕事を見たら掃除をしてたんつて」

「お掃除か、美奈ちゃんのパパも大変な仕事をしているんだね」

凄く優しくそくに微笑んでくれるんだけど、真弓ちゃんも真弓ちゃんのパパもなんだか感じ違う気がしたの。

なんだか恥ずかしくって悲しくなってきた。

「あれ？ でも美奈ちゃんのパパは営業のお仕事じゃなかったかな？」

「うん、『あいかしようじ えいぎょう2か』って言う所でお仕事をしているの」

「藍花商事の営業2課と言えば、私の会社と大きなプロジェクトを争っている会社じゃないか。確かそこに若手の凄腕係長が居るって噂を聞いた事があるな、たしか『かぐらざか』って言ったかな」

「パパだ！」

「へえ？ 美奈ちゃんつて」

「私、神楽坂美奈だもん」

「か、神楽坂係長が掃除つて……それじゃ……」

子どもだったから何で真弓ちゃんのパパがその場に腰を抜かした様にしゃがみ込んで頭を抱えてしまったのか判らなかつた。

その後は真弓ちゃんのママが現れて大騒ぎになって宿題どころじゃなくなつちやつたの。

マンションに帰るとパパが凄くしょんぼりしてソファに座つてて

パパの前には凄く怖い顔をした小夜ちゃんがパパに何か言つたの。

「ただいま」

「おかえり、ミーナ。今日はゴメンね」

「う、うん……」

「本当に優は、いくら大きなプロジェクトを勝ち取ったからって掃除は無いでしょ」

「仕方が無いだろ、癖なんだよ。大きな仕事をした後の息抜きなんだから」

「美奈、宿題はどうしたの？」

「もう書きちゃったもん！」

それだけ言っただけでその場に居るのが嫌で自分の部屋に逃げ込んでしまった。

その時に小夜ちゃんが『本当に優は美奈に嫌われるような事しかないわね』そんな言葉が聞こえてきた気がしたけれど宿題の作文の事で頭がいっぱいだった。

自分のベッドに突っ伏しているとドアをノックして小夜ちゃんが私の部屋に入ってきたの。

「美奈、宿題はいつまでなの？」

「金曜日の授業参観まで」

「授業参観があるの？」

「あつ。う、うん」

「その口振りは、パパに言ってないでしょ。授業参観の事を」

思わず口に出してしまい口を噤むと小夜ちゃんに睨まれてしまった。未だにパパに授業参観があるってプリントを渡せないでいたから。

「本当に親子そろってしょうがないんだから。なんでそんなにお互いに気を使うのかしら、美奈はパパがお仕事大変だからなんて思っているんですよ」

「だって私にはママが居ないしパパがママの分も頑張ってくれらんだもん」

「それで、パパが迷惑でもすると？ 本当に美奈はそう思っているの？ 私がパパの立場だったら凄く悲しいけどな」

「悲しい？」

「そう、大好きな美奈が何も言ってくれないなんて悲しいでしょ」

「だって、パパは美奈の為に夜遅くまでお家でお仕事してるんだもん」

子どもの頃から何となく判ってた。自分の為にどれだけパパが無理をしているか。

運動会にも遠足にも行事があると必ずパパは来てくれた。

でも時々携帯で難しい話をしている時がある、それは仕事のことだと思う。

それに行事の後には疲れた顔をしているのを知っている。

それは今だから判るのだけど休んだ分の仕事をしているからだって。だから授業参観くらい来てくれなくて良いと思ってた。

「判ったわ、それじゃ授業参観の事はパパに内緒にしてあげる。その代わり月曜日の午前中は私と出かける事、判った？」

「学校は？」

「私が連絡を入れておくから、良いわね」

「うん！」

小夜ちゃんがパパに内緒にしてくれる、それでパパに迷惑をかけないで済むと子供心に思ってた。

月曜日の午前中に小夜ちゃんに連れて行かれたのはパパの会社の藍花商事だった。

玄関ホールに入るとこの間の受付のお姉さんが笑顔で手を振ってくれる。

そして前から優しそうなスーツを着た男の人が女の人を後ろに連れてエレベーターから出てきた。

すると周りにいる人達の変化が違ってその男の人に挨拶をしている。

「代表、おはよう御座います」

「おはよう」

優しそくにきちんと返事をしながら、代表って呼ばれている人が私の顔を見るとしゃがみ込んで話しかけてきた。

「おはよう、お嬢さん。今日はどうしたのかな？」

「今日はパパのお仕事を見に来たの」

「そうか、お嬢さんのお名前は？」

「神楽坂美奈です」

「おお、2課の神楽坂君の娘さんか。可愛らしいな。そう言えば凜子君と瑞樹君の子どもはまだなのかな？ 凄く可愛らしい子どもになると思っただが、期待して待っているのだけどなあ」

「もう、だ、代表。お、お時間が」

代表って呼ばれている男の人の後ろで黒い髪の毛をポニーテールにして、黒ぼいスーツ姿の女の人が真っ赤な顔をしている。

「そうだな、時間が。美奈ちゃん、またね」

「うん！ バイバイ。おじさん」

私がそう言うとおじさんは優しくそうに私を見て手を降ってくれた。真っ赤な顔をしていた凜子さんって言う女の人は何だか必死に笑いを堪えているように見えて、代表って呼ばれているおじさんが居なくなると周りから笑いが零れた。

「もう、社長さんにおじさんなんて言ったら駄目じゃない」

「ええ、あのおじさんが社長さんなの？ だって社長さんってお腹が出てて剥げてるんじゃないの？」

「あのね、漫画の見すぎです。恥ずかしいから行くわよ」

「変なの」

エレベーターで3階に行くと営業フロアって案内があつて、営業1課と営業2課に真ん中の通路を挟んで分かれていて、小夜ちゃんに連れられてパパの居る営業2課に行ったの。

「おはようございます。今日は宜しくお願いします」

「いらっしやい」

小夜ちゃんが挨拶をすると直ぐに入り口の近くにいたスーツ姿の男の人が声を掛けてくれたの。

なんだか私達が来るのを知っていたみたい。

奥の机ではパパがスーツ姿で優しい目をして手を振ってくれたの。

「ああ、パパだ」

私が嬉しくって思わず声を上げるとフロアーにどよめきが上がったの。

「う、嘘！ 係長の娘さん？」

「メチャ、可愛い！」

「で、隣にいる可憐なお嬢さんは？ 係長の……」

ちよつとした騒ぎになって隣の営業1課の人たちも何事かと覗きに来てて……

「ほら、仕事をしろ。仕事！ 娘の美奈は僕の職場を見に来ただけだし、小夜は僕と美雪の古い友人だ。ちよつかいを出す奴は情け容赦しないから覚悟しておけよ」

「うわあ、怖！」

「係長！ 黒い物が出てます」

「良いんだ、いくらでも黒いモノを放出してやる」

「そ、外回り行って来ます！」

パパの職場は凄く楽しそうな所だった、和気藹々としていて皆が優しくって。

パパもなんだか楽しそうに仕事をしているの、ちよつとだけ小夜ちゃんと言っていたエリートマンとは違うけどね。

少しすると営業2課の中が慌しくなってきた。パパの顔もニコニコから真面目な顔になってたの。

「小夜ちゃん、もう帰ろうよ。パパ、忙しそうだし」

「もうちよつとだけ待ちなさい」

「う、うん」

落ち着かなくなつて小夜ちゃんにそう言うのと直ぐにパパが声を掛けて来たの。

「さあ、これからがパパの仕事の本番だよ」

「パパ、これから何があるの？」

「大切な打合せだよ」

「小夜ちゃん、やっぱり帰ろうよ。大切なお仕事の邪魔になるから」

「大丈夫だよ、ミーナ。パパにもう一度チャンスをくれないかな？
ミーナにパパの仕事振りをきちんと見てもらいたんだけどな」
「う、うん。判った」

パパが優しく私の頬に片手を当ててそう言ってくれた。

私は嬉しさと心臓がドキドキして何もいえなくなってしまう、小夜ちゃんとパパの後について行くと大きな会議場の隅で小夜ちゃんの隣に座らされて、少しすると外国の人達が何人も不思議そうな顔をしながら私と小夜ちゃんを見てから会議場に現れたの。皆が席に着くのを確認したパパが立ち上がって、今まで一度も聞いたことがない英語で喋り始めたの。

「さ、小夜ちゃん。パパは何て言っているの？」

「こちらから事前に連絡をせずに申し訳ないと思いますが、今日は私の娘が職場を見学に来ていますのでご了承ください。もし、不快に思われるなら退席させますが」

直ぐに小夜ちゃんが訳して聞かせてくれた。
すると「No problem」「Fantastic!!」なんて声が聞こえてきて、不思議そうな顔をしていた外人さん達が優しく私と小夜ちゃんを見てきたの。

小夜ちゃんが英語を話せるのは知っていたの、なんでも翻訳って言うお仕事をしているって聞いてたから。

でも、パパが英語を話せるなんて知らなかった。

パパが言っている言葉は判らないけれど資料を指しながら真面目な顔をして、説明を的確に受け答えしている姿は幼心に恋心を植え付けた瞬間でもあったのかもしれない。

そんな憧れから私は一生懸命に勉強する気になった、パパや小夜ちゃんみたいに格好良く英語をしゃべれるようになりたいと。

それに小夜ちゃんの言うとおりそこに居たパパはまさしくエリートマンだった。

授業参観

金曜日の授業参観の日がやってきた。

でもパパは来ない、小夜ちゃんが言わないって約束してくれたから。でも直ぐにそれは後悔に変わった。

「美奈ちゃん、今日はママが来てくれるの？」

「ううん、ママは居ないもん」

「それじゃ、パパが来るの？」

「パパはお仕事だもん」

「ええ、誰も来ないの？」

周りのクラスメイト達は授業が始まる前に訪れ始めたパパやママの姿を確認して、ザワザワと教室が騒がしくなってくる。

クラスメイトのパパやママは凄くオシャレな格好をしている。

そしてあれが誰のママだのパパだってヒソヒソ話をしているのが凄く羨ましかった。

本当は私も格好良いパパを友達に自慢したかったから。

でも、パパは来ない。

私がプリントを渡さなかったから。

小夜ちゃんが内緒にしてくれると言った時に、本当はパパに言って欲しいのにそう言わなかったから。

授業を知らせるチャイムがなると担任の花園先生がいつものジャー

ジ姿とは違うワンピースを着て教室に現れて授業が始まってしまう。

私は無性に悲しくなって机に突っ伏して涙を堪えた。

「はい、今日はお父さんやお母さんが見に来ているからって緊張しないで普段どおりに授業をしましょうね」

優しい花園先生の声が教室に響き渡る。

すると教室の後ろ側のドアが開く音がして皆の視線がドアに集まったけれど、自分には関係ない事だと思っただけで何もなかった。

「超格好良い！」

「うわぁ、素敵」

そんな声がクラスメイトから上がる。

「は、はいはい、静かにして」

「なんだよ、先生の方が緊張してらぁ」

男子生徒の声で教室がドツと沸き上がると花園先生の視線がチラチラと後ろのドアの方に行き何となく顔が赤くなっている。

そんな先生がちょこつと気になったけど私はそこにパパが居ないと思うと後ろを向く事が出来なかった。

パパに一言だけ言えばこんな思いはしなくても良いのに。

「先生、授業を始めてください」

「は、はい」

クラス委員長に言われて先生が授業を始める、そしてクラスの中で数人が作文の発表をしなくてはいけない。

今日だけは当たりません様にと神様をお願いをしていた。

「それでは今日は家族の仕事について作文を書いてきてもらいました。それを発表してもらいたいと思います。それじゃ神楽坂さん」

「……………」

この時ほど子供心に神様を恨んだ事はなかった、何で私なんだろうって。

先生が居る教壇まで行って作文を受け取り、自分の席に戻ろうと振り返った時に心臓が止まるかと思った。

だって教室の隅にはいつもの眼鏡をかけてビシッとグレーのスーツを着て、髪の毛を綺麗に後ろに流して仕事中だと思ったパパがそこにいたから。

パパはいつもに増して優しい瞳で私を見守ってくれていたの。それから後の事は頭の中が真っ白になって良く覚えていない。

私のママは私が産まれてしばらくして死んでしまった事、パパがママの代わりをしてくれて小さかった私を育ててくれた事、そしてパパはお家ではゴロゴロしている事、でも仕事中は英語を喋って凄く

格好良い事なんかを作文に書いた事を読んだ気がするんだけど……

授業の終わりを告げるチャイムの音が聞こえてきて、ハツとして教室の後ろを見るとパパが教室から出て行く所だった。

そんなパパの後姿を見て慌てて教室を飛び出した。

「パパ！」

「ん？」

私が息を切らしながら声をかけるとパパが廊下で立ち止まって振り向いてしゃがんでくれた。

「パパ、ゴメンなさい」

「ん？」

「黙っててゴメンなさい」

「ん、どうして言ってくれないのかったのかな？」

「だってお仕事が……」

パパが私の顔を真っ直ぐに見ている。私はパパが怒っているだろうと思って怖くてパパの顔をまともに見れなかった。

「ミーナ？　もしかしてパパが怒っているって思っているのかな？」

「う、うん」

それは蚊が鳴くような声だった。

「パパは嬉しかったけどな」

「えっ？」

「ミーナはパパの事を思ったから言えなかったんでしょ。パパこそゴメンね、ミーナにそんな思いをさせてしまったていたんだね」

何かをいわなくちゃと思ったけど私の声は声にならず涙声になってしまっていた。

するとパパが優しく抱きしめてくれる。

「でも、ちゃんとミーナの口から聞きたかったな。パパにはミーナが全てなのだから、パパはミーナが大好きだからね」

「うん！」

小学校の廊下に響き渡るくらい私はパパに抱きついて号泣していた。

そんな事があってから私はパパには何でも話したし、して欲しい事はちゃんと言葉にして伝えてきた。
それは中学3年になっても変わらない。

デート

「おーい、戻って来い！ ミーナちゃん、授業が終わったぞ」
「へえ？」

再び麻美に現実に取り戻されてしまった。

思い出に浸って居たかったのに。

「もう、何で引き戻すかなあ」

「ひ、酷い言われかただなあ、せつかく現実に引き戻してあげたのに」

いつの間にか午後の授業も滞りなく終わってしまったみたい。

そこで授業のノートを全く取っていない事に気付いた。

「麻美様、お願いが」

「ほほ、月の女神が私なんかにお問い合わせとは？」

「あの、その言い方すごく嫌なんですけど」

「誰が言い始めたか月の女神。でもぴったりじゃない。不健康ではない白い肌に軽くウエーブが掛かった綺麗な日本人離れた亜麻色の髪の毛。スレンダーだけどきちんと出ている所は出ていてクールな瞳に可愛いピンクの唇。女の私から見ても非の打ち所がないもん」

「麻美は言い過ぎだよ、褒めても何にも出ないんだから。お願いだからノートを写させてね」

「はいはい、判りました。貸しだからね」

「判ってる」

そして腕時計をみて約束の時間がとうに過ぎていくのに気付いた。

「うわあ、どうしよう」

「そういえば今日はパパさんとデートだったんじゃない。ほら急いで私も一緒に行つてあげるから」

「うん」

麻美と一緒に校門に向うと黒っぽいスーツ姿のパパが待ちくたびれているのが見え、少しだけ鼓動が早くなり頬が赤くなるのを感じる。そんな私の顔を見て麻美は嬉しそうにしている、癩に障るけど親友である麻美の前ではありのままの私で居られるのも事実だった。

「パパ、ゴメンなさい」

「ミーナ、遅いぞ。不審人物に間違われそうになったじゃないか」眉間に皺を寄せてはいるけれど決してその瞳に怒りの感情なんて微塵にも感じられなかった。

すると直ぐに麻美がパパに声をかけた。

「パパさん、お久しぶりです」

「おつ、麻美ちゃんか相変わらず可愛くて元気だな。いつもありがとうね、ミーナの事」

「嫌だな、ミーナとは親友だもん当たり前じゃないですか」

「ありがとうね。そうだ帰り際に会社の女の子にお菓子を貰ったんだ。こんな物で悪いけど麻美ちゃんにあげるよ」

「えへへ、嬉しい！ うわあ、本当に良いんですか？ ペーパーム

ーンのロールケーキだ」

「美味しいよねこのロールケーキは」

「はい！ 遠慮なくいただきます。ミーナまた明日ね！」

麻美はパパからケーキを受け取ると挨拶もそこそこで嬉しそうに走るように帰ってしまった。

親友と美味しいスイーツを天秤に掛けたらどちらが傾くのだろう。

そんな事を真面目に考えてしまう。

それにしてもパパは私と待ち合わせする時はいつも会社の女の子に貰ったってお菓子やケーキを持っているのが不思議だった。

「ねえ、パパ。聞いて言い？ どうしていつもお菓子を持っているの？」

「ん？ どうしてかな。会社の女の子に何処のスイーツが美味しいかなって聞いたら買って来てくれるんだけど」

「あのね、パパ。それってパパの気を引こうとしているんじゃないの？」

「ん、僕が甘い物好きだって知っているからじゃないのかな。ポタジエのキャロットチョコフランに枝豆のチーズケーキ、千疋屋は外せないかな」

「はいはい、パパにスイーツを語らせたらいくら時間が余っても足りないから」

「うわあ、余るって酷いなミーナは。スイーツは人間関係の潤滑油みたいなモノなんだよ、特に女子従業員が多いうちの会社みたいな所はね。派遣やら準社員やら正社員で大変なんだから」

「へえ、そんな女子従業員から人気なんだパパは」

「ん、どうだろ、僕にはミーナが居るからね」

相変わらずかわすのが上手いと言うかどう言う意味に取ったら良いんだろう。

私が居るからって…… 私が居るから彼女も作れないのかな？

私が居るから彼女が必要ないとか？

まさかそんな事はないよね、だって親子だもんね。

パパと月に1、2回は金曜日の放課後にデートするの。

デートって言ってもウィンドウショッピングをして晩御飯を外で食べるだけなんだけど、麻美に言わせると男女がそう言うことをするのをデートって言うんだって。

学校の最寄り駅から二つ目のパパの会社の近くの駅で降りていつもの様にショッピングをするんだ。

今日は何を強請っちゃおうかな。

「ミーナ、今日は何が食べたいんだ？」

「うんとね、たぬ……」

「たんたん、たぬきのき！」

「ストップ！」

慌ててパパの口に手を当てて塞ぐ、こうでもしないとパパは公衆の

面前でとんでもない言葉を連呼し始めちゃうから。

「もう、恥ずいよ。どうしてあそこは駄目なの？」

「居酒屋はまだミーナには早い。それにあそこは営業フロアの溜まり場になっているから気が休まらないから嫌なだけだよ」

「ああ、私に聞かれたくないあんな事やこんな事があるんでしょ」

「パパも一応、男だからね」

「ずるい、大人って感じで。私はまだ子どもだもんね」

「そうやって拗ねるミーナも可愛いな」

嬉しそうな瞳で私をいつも見守ってくれるけれど決してパパは私を子ども扱いはいしない。

そりゃ小学生以前は子ども扱いだったけどさ。

中学に入った頃からちゃんと1人の人間として対等に向き合ってくれる。

それが嬉しくつついパパに子どもの様に甘えてしまっけど、それは仕方がない事なんだよね親子なんだし。

「今日は何が良いかな、この間はイタリアンだったし」

「天ぷらでも食べに行くか？」

「天ぷら？」

「そう、カウンターの目の前で揚げてくれた熱々を食べるんだよ」

「行ってみたい」

「よし、了承した」

パパの会社がある最寄り駅はかなり大きな駅で駅の周りは良くも悪くも栄えている。

色々なお店もあるし色々な人が行きかっているけど不思議な事にパパと居ると怖くなかった。

不思議と言えば色々なお店の人がパパの顔を見ると声を掛けてくる事が多い。

それはパパの会社関係かなとも思ったけれどそうでもないみたい、中には見るからに如何わしいお店もあるんだもん。

パパに一度だけ聞いたことがあるんだけど上手くかわされちゃった

色々と付き合いがあるんだよって。

大人の付き合いって事なのかなって思ってたら古くからの付き合いだっけって教えてくれた。

でも、パパはあまり私に昔の事を聞いても答えてくれないし。

答えてくれてもせいぜいママと出会った頃の話止まりだった。

パパの子どもの頃の事とか私と同じ年だった頃の事が知りたいんだけどな。

パパが連れて行ってくれたお店はパパの会社と反対側の駅向こうだった。

いかにも老舗って感じで中学生がおいそれと行ける様なお店じゃないのが私にも良く判った。

「そんなに緊張しなくても平気だよ。まあ、創業100年のお店だからね」

「ひ、百年？ もう、そんな事を言われたら余計に緊張しちゃうよ。パパの馬鹿！」

「ふふふ、ミーナは可愛いな」

店内に入ると結構アットホームなお店で安心しちゃった。

それでも店内には会社の接待みたいなスーツ姿の人が多かったの。

「いらつしゃい、って優坊じゃないか。久しぶりだな」

「お久しぶりです。大将まだ生きてたんですね」

「あのな、優坊の孫を見るまで死んでも死にきれねえよ」

「それじゃ、今日は娘を」

「はあ？ その可愛らしいお嬢ちゃんってまさか……」

「僕と美雪の娘ですよ」

「ほお、そうかそうか。しかし美雪ちゃんにそっくりだな」

カウンターに案内されると直ぐにお店の大将にそんな事を言われてしまう。

このお店もパパの馴染みのお店って言うか古くからの知り合いみたい。

ママの事も知っているみたいだけど何処でママの事を訊ねても大抵同じ答えが返ってくる。

『お父さん（パパ）に聞くのが一番だよ』って、パパに聞いたって教えてもらった事がないんだよね。

お店の大将は板前さんと同じ格好をしていて小柄だけがっしりした体格で真っ黒に日焼けしてるおじさんって感じの人だった。

挨拶をしてカウンターに座ると今日もパパはウーロン茶を注文してくれる。

私は今まで何度もパパと外で食事をした事があるけれど、食事の時にパパがビールやお酒を頼んだ所を見た事がない。

「優坊は相変わらずだな」

「えっ、相変わらず？」

「あはは、嬢ちゃんは知らないんだね。優坊は食材の味が判らなくなるからって滅多な事がない限り食事の時は酒を飲まないんだよ」

「そうなんだ、パパは自分の事あんまり話してくれないんだもん」

「そりゃ優坊は照れ屋だからかな」

時々こうして知らないお店に来るのが凄く楽しいの、だってパパの知らない事を教えてもらえる事があるから。

パパはこの大きな街に結構前から居たんだって聞いたことがある、だから古い馴染みの店が多いんだって。

カウンターの向こうでは大将が私達に付きっ切りで天ぷらをあげてくれる。

私はお喋りをしながら好きな物を揚げてもらって熱々をお塩で頂く。パパは魚や野菜を中心に任せで揚げてもらっているの。

揚げたてで新鮮な食材は凄く美味しくていくらでもお腹に入るんだよね。

それにお刺身のネタも新鮮で……

「ん〜と、鰯に帆立に甘エビが良いかな」

「へえ〜感心するね。美味しい物を知り尽くしてるって言うか、良い酒飲みになれるよ」

「ええ、酒飲みは嫌だな。それにお酒の味はまだ良く判らないし」
「そうだよな、まだ未成年だもんな」

「うん、まだ14歳の神楽坂美奈です」

「神楽坂美奈ちゃんか、あれ？」

大将が何かを言おうとした瞬間、コツコツと木のカウンターを叩く様な音がすると大将の雰囲気が一瞬だけ変わった気がしたの。

「どうしたの？」

「あれ？ 何だったかな。駄目だな、この歳になると物忘れが激しくて。優坊、何だった」

「あのな、耄碌する歳じゃないだろ。大将の場合はアル中ハイマーか？」

「あんな、優坊。俺はそんなに飲兵衛じゃないぞ」

「じゃ、女将さんに聞いてみるか」

「いや、それだけは勘弁してくれよ。この間の特定健診で散々だったんだから」

また、何かを誤魔化された様な気がするけど今日もパパの知らないことを聞いたから良い気がするし。

美味しい天ぷらとお刺身も頂けたので満足してしまう。

ヴァン・シヨール

天ぷら屋さんを出ると外はすっかり真つ暗になっている。

お腹がいつぱいになり温まった体にちよつと冷たい北風が吹きぬける。

「うわあ、ちよつと寒いかも」

「ほら、ミーナ行くぞ」

パパが腰に手を当てて待つてくれる、恥ずかしいけれどパパの腕に抱きつくように腕を組むとパパの温かさがじんわりと伝わってきた。

特に何を喋るわけでもなく歩き始める。

いつもデートのメはパパの行きつけのワインバーで少しだけパパはお酒を飲んでから帰るのがいつものコースだった。

そのお店は大通りから一本裏通りに入った所にある隠れ家的なワインバーなんだよ。

半地下になっていて階段を下りて重厚な木のドアを開けると直ぐにカウンターになっていて、カウンターの中からバーのマスターが声を掛けてくれた。

「優ちゃん！ いらっしやい、嬉しいわあ」

「俺が来ただけでそんなに喜ぶつて事は不景気で今にも潰れそうなのか？」

「あのね、縁起でも無い事を言わないでちょうだい！」

ワインバー『vino』のマスターは結構有名なシニアソムリエなんだつてパパは言うけど、残念な事にそつち系の人の2丁目系つて言えば判るかな？

格好良いのは格好良いんだけどね。

黒いズボンに真つ白のスタンドカラーのシャツを着て第一ボタンを開けてラフなんだけどビシツとソムリエエプロンをして寒い時期は

黒いベストを着て、少し長い髪の毛を後ろで一つに纏めて男らしい格好なのにちよつとクネクネしているの。

「はいはい、どうせ私はパパには敵わないですよーだ。そんな所で突っ立ってないでお子様は座りなさい」

「パパ、ケンちゃんが意地悪な事を言っよ」

「け、ケンちゃん言わない！ もう相変わらず嫌な子ね」

「だってパパがマスターの本当の名前は……」

「それ以上、しゃべったらコルク栓をその可愛らしいお口に捻り込むわよ」

「ぶう、健太のくせに」

「何か言いましたの？」

「う、ううん」

本気で睨まれた気がする。

慌てて首を振ってしまふ。

ちよつとだけ怖いよ。

「相変わらず仲が良いな」

「どこみてんの？」

マスターと声が被ってお互いに顔を見合わせてソツポを向くとパパが嬉しそうに笑ってるの。

でも、その優しそうな瞳は何処と無く遠くを見ている気がしたの。

「マスター。ミーナと遊んでないでチンザノをくれ。もちろんエクストラドライだからな」

「はいはい。で、お子様には何を？」

「ヴァン・シヨー」

パパがそうマスターに告げるとチンザノが注がれた丸い氷が入ったロックグラスをバースプーンでかき回す手がピタリと止まって、マスターが何処と無く寂しそうな顔でパパを見ている。

「俺の顔に何か付いているのか？」

「いえ、もうそんな時期なのね。そしてそれだけ私達も歳を取ったって事ね」

「まあな」

雰囲気が一気に暗転してなんだか物静かないいつもの店内にもどって、パパにグラスを差し出すとマスターがカウンターの中のコンロに火をともしして何かを作り始めたの。

少しすると凄く良い匂いがして来て私の前にマスターがビールのジヨッキを小さくしたような可愛らしい少し背の高い取っ手つきのグラスを置いてくれて、その中から良い匂いが立ち込めてくるのが判ったの。

「うわあ、これ赤ワインでしょ」

「そうよ、ワインだけどアルコール分を飛ばしてあるから美奈にも飲めるはずよ」

今、美味しそうな湯気を上げているワインを目の前にして聞き逃しそうになったけれどマスターが『お子様』って言わずに私の事を『美奈』と名前で呼んだよね……

「あら、何か不満でもあるのかしら？ 春から高校生らしいじゃない義務教育が終わるのならレディー扱いしてあげないと失礼でしょ。そのつもりで優ちゃんはこれをオーダーしたの」

「ええ、でも私はまだ中三だよ」

「春からって言ったでしょ。それにちょうど今の時期に優ちゃんが美雪さんと出会ってこの店に来たのよ。その時に優ちゃんがオーダーしたのがこれなの。」

スパイス控えめでフルーツ大目のヴァン・シヨーつまりホットワイン美雪スペシャルよ」

「本当にママがこれと同じ物を飲んだの？」

「あのね、美奈。お客には嘘は言わないわよ。私はソムリエでありバーテンでもあるのよ。レシピは完璧よ、ベースのワインまでね」ママがパパと出会って初めて飲んだヴァン・シヨーに釘付けになっってしまう。

パパを見ると何も言わずにグラスを傾けている、その横顔をみてパパが遠くを見ていたのが判った気がした。

私の中にママを見てたんだって。

私にはママの記憶が殆ど無いけれど写真の中のママは何処と無く私に良く似ているの。

娘の私がそんな事を言うのは変だよね似てて当たり前だもん。

ママスペシャルのヴァン・シヨールは凄く美味しかった。

ほのかにスパイスの香りがしてフルーティーで甘くて、体が芯からあつたまつて。

生まれて初めて飲んだお酒の所為か私は知らない間に眠りに誘われていた。

「あら、あら。気持ち良さそうに寝ちゃったわね。優ちゃん、あんた本当に真実を告げる気なのね」

「そのつもりで今まで育ててきたんだ。その先は美奈の選択次第だな」

「何かあれば直ぐに言いなさい、力になるから。迷惑がかかるなんて気にしたら承知しないからね。私達もこの街もあなたが居たから今があるの。最近はずっとだけ悪さしている輩が居るみたいだけどね」

「まあ、そのうち何とかするさ」

その時はパパがママの為に頼んだヴァン・シヨールを飲ませてくれた事がただ嬉しくって。なぜマスターが私を急に大人扱ったのか、パパが私にママをダブらせていた気持ちに気付かないでいた。

告白

クリスマスがあつという間にやってきて親友の麻美達と大いに盛り上がり騒ぎきつて青春を謳歌した。

お正月は毎年の様に小夜ちゃんが家に来て新年を迎えた。

いつもと変わらない、変るなんて思ってもいなかった年末年始の行事が過ぎると、あつという間に卒業シーズンになっていた。

私立青城中学はエレベーター式でよほどの事が無い限り私立青城高等学校に進む事が出来る。

だからこそ私達は受験なんかと無縁で中学最後の冬を満喫する事が出来た。

パパと小夜ちゃんに卒業を祝ってもらって入学式までは麻美達と買い物をしたりして過ごしていた。

そして高校の入学式を数日後に控えていた。

その日も麻美達とショッピングしたりファーストフードを食べながらこれからの高校生活の事なんかを話して、夕方にマンションに帰るとリビングに小夜ちゃんとパパが居たの。

「ただいま」

「おかえりなさい、美奈」

「あれ？ 小夜ちゃんだ。パパ、ただいま」

「ああ、おかえり」

なんだか普段のパパとは雰囲気が違うのに気が付いた。

凄く硬い表情をしていて、パパに落ち着きが無くって緊張しているのが直ぐに伝わってくる。

こんなパパの姿を私は生まれてから一度も見た事が無かったから不思議で、心の奥がザワザワし始める。

嫌な予感とでも言えば言いのだろうがパパから伝わってくる雰囲気に居心地が凄く悪い。

そんな空気が嫌で私から声を掛けた。

「今日はどうしたの？ ああ、皆でご飯を食べに行くとか？」

「ミーナに大事な話があるんだ。そこに座ってくれないかな」

「え？ 私に大事な話？ なんだろう良い物でもくれるのかなあ」
いつも以上に明るく振舞うけど空振りだったみたい。

パパの肩が大きく上下して深呼吸をしているのが判った。

そして真っ直ぐに私の瞳を見詰めながらパパが口を開いたの。

それはこれからの私の人生を大きく揺れ動かしてしまう言葉だった。

「ミーナはもうすぐ高校生だ。自分自身で考えてそれを自分自身の言葉で伝える事が出来る歳だよ。だからあえてこの時期に本当の事を話そうと思う」

「本当の事？」

「そう、多分。僕が言葉で言っても信じてもらえないだろうと思っ
て公的な書類を役所から取り寄せたんだ」

そして一呼吸置いてパパは静かに私に告げた。

「ミーナは僕と美雪の子どもじゃないんだ」

「えっ？ パパ、今なんて言ったの？」

「ミーナの母親は美雪だけど、僕とミーナには血の繋がりが無いんだ」

思わず自分の耳を疑い聞き返してしまう。信じられない言葉がパパの口から紡ぎ出されていた。

私がパパの子どもじゃない、そんな冗談みたいな事を信じられるわけでもなく。

悪い冗談を真面目な顔をして話しているパパが信じられなかった。

「そんな事を言う、パパなんか大嫌い！」

「今まで隠していてすまなかった」

思わず声を荒げてしまい、我に返るとパパがテーブルに頭がくっ付くんじゃないかって言うくらい頭を深く下げている。

小夜ちゃんの方を見ると哀しそうな瞳でテーブルの上に置かれている一枚の紙を見つめていた。

「これは何？ 戸籍妙本？ 私の戸籍だ……」
あまりにも突然の事で口に出して確認しながらじゃないと体が思うように動いてくれない。

パパが役所から取ってきた戸籍妙本を手にとって生まれて始めて見る。

本籍地は住んでいるマンションの住所と同じで筆頭者の欄には『神楽坂 優』とパパの名前が書いてある。

そして私の名前と生年月日、それに……母の欄にはママの名前があるのに父の欄はあるはずの名前が記載されてなく空白のままだった。何度も何度も確認するけれど筆頭者以外の場所にパパの名前は書かれていなかった。

全身から力が抜けてソファに体が沈み込んでいくのが判る。

「パパと私の関係って何？」

「法律上では妻の子と言うことかな」

「そんなのが聞きたいんじゃない！」

「僕は例え血が繋がっていなくてもミーナは僕の子どもだって思っているよ」

「それじゃ、何でこんな知らなくても良い事を曝け出すの？ 酷いよ」

涙が止め処もなく溢れ出す。手で拭いてもせずにパパに嘘だつて言うて欲しくってパパに詰め寄ると小夜ちゃんが静かに口を開いた。

「知らなくても良い事じゃないでしょ。美奈は知らないといけない事なのよ。これからの人生にはとても大切な事だから」

「これからの私の人生？」

「そう、戸籍を見る機会なんて一生の間でそんなに多くない事よ。高校入学の時でさえ昔は戸籍なんかが必要だつて時もあるけれど今は違う。最初に目にするのは結婚する時かもしれないわね。大好きな人が出来て結婚しようとしたら父親が優じゃなかったなんて事が判つたら、美奈ならどうする？」

「結婚なんか出来ないかもしれない」

「それじゃ、もう一つ小学生の時にこの話を聞かされて美奈は理解できる？」

「それも無理だと思う」

小夜ちゃんに言い聞かすように言われて感情的になりそうだったのに少しずつクールダウンしていくのが自分自身でも良く判った。

それでも決して納得した訳じゃない、それじゃ私の本当の父親は誰なの？ それを思いのまま言葉にした。

「私の本当の父親は誰？」

「ミーナの本当の父親は……」

パパが告げた事は本当なのだろう、私の本当の父親の事はパパにもママの親友だった小夜ちゃんにもママは決して話さなかったと言う事だった。

その理由すら今はもう判らない。

ママは私が幼い頃に永遠の別れをし、本当の父親の事も告げずに旅立ってしまったのだから。

パパは私が望むなら本当の父親の所在を探そうかと行ってくれるけど、それだけはしたくなかった。

何故って？ ママが愛したパパにすらママは話せなかったと言う事だもん。

高校入学

その日から少しだけ私は外れてしまった。
ある意味、高校デビューと言う事なのだろうか……

高校の入学式当日は私の心と裏腹に、桜が舞い散る清々しい青空の
天気だった。

中庭のホワイトボードに張り出されたクラス別けが書かれている紙
を確認していると後ろから声を掛けられた。

「ミーナ、おはよう。また同じクラスだよ。高校生になっても宜し
くね」

「おはよう、麻美。そうなんだ。それじゃ教室に行こう」

「だ、大丈夫なのミーナ？ 顔色悪いよ」

「平気だよ、ちょっと色々な事があって寝不足なだけだから」

校内では早々とクラブの勧誘が始まっていて、とりあえず教室に向
かう。

麻美と歩き出すと高校入学早々に嫌な奴が目に入った。

それは狐が眼鏡を掛けているような中学の英語教師の淀橋先生だっ
た。

「うっ、なんであいつが居るんだろう」

「さあね、気になる生徒が居るんじゃない。校舎は別でも中学と高
校は自由に行き来できるからね」

「でも中学生や中学の先生が高校の方に来るなんて珍しいじゃん」

「ミーナの事が気になるんじゃないの？」

「や、やめてよ。気色悪い、冗談でも吐き気がするよ」

クラス分けされた教室に向い担任の説明を受けて体育館で入学式が
始まる。

何処の入学式も同じ様な物なのだろう欠伸を我慢しながら耐えてい
ると麻美がそれに気付いて笑いを堪えていた。

入学式の後には教室に戻り始業式と簡単なオリエンテーションがあった気がした。

気がしたというのは私がぼんやりと窓の外を眺めていて殆ど参加していない状態だったから。

そんな私に担任が何も言わなかったのは成績の所為なのか内申書の所為なのかは判らないけれど注意されるような事は無かった。

一通り高校生活初日の予定が全て終わると麻美に拉致されて、麻美が前々からチエックしていた高校近くの喫茶店に連れ込まれていた。その喫茶店はカジュアルだけど落ち着いた音楽が流れていて、ゆっくりと話が出来ると雰囲気だった。

「このケーキが美味しいんだよ。お勧めはやっぱリショートケーキかな。シンプルだから一番パティシエの腕が判るからね」

「そうなんだ」

「で、何があつたのかな？」

「……別に」

「親友の私にも話せない事なんだ」

とりあえずケーキセットと紅茶を頼む。しばらくすると良い香りのする紅茶とショートケーキが運ばれてきた。

紅茶に口をつけて麻美を見るとガラス越しに外を歩く人の流れを見ている。

私から話し始めるのを待っているのだろう。

普段はムードメーカーでおちゃらけた態度をしているけれど、私と2人っきりの時は落ち着いてきちんと向き合ってくれる。

そんな麻美だからこそ親友としていられるんだろうと思う。

そんな友達に隠し事をするのが嫌で重い口を開いた。

「パパに入学式の前に告げられたの。私は本当のパパの子どもじゃないって」

「えっ、それってパパさんとは血が繋がっていないって言う事なの？」

「うん、私はママの連れ子なんだって」

「それじゃ本当の父親は誰なの？」

「パパも小夜ちゃんも知らないみたい。ママが誰にも言わずにいたから」

「そりゃ落ち込むよね。いきなり実の子じゃないなんて言われたら、大好きなんだもんね、パパさんの事が」

「なんだか大きな溝が出来たみたいで、どうしたら良いのか判らなくって」

「今のままで良いんじゃないの？ パパさんの事だからミーナは僕の子どもだよって言うてくれたんでしょ」

「どうしてそんなことまで麻美に判るの？」

「だって、パパさんはどんな時でもミーナの事を一番に考えてくれるでしょ。でもやつぱり意識しちゃうかな、ミーナは親子以上にパパさんの事が好きなんだもんね」

何も知らなければ今までどおり変わらない関係だった。

でも、今は知ってしまった。

パパとは血が繋がっていないという事を。

それは憧れだったパパを恋愛対象と見てもおかしく無いと言う事だった。

世間一般には認められないかもしれない。

でも私はパパが好きで……

怖かった、私がパパを一人の男性として見た時にパパは私をどう見てくれるんだろう。

やはり娘としてしか見てくれないのだろうか。

あの日の話には続きがあった。

「ミーナは義務教育が終わったとは言え未成年だからね。僕にはミーナを成人するまで見届け育てる義務がある。でもミーナがこんな僕と一緒に暮らすのが嫌ならば寮生活をしてもいいんだよ。でもアパートを借りての一人暮らしは勘弁して欲しい、ミーナの事が心配

だからね」

「もしも、寮が嫌なら私のマンションに来なさい。私は独り者だから使っていない部屋もあるしね。それなら優も安心でしょ」

「な、なんでパパも小夜ちゃんもそんな事を言うの？ 私が邪魔だから？ 私が居たらパパに恋人が出来ないから？」

「それは違うよ。これからはミーナ自信で考えてミーナがこれから歩き出す道を決めていって欲しいからだよ。世の中には色々な選択肢があるそれをミーナ自信で選んでいくんだ」

その時に初めて『vino』で何故パパが私にママが飲んだのと同じヴァン・シヨーをチョイスしたのか、マスターがどうして私を1人のレディー扱ったのかが理解できた。

あの時にパパは私の中にママを見ていたのではなく私が成長した姿を見ていたんだ。

パパと小夜ちゃんの事だから私が他で暮らしたいと言えば直ぐに行動を開始して、数日後には私は新しい生活を始められるだろう。しかし、それはパパと離れる事を意味する。

今の私にはパパと離れて暮らすなんて有り得ない選択肢だった。

「このままじゃ駄目なの？」

「駄目じゃないよ。それがミーナの選んだ選択肢ならね」

パパの言葉が硬く感じる、子どもが親から離れていくのは自然な事なのだろう。

それを促すのが親の役名だ。だとしたらパパもそうなのかな？

硬い言葉で私を少しだけ遠ざけている気がする。

「まだどうしたら良いのか判らなよ、急に選べなんて言われても」

「そうだね、ゆっくりと考えて答えを出せば良いんだよ。たとえ選んだ道が間違っているとしてもミーナはまだ若いんだから何度でもやり直せるからね」

パパから衝撃の真実を突き付けられた夜はパパと小夜ちゃんが作ってくれた夕食を食べた。

パパも小夜ちゃんも色々と考えているのだろう言葉少なく、美味し

いはずのお料理も美味しく感じられなかった。

「それで、ミーナはどうする事にしたの？」

「えっ、保留と言うかまだ決める事なんか出来ないからとりあえず今のままでよ」

「そっか。でもパパさんって凄いね」

「何が凄いの？」

「もう、本当にミーナは幸せもんだよね。真面目に考えた事無いの？」

麻美にそんな事を言われても何を言われているのか判らなかった。

「だって……」

「だってじゃないでしょ。ミーナママはミーナが小さい時に亡くなっただんでしょ」

「う、うん。あまり覚えてないけど2歳の頃だった」

「ミーナが2歳の頃ってパパさんは何歳だったの？」

「うんと19歳かな……」

真面目な話をする時には麻美はきちんと理解できるように、私につずつ確認するように聞きながら話をしてくれる。

麻美が言おうとしている事が何となく判ってきた。

「本当にミーナは勉強以外になると駄目だよ。パパさんの事なんて言えないよね」

「だって今まで本当のパパだった」

「それは重々承知。私が言いたい事はそこじゃないよ。ちゃんと聞いてくれる。私はミーナにパパさんの歳を聞いた時から不思議に思ってたの。パパさんがミーナの本当の父親なら15歳か16歳の頃にはミーナママと恋愛関係にあったと言う事だよ。でも本当の父親じゃなかった。どう言う意味か判る？」

「ええ、パパとママが出会ったのは私が産まれた後だと言う事？」

「だって変だと思わないの？ 高校生が妊婦さんに恋をする？ まあ付き合い始めて妊娠がわかったのかもしれないけどそれじゃ不自

然だよ。そんな時期に付き合い始めたのならパパさんが相手の男性を知っていてもいい筈だよ。」

「でもパパはママから知らされていない」

「これはあくまで私の考えなんだけれどミーナが産まれる前に2人が出会った可能性は低いと思うの。そして産まれた後だとしてらミーナが1歳頃だと思う。それまでミーナのママは子育てで精一杯で恋愛どころじゃないと思う」

「どうして麻美にはそんな事が判るの？」

「ミーナには私に父親が居ないのを話したよね。私の母も未婚の母なの。つまり私も私生児だから。母がどんなに苦労をして私を育ててくれたか判っているつもりだし、父親が居ないのを今まで一度も不幸だと思ったことなんて無いもん」

「凄いい事を麻美は平気な顔をして私に話している。」

確かに麻美は父親が居ないと言う事を話してくれた事がある。

その時は離婚したか私のママの様に死んでしまったのかと思っていた。

そして『私も』と言う麻美の言葉で私自身も私生児なんだと気付かされた。

「本当にパパが居なくて辛いつて思った事ないの？」

「それじゃミーナに聞くけどママが居なくて辛いと思っただ？ 違うでしょ。ミーナにはパパが居てくれる。そして私には母が居てくれた」

「でもね、麻美のママは本当のママで私のパパは……」

「本当のパパじゃないと駄目なの？ 話が少しずれちゃったけれどミーナが高校卒業して直ぐに2歳足らずの子どもを自分が育てるなんて覚悟出来る？ こんな言い方は酷いかもしれない、愛した人の子どもかもしれないけれど自分とは血の繋がりが無いんだよ。私にはそんな覚悟は出来ないな」

私にだってそんな覚悟は出来ないと思う。

でもその時はママの事をパパが深く愛していたからだとしか思えな

か
っ
た。
。

心配

高校生になり数ヶ月が経ち学校には慣れたけれど、普段の生活は今までどおりという訳には行かなくなっていた。

パパは変わらず優しいけど少しだけ距離を感じる時がある。

それは親離れさせるためなのかもしれないけれど私にはもどかしく、そして私はパパを異性として意識してしまい甘える事が出来ないでいる。

年頃と言えばそう言う年頃なのかもしれない。

買い物も友達（主に麻美と）行く様になり、パパと出歩く機会は殆ど無くなった。

これが普通の高校生と親の距離なのかもしれない、それでも心のどこかではパパに甘えたい気持ちが続いていた。

「ミーナ、また過去を彷徨ってるの？」

「違うよ、ただ外を歩いてるカップルを見てただけ」

「彼氏でも作ったら人生変わるかもよ」

「そう言う麻美はどうなのさ、彼氏でも出来たの？」

「あはは、それは無いかなあ。でもミーナは相変わらず告られる事、多いんですよ」

「本当に面倒臭いんだよね」

同級生や上級生までもが幼く見えてしまい心がときめくどころか嫌悪さえ感じてしまい、必然的に冷たい態度を取ってしまう。

それ故に月の女神から氷の女神なんて言われる様になってしまった。なんで私が女神なのかさえ自分自身では未だに理解できなかった。

「デレるところが無くなったらツンとクーが顕著になったって言うか愛想笑いくらいしてあげれば良いのに。そんなんだから上級生のお姉様方に睨まれちゃうんだよ」

「だって仕方が無いでしょ。私は嫌がってるのに相手が言い寄って

くるんだから。それを僻まれたって私の責任じゃないし私にはどうする事も出来ないでしょ。それなら氷やブリザードなんて言われていた方が100倍マシだよ」

「それと夜遊びするのも程ほどにしておかないとパパさんが心配するよ」

「心配するわけ無いじゃん。パパだって会社の若い女の子と宜しくやっってるんだから」

「ふえ？ それって恋人が出来たって事なの？」

「どうかな、何回か違う女の子と仲良くデートしているの見たことがあるもん」

「で、焼きもち焼いて夜遊びなんだ。それでミーナは態々パパさんの会社の近くで遊んでるんだよね」

「そうじゃないよ、あの辺りは知り合いの店も多いからだよ」

「でも良くない噂も聞くし危ないよ」

「大丈夫だよ、麻美は心配しすぎだよ」

でも、麻美の心配は現実の物になる。

それは夏休みを控えた週末の事だった。

いつもの様にちよつとだけ大人ぽいワンピースを着ておしゃれをして夜の街をブラブラしながら、時間があれば時々パパに良く連れて来られたワインバー『Vino』に顔をだしてマスターとお喋りをするのが楽しみになっていた。

「美奈、いい加減にしなさい。ここは未成年が来て良い店じゃないし、夜の街は危険がいっぱいなものよ」

「もう、マスターのお説教を聞きに来たんじゃないもん。サングリアが飲みたくて来たの」

「あなたに飲ませるワインなんてこの店には置いてないわよ」

「意地悪、じゃ良いもん、ほかのお店で飲むから」

「はあく絶対になら飲ませてあげる。その代わり飲みたくなったら必ず一杯だけなら飲ませてあげる。その代わり飲みたくなったら必ずこ

「こに来なさい良いわね」

「やったー、ありがとう。ケンちゃん」

「ケンちゃん言わない!」

マスターは何だかんだ言っても私に1杯だけなら飲ませてくれる。それもサングリアだけなんだけど、それも殆どジュースに近い物だつて判る。

前に一度だけパパが飲んでいたチンザノを一口飲んだ事があるけれど、その時は訳が判らなくなり大騒ぎになりそうになった事がある。良く覚えていないのだけどマスターと男の人が介抱してくれて気が付いたらお家のベッドの中だった。

それ以来、マスターはサングリアしか出してくれないし私もサングリアしか頼まないことにしている。

まあお酒には変わりないけどね。

「本当にしょうのない子ね。優ちゃんの育て方が悪かったのかしら」
「私の責任だもん」

「そう思っているのなら夜遊びも程ほどにね。ゲーセンなんかで知らない男の子とはしゃいでいちゃ駄目よ」

「えっ、何でマスターがそんな事を知っているの?」

「この街はそう言う街なの。特に私みたいなアンダーグラウンドにいた人間は横の繋がりが広いのよ。それに優ちゃんはこの街では顔が広いのを知っているんでしょ。その優ちゃんの娘が夜遊びなんてしていたらそんな情報は直ぐに耳に飛び込んでくるわ」

「マスター、何でパパはそんなに顔が広いの? 仕事柄?」

「それもあるけれど、優ちゃんは私達の英雄だもの」

「あのパパが? 信じられないよ」

「信じられない?」

「無理だよ」

マスターは嘘を付く人じゃないけれど優しいだけ取り得のパパが英雄だ、何て信じられなかった。

あれはいつの事だろうちようど今頃の季節だと思っ。

パパとデートして『vino』に初めて連れて来られた帰りだと思っ、初めてワインバーなんか連れて来られて嬉しくってはしゃぎ回ってた。

「ミーナ、危ないよ」

「へーきだもん。きゃっ」

「すみませんでした」

誰かにぶつかり尻餅を付くとパパがぶつかった人に頭を下げていた。

「危ないって言ったのに」

「ゴメンなさい」

パパが私を抱き上げるように立たせてくれると男の人の罵声が聞こえた。

「人にぶつかってゴメンで済むと思ってるのかあ？」

「そう言われましても子どもがぶつかったのは謝りますし。怪我をされた訳ではないでしょ」

「はあん？ 怪我してなけりゃ謝れば済むのか？」

「本当に申し訳御座いませんでした」

一生懸命にパパが謝っているのに怖そうなお兄さんはいきなりパパの胸倉を掴み揚げたの。

周りの人は見てみない振りをして通り過ぎていくだけ。

私が誰かに助けを求めようとした時にパパの体が目の前で倒れた。

怖そうなお兄さんを見ると拳を握りながら不思議そうな顔をして、パパの体を蹴り飛ばして人込みに消えていった。

「参った。ミーナ怪我は無いか？」

「パパ！ ゴメンなさい」

自分の不注意でパパが殴られて蹴られたのが悲しくって涙が溢れてくる、パパに謝りながら抱きついてた。

「ふうん、そんな事があったのね」

「パパはその後で格好悪い所を見せちゃったねって言ってたから。」

喧嘩なんてしたことないんだと思う」

「そうかしら、私は素敵だと思っわよ。だって相手はガラの悪いチンピラみたいだったんでしょ。もし美奈に何かあったら困るでしょ。謝って自分が殴られて事が収まるのなら優だったら躊躇わずそうするわよ」

「でも、女の子としたら守って欲しいじゃん」

「守り方も色々よ。美奈をこんなに立派なレディーに育てたんだしね。優は半端なく強いわよ、あんなに優しいんだもの」

「優しいと強いなの？」

「少し違っわね。人は守るものがあればいくらでも強くなれる。そして時には鬼にもね。まあ優は名前の通り優しいから優柔不断に見えるけれど頑固よ、そうじゃなきゃあんな事出来ないもの」

「あんな事？」

「あら？ お喋りが過ぎたみたい。美奈も飲み終わったのなら帰りなさい。優に知られたら私が只じゃ済まなくなるからね」

「はい、マスターがパパに嫌われたら遊びに来られなくなっちゃうもんね。バイバイ！」

私がかウンターを立ててドアを開けると奥から人が出てきた気がして慌てて外に飛び出した。

「あなた、その格好って……本当に頑固なんだから」

狼

いつもなら直ぐに大通りに出て帰るのだけだ。

その夜は大きな満月が出ていて、明るい大通りを歩く気になれなかった。

しばらく月明かりの中、人通りの無い裏通りを歩いていると3人の見知らぬ男が声を掛けてきたの。

見るからに遊び人風でストリート系とかヒップホップ系と言えば良いのだろうか、腰でズボンを着いていて派手なシャツを着て顔中ピアスだらけで見るからにヤンキーだった。

1人は金髪、もう1人は茶髪で3人目は黒髪だけどドレットヘアで不潔そうにしか見えなかった。

「おお、君。可愛いじゃん」

「ねえねえ、僕達と遊ぼうよ」

「楽しい事しようよ」

無視をして通り過ぎようとする茶髪の男に腕を掴まれてしまった。

「おいおい、無視かよ」

「離して下さい」

「嫌だつて言ったら人を呼ぶ？　こんな時間にこんな裏道を歩いている奴が悪いんだよ」

「離して！」

爬虫類の様な気持ち悪い笑みを浮かべている茶髪の男の腕を振り解いて走り出した。

心臓の鼓動が恐怖で跳ね上がり、周りの音が消える。

必死に逃げるけれど、男達はふざけながら追い掛けてくる。

直ぐ後ろに男達の気配を感じ振り向こうとすると夏らしいオシャレなグラディエーターサンダルが仇となり躓いて転んでしまった。

「うっひょ！　生足だ堪らねえ！」

「細！ 超好み」

「あれ？ 高校生ぐらいじゃねえ。まあ関係ねえけど」

慌てて捲くり上がっているスカート裾を直すけど腰が抜けて動けなくなってしまうと、声を上げようとしても恐怖のあまり声にならなかった。

男達が笑みを浮かべながらジワリとにじり寄って来た。

「い、嫌。来ないで」

「えへへへ」

「嫌だ、来ないでよ」

自分の愚かさに情けなくなり涙が溢れ出す。

金髪の男がニヤ付きながら私にむかって腕を伸ばしてきた。

もう駄目だ、本当にそう思った。

そしてパパの顔が脳裏に浮かんだ。

「パパ、ゴメンなさい」

涙声で声にならなかった。

突然、月明かりが遮られ。

私の頭上を黒い影と共に風が駆け抜ける。

驚いて思わず顔を上げると私に向い腕を伸ばしていた金髪男の顔面が無残に拉げ、数本の前歯が血飛沫と共に飛び散るのが見える。

吹き飛ばされた金髪男はアスファルトの上を数回転がって動かなくなつた。

倒れている金髪男の傍らには長身の男の後ろ姿が見える。

男は黒いハイカットの靴を履き、黒ばいカーゴパンツの様な物を着ている。

そして上着は半袖で体にフィットしたハイネックの黒いアンダーシャツの様な物を着て、その上に黒いミリタリーベストの様なものを着ている。

黒ずくめの格好より数倍目を引いたのが髪の毛の色だった。

街灯の少ない裏通りで月明かりに照らされた髪の毛はキラキラと銀

色に輝いて見える。

「んだ？ ざけんな！」

茶髪男が黒ずくめの男に殴りかかろうとすると銀色の髪がストンと下に落ち。

暗い裏路地に不思議な青と金色の光の軌跡が孤を描くと茶髪男が足を払われて倒れる。

間髪入れず黒い影は茶髪男に拳を振り下ろすと何かが碎けるような鈍い音がして、茶髪男の口から何か溢れ出てきた。

それを見たドレット男が逃げ出そうとすると再び青と金色の光りの軌跡が流れる。

黒い影がドレット男の後頭部に蹴りを叩き込むとドレット男はその場で崩れ落ちて動かなくなった。

それは瞬く間の事なのに私には全てがスローモーションに見えて銀色の髪と青と金色の光りの軌跡に見蕩れてしまっていた。

「ガキが俺達の闇の世界で何をしているんだ？」

男の冷たい声で私は我に返った。

私が見上げると男は凍り付く様な視線で私の事を見下ろしている。でも私は男の瞳を見て息を呑んだ。

「綺麗……」

恐怖なんか吹き飛び思わず口からそんな言葉が漏れていた。

銀色の髪が風に靡き男の左目は吸い込まれそうな青い瞳をしている、そして右目も不思議な琥珀色をしていて両方の瞳が野生動物の様に月明かりを浴びて青色と金色に光っている。

「あなたは誰なの？」

「今日は見逃してやる。大人しく帰れ」

私の質問には答えずに冷たい台詞を残して男が背を向けて歩き出した。

私は助けてもらったお礼を言っていないことに気付き勇気を振り絞って男に声をかけた。

「待って……痛い！」

立ち上がるうとするとう右足に激痛が走った。

躓いて転んだ時に捻ってしまったのだろう、思わず足首を押えて蹲ってしまう。

すると不意に腕をつかまれ力任せに立たされた。

「痛いよ！」

私が生を上げたのと同時に私自身の体も宙に浮いた。

気付くと私は男の肩に担がれている。

金髪男達に襲われそうになった恐怖感が戻って来る。

「嫌！ 離してよ！」

「ガタガタ騒ぐな！ マジで売り飛ばすぞ！」

男の怒声が暗がりの裏通りに吸い込まれていく。

私は恐怖に震え声押し殺して泣く事しか出来なかった。

しばらく男が私を担いだまま歩くと今度はどこかの地下にでも行くのか階段を下り始めた。

そして木のドアをノックしている音が聞こえる。

あれ？ ここは……

「はいはい、開いてるわ……」

聞き覚えのある声があった瞬間にドアが開き、無造作に落とされそうになり誰かが体を支えてくれた。

「美奈！ 何があつたの？」

その声は『Vino』のマスターの声で恐る恐る私が顔を上げると心配そうなマスターの顔が見えた。

その瞬間、私は今までの恐怖が安堵に変わり堰を切った様に大声をあげて泣き崩れてしまった。

どれ位時間が経つたのだろう。

パパにはマスターから連絡をしてもらい、私はマスターに捻挫した右足の応急処置をもらってカウンターの椅子に座らされてカウンターに突っ伏していた。

銀髪で不思議な色の瞳を持つ男の人は気が付くといつの間にか姿を

消していた。

「あれほど注意をしたのに、何で裏通りなんか歩いて帰ろうと思ったの？」

「月明かりが綺麗だったから」

「本当に何も無くて良かったわ。もう夜遊びなんかしちゃ駄目よ」

「パパ、怒るかなあ」

「当たり前でしょ！ 優にとって美奈は全てなのよ！」

マスターに強い口調で言われ涙が滲んでくる。

「おこらないでおい」

「怒られる様な事を美奈がしたんでしょ！」

「らって」

「だってもへったくれも無いわ。優が怒ったらどれだけ怖いと思ってるの？ 私だって泣いちゃうんだから」

「うう、怒られた事らんで無いもん」

「はあ？ 一度も？」

「うん」

「呆れた、どんだけ優しいのよ。ご到着よ」

マスターがそう言いながら入り口の木の扉に目をやると階段を駆け下りてくる音が聞こえ、ドアが吹き飛ぶくらいの勢いで開いてパパが店内に転がり込んできた。

「ミーナ！」

「ミーナは？」

「優ちゃん、落ち着きなさい。無事だつて伝えたでしょう」

パパはマスターの顔を見てからカウンターに居る私の姿を見た瞬間に全身から力が抜けてその場にへたり込んでしまった。

きちんとセットしてあった髪の毛は乱れ、残業でもしていたのかスリッポのままでネクタイを緩めて汗だくになりながら手には携帯電話を握り締めていた。

パパの姿を見ただけでどれだけ私の事を心配していたのかが判った。「良かった……家に帰ったらミーナの姿が見えないんで近所を探し

てたら電話が……襲われそうになって……怪我をしたって……ミナに何かあったら……僕は……」

床にへたれ込んでいたパパが壁に凭れながら私の方に顔を向けた。

「本当に無事でよかった」

心の底から安堵するパパの瞳には涙が浮かんでいる。

私がパパを泣かせる様な事をしてしまったと思ったら、痛い足など気にせずにパパの胸に飛び込んでいた。

そしてどれだけ私がパパに心配を掛けていたのかを嫌というほど思知らされた。

「パパ！　ゴメンなさい！」

「ん」

「本当にゴメンなさい……」

「ん」

今までと変わりなくパパは言葉少なに私を優しく抱きしめてくれる。パパの優しい温もりを感じながら私は泣き続けた。

自業自得

週明けの朝。

私はパパが運転するシティーサイクルの後ろに座って学校に向っていた。

シティーサイクルなんて言うて聞こえが良いけど普通のママチャリなんだけどね。

元々、通学用に買ってあつただけ私とパパが住んでいるマンションから高校までは歩いても中学に通っていた距離と殆ど変わらないので普段は徒歩で通っているの。

でも、足を捻挫してしまったので自転車で行こうとしたらパパと一緒に行くと言い出して、道交法上では問題がある二人乗りをして学校に連れて行ってもらっていた。

「うう、恥ずかしいよ」

「誰の所為なのかなあ？ 夜遊びして危ない目に遭って怪我までして」

「もう判つたから。しつこいと嫌われるよ」

「別に構わないよ。ミーナに嫌われて危ない事をしなくなるのならいくらでも嫌われるから」

「意地悪」

「パパは意地悪だからね。こんな事もする！」

「キャン！ お尻が……」

パパが自転車で少し大きな段差がある所を走りぬけると金属製の荷台に直に座っている私のお尻にもろに衝撃が伝わった。

「パパの馬鹿！ パパなんか大嫌い！」

「あはは、いつものミーナに戻った。飛ばすよ」

パパは笑いながらそう言うて立ち漕ぎをし始める。

自転車の速度がグンっと上がった。

横座りしながら周りを見ると夏の朝日に照らされた緑の木々や青空

が流れていく。

学校に近づくと登校中の生徒が増えて少しだけ恥ずかしくなってきた。

「ミーナにパパさん！ おはよー」

そんな中で麻美が私達を目ざとく見つけて、いつもの様に恥ずかしいくらい元気良く声を掛けてきた。

パパが自転車を麻美の前で止めてくれた。

「おはよう、麻美ちゃん。元気だね」

「うふふ、元気だけが取り柄ですから」

「そうかな、麻美ちゃんは元気で明るくって可愛いと思うけどな」

「もう、やだあ。パパさん。それじゃ小学生みたいじゃないですか

……あれ？」

麻美が自転車の後ろでパパに隠れるようにしている私の顔を覗き込んできた。

「パパさん、ミーナどうしたの？」

「ああ、お転婆し過ぎて怪我をして凹んでいるのかな？ それとも

恥ずかしいのかな？」

「絶対に後者だな、ミーナの顔が真っ赤だもん！」

「もう！ 只でさえパパと居ると目立つのに麻美の声は大き過ぎるんだよ」

登校中の生徒達が遠巻きに通り過ぎながらクスクス笑っているのが見て取れる。

恥ずかしくって更に顔が赤くなるのが判った。

「それじゃ、麻美ちゃん。ミーナを頼めるかな？」

「ハ〜イ（ハート）パパさんの頼みなら何でもOKです」

麻美にそう言つとパパは籠から自分のカバンを取り出して駅に向けて歩き出し、満面の笑顔で私と麻美に手を振っていた。

「うはあ、超素敵！」

「麻美、何でハート付きなのかな？」

「ええ、だつて素敵じゃん。年上で颯爽と助けてくれそう。ストライクゾーンど真ん中だもん！」

恥ずかしげもなく麻美は堂々と言つてのける。

「もう、パパは颯爽と何て助けてくれないよ。結構ヘタレの所があるんだから」

「それって遠まわしにパパさんは駄目って言っているの？」

「ち、違うもん！」

「それじゃ、私がアタックしちゃうかな」

「すれば良いじゃん。万が一でも成功した暁には虚ろな目をしながら空のお鍋をかき回して夜な夜な麻美の枕元に現れてやるからね」

「ええ、それは怖すぎるよ。ミーナみたいに綺麗な人の病んだ顔は凄く怖いんだよ。ヤンは止めようよ。ツンとクーならいくらでも付き合うから」

「じゃあ、パパは無しね」

「もう、急に元通りになっちゃつて。一体何があつたのかな？」
あんまり麻美が嬉しそうに言うので麻美の耳元で昨夜の事を少しだけ話した。

「お、襲わ……」

「ストップ！ 大きな声で言わないで」

「驚かない方がおかしいでしょ」

私が慌てて麻美の口を手で塞ぐとその手を掴んで麻美が怖い顔をして詰め寄ってきた。

そこで予鈴が鳴つてしまい私は痛めている右足を庇いながら慌てて麻美と学校に急いだ。

昼休みになつてお弁当もそこに私は麻美に人気の無い屋上に連れて来られていた。

「もう、捻挫してて足が痛いのに」

「自業自得でしょ。さあ、話してもらおうよ。包み隠さず全部ね」

「あ、あの。もう反省していますので」

「問答無用！」

こうなつた麻美は手が付けられない。仕方なく昨夜の事を話す事にする。

夜遊びに行き月明かりが綺麗だったので裏通りを歩いていて3人の男に声を掛けられ襲われそうになつてもうお終いだと思つた事。

そこに銀髪で不思議な瞳の色をした男の人が現れて3人を一瞬で倒して助けてくれた事。

ワインバーのマスターがパパに連絡して迎えに来てくれた事。

そしてパパを泣かせてしまつた事。

「で、ミーナはその銀髪でオッドアイの人に心を動かされた訳だ」

「そんじやないよ」

「それじゃ、もう会わないよね」

「……それは会えるか判らないし。でも、ちよつとだけ」

「はあ？ あのね、ミーナ。銀髪なんてありえないでしょ。基本的
にね、人の毛髪は黒・赤・金・栗毛なの。まあ、メラニンが先天的
に欠乏していたり、白髪交じりでシルバーみたいに見える事はある
けどね」

「うう、それじゃ瞳は？」

「オッドアイは人間的に言うとは虹彩異色症と言うの。日本人にも稀
に居るわよ。それと琥珀色の瞳はねウルファイズって呼ばれて狼の
瞳に琥珀色つまりアンバーが多いからそう呼ばれているの」

「ねえ、何で麻美はそんなに詳しいの？」

「そんな身体的特徴はライトノベルに幾らでも出てくるもの。私が
ネット小説好きで、趣味で小説をつて。あつ！」

「ええ！ 初めて聞いたよ。いつから小説なんて書いてるの？」

「はあ、誰にも言うつもり無かつたのに。2年位前かな」

「そう言えば麻美はジブリフリークでアニメ好きだつたもんね。で
最近はライトノベルに嵌つて。ああ、もしかして。そう言う理由で
演劇部なの？」

私がそこまで捲し立てると麻美は赤くなり顔を顰めて頭を掻く仕草

をする、それは麻美が照れているときにする癖だった。

「小説を書くのが楽しくつて。シナリオライターに憧れているんだから良いじゃない。それに私の事はどうでも良いの。問題はミーナがどうしてそんなに軽率かって事でしょ」

「もう、何回も謝ってるのに」

「それじゃ夜遊びはもうしないよね」

「……それは、その……あの人にお礼も言えなかったし」

簡単に切り返されて麻美は私の顔をものすごい形相で睨みつけている。

それは今まで一度も見たことの無い表情だった。

マジでぶつちぎれる寸前なのが判った時には既に遅かった。

「いい加減にきなさい！ 美奈は本当に自覚が足りないの。助けが来なかったら美奈はどうなっていたかと思っっているの？ 怪我だけじゃ済まないんだよ、どれだけあんなに優しいパパさんに心配をかければ良いの？ もう好きにすればいいよ。今回は偶然助けてもらえたけど次は無いかもしれない。その時にパパさんはどうするんだらうね」

私が馬鹿だった。

麻美にそこまで言われなければ気が付かなかった。

自分の身に万が一何かあればパパは……

麻美に突き放されるように言われて自己嫌悪に陥ってしまった。

今まで自分の事しか考えていなかった、気落ちしていると麻美が声をいつも通りに話しかけてきた。

「本当にミーナはニブチンだね。もしミーナが恋に落ちたら大変だろうな、猪突猛進で一心不乱に突撃しちゃうんだらうな。でもね、これだけは言える。ミーナを助けてくれた人は危険すぎる。大体ね、夜遊びなんかしている暇が……」

「麻美、どうしたの？」

麻美が言葉を中途半端に飲み込んで私の顔を輝く瞳でマジマジと見ている。

その顔はいつも私を面白おかしくからかう時の表情で、何処と無く笑っているような気がした。

「ミーナ、もう夜遊びしないって約束してくれる？」

「えっと、それは2度とって言う事なの？」

「当然でしょ、約束と言うより誓ってほしいな」

「それは、ちよっと……」

「あつそ。それじゃもう友達でも何でもないからね」

「ええ！ そんなの嫌だよ。夜遊びは控えるから、それ以外の事なら何でも言う事を聞くから」

「本当に？」

「う、うん」

演劇部

麻美の不敵な笑みを見た瞬間にまんまと麻美の策に嵌められた気がしたけど後の祭りだった。

昼休みも残り僅かな時間に2年生の教室に拉致されてしまう。

「あら？ 大久保さんに、確か神楽坂さんよね。どうしたのかしら？」

「白銀部長。ミーナ、じゃない美奈が演劇部に入部するそうです」

「ふえ？ ええ！」

入部届けを目の前に突き出されて頭が混乱してしまう。

青城高校の演劇部は文化部の中でも群を抜いて入部希望者が多く、それ故にオーディションまで行なわれるなんて話を聞いたことがある。

そして最終的に部長が入部者を決めるシステムになっているらしい。そして人気の秘密の一旦が麻美の後ろの机で私の顔を見ながら微笑んでいる演劇部部長の白銀 尚しらがね なお先輩だ。

白銀先輩は2年生なのだけど部長を務めていて青城の女王なんて呼ばれストレートの漆黒の髪に切れ長の目、落ち着き払った立ち振る舞いで背も低くはなくスレンダーで、男役もこなしてしまうマルチな人だった。

そして白銀先輩のお兄さんは……

「あれ？ 氷の女神の神楽坂さんじゃないか。君がなんだって演劇部なんかには？」

「紀のり！ 演劇部なんかには余計でしょ」

「あはは、だって女王に女神が加わってしまったら演劇部が向かう所敵なしになってしまっじゃないか」

背が高く一言で言えばクール&スタイリッシュなイケ面で2年生にして現生徒会会長の皇帝なんて呼ばれている尚先輩の双子の兄・白銀 紀しらがね のり先輩がいつの間にか尚先輩の後ろに立っ

た。

「わ、私はクラブに入る気なんて……」

「それじゃ、私に言った事は嘘だったんだ」

「あう、でも私なんか何も出来ないよ」

麻美の言葉に逃げ出す事も出来ずに私が戸惑っていると白銀兄妹は笑顔で私の顔を真っ直ぐに見ている。

すると昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り出した。

「それじゃ、とりあえず放課後にもう一度いらっしやい。一応通過儀礼だけど部員に話を通さないといけないから」

「はい、判りました！」

私の代わりに麻美が返事をして訳も判らない間に午後の授業に突入してしまった。

「ねえ、麻美。何で私が演劇部に入部しなきゃいけないの？」

「帰宅部なんかしているから無駄に時間があつて夜遊びなんかするんでしょ。クラブにでも入っていればそんな余裕はなくなるからね。それに文化祭に向けてこれからは毎日の様に部活があるからね」

「うう、そんなの嫌だ」

それは私の本心だった。

助けてくれた男の人に再会したい訳じゃないけれど、やっとパパとの仲が修復できたのにパパと過ごす時間が削られると思ってしまう自分がいる。

「もう、ミーナはもう少し自立するべきじゃないの？ いつまでパパさんに甘えて依存しているつもりなの？ そんなんじゃパパさんに恋人なんか出来ないでしょ。ミーナに好きな人が出来てパパさんから離れたらパパさんは独りぼっちになるんだよ」

「……」

麻美に痛い所を突かれて胸が締め付けられる。

私だっていつまでも子どもじゃないんだからそれくらいの事は判っている。

でも私はパパの事が好きでパパが見知らぬ女の人と楽しそうに歩いているのを見た時は泣きたくなるくらい寂しかった。

でも、このままで良いとも思っていないけれど行動に移すのが怖かったから。

出来ればこれからもこのままでいたいと思ってしまう。

「ほら、行くよ。部長が待っているから」

「はあ、あんな事を言わなければ良かった」

肩から力が抜けたため息をつく。麻美に手を引かれ演劇部の部室に向かう。

演劇部の部室は通称『文化棟』と呼ばれている音楽室や美術室・視聴覚室などの特別教室からなる普通教室とは別の校舎の4階にあった。

文化棟なんて呼ばれているのは主に文化部が使用するからで1階と2階には科学室や物理室に技術室などや図書館などもあるのだけれど演劇部の人気からそう呼ばれていると聞いた事があった。

「失礼します」

麻美がノックして部室のドアを開けると、逃げ出したくなる様な緊張感が漂ってくる。

演劇部の部室は視聴覚室の隣にあり普通の教室と同じ広さで教室の半分に衣装や小道具が綺麗に整理整頓されていて、机は殆どなく椅子が教室の壁際に並べられてそこに10人程の部員達が座っていた。私が部室に入ると部員達がざわついた。

「本当に月の女神だ」

「また、尚の冗談かと思った」

「本当に入部するのか」

など、でも一様に緊張しきった顔でざわつきも瞬時に納まる。

部員達の視線の先には部長である尚先輩が椅子に座りその傍らには生徒会長の紀先輩が立っている。

部員達の緊張はこの人の所為だと直ぐに理解できた。

「彼女の説明は要らないわね。神楽坂美奈さんの入部の件だけれど私に一任で良いかしら？」

「はい！」

副部長の柏木先輩が直ぐに返事をして、部員に了承されてしまった。柏木副部長は3年生で演劇部の中でも数少ない男子部員の1人で、容姿端麗でムードメーカーだということを麻美から幾度となく聞いた事があった。

「それじゃ、柏木君。通常通り部活を初めてもらえるかしら。私は少し神楽坂さんに話があるから。宜しくね」

「それじゃ、移動して部活を始めようか」

柏木副部長の一声で部員達は隣の視聴覚室に移動をし始める。

演劇部の部員数は文化部の中では一番多い。

部室にいた部員は主に3年生で下級生は視聴覚室で待機していたのだらう。

しばらくすると発声練習が隣の視聴覚室から聞こえてきた。

「そんなに畏まらなくて良いわよ。演劇部はそんなに堅苦しい所ではないから」

「そうなんですか？」

尚先輩の言葉に思わず的外れな答えを返してしまう。

確かに尚先輩は2年生で柏木先輩は3年生で仲が良いというより上下関係を感じない。

すると尚先輩がクスクスと笑い始めた。

「紀、あなたの所為よ。早く生徒会室に戻りなさい」

「一言良いかな？ 尚は僕の妹なんだ。もう少し兄だと思って接してくれないかな？」

「先に生まれたか後に生まれたかなんて双子には関係ないですよ。

ここは部外者以外立ち入り禁止にしているの」

「そんな事を生徒会長の僕に言っただけ良いのかな？」

「あら？ パワハラ発言を生徒会長にされたら全生徒に公言しても良いのよ」

「悪かったよ。少しだけ神楽坂さんに興味があっただけだから。口出しはしないから話だけでも聞かせてくれよ」

「珍しい事もあるものね。紀が女の子に興味を示すなんて、私は女の子に興味が無いのかと思っていたわ」

「あのね、僕も一応男なんだ。周りに居る凄い女性達には流石に気後れしてしまうけどね」

あまりにも2人のイメージとかけ離れた会話に堪らず笑みがこぼれてしまう。

隣にいる麻美はまたかと言うような顔をしていた。

「ふうん、そんな風に可愛らしく笑うんだね」

「えっ？ あっ、すいません」

生徒会長の紀先輩に言われて咄嗟に謝ってしまうと尚先輩が紀先輩に釘を刺した。

「口出しはしないと云った側から口を出すなんて良い度胸ね。今すぐ出て行きなさい」

「悪かったよ。これ以上は口を出さないよ」

普段は周りを寄せ付けられない雰囲気の皇帝と女王の掛け合いは思った以上に面白かった。

それ以上にこの兄妹は仲が良いのがみてとれる。

紀先輩が凜とした表情になると尚先輩の表情も少しだけ硬くなり私の方に視線を向ける。

その雰囲気飲まれそうになるのが嫌で私から口を開いた。

「あの、私は演劇なんてした事ないし演劇自体にもあまり興味が無いんですけど」

「まあ、そんな事は後から付いてくるものよ。演劇については一年生の殆どが未経験だから。ただし部活はきちんと出てもらおうけど良いかしら？」

「はい」

とりあえずなんだけど返事をしてしまう。

数少ない友達を失うのは嫌だったし、それ以上に自分から動かない

と何も変わらないと思ったから。

これがチャンスなのかもしれないと思った。

人から与えられたチャンスだけどそれに乗ってみようと自分自身で決めたの。

パパに言われた様に選択肢はいくらでもあるのだしやり直しも出来ると思うから。

「それじゃ、少しお話をさせてもらうわね。あなたの家庭は父子家庭なのね」

「はい、母は私が幼い頃に病死してしまい。それから父が私を育ててくれました」

「神楽坂さんは『カグラグループ』と何か関係があるのかしら？

たしかあそこの代表も神楽坂と言う苗字だったけれど」

「えっ？ 私の家は普通のサラリーマン家庭ですよ。確かにお金持ちが多く通っている中高一貫の青城に通っていますけど」

慌てて否定してしまった『カグラグループ』と言えば日本を代表する企業体の一つで庶民の私だって知っている名前だった。

確かに青城にはお金持ちが多く通っている。

私の家庭はそんな裕福な家ではないし父子家庭だから正直この学校に入るのを躊躇った事がある。

そんな時にママが残してくれたお金で学校に通えるからミーナは心配しなくて良いんだよってパパに聞いた事があった。

そして何でそんな事を聞いてきたのかは直ぐに理解できた。

尚先輩達の親は金融界を代表する白銀ファイナンシャルグループの代表だった。

それで『カグラグループ』がどうのと聞いてきたのだろう。

そんな事は雲の上の話で私には全く関係ない話だと思った。

因みに麻美のお爺さんは会社の会長さんだ。

麻美曰く小さな零細企業だよって言うていたけれど私からしてみれば大きな家に住んでいる麻美も確かにお嬢様だった。

それでも親友で居られるのは麻美がそんな事を鼻にも掛けない性格

だからなのかもしれない。

「それじゃ、少しだけ神楽坂さんの両親について質問して良いかしら？」

「えっ、それも入部に必要な事なんですか？」

「うふふ、ゴメンなさい。実は既にあなたの入部は決定済みなの。少しでもお互いの事をすれば仲良くなれるかなあって。駄目かしら？」

「先輩にそんな顔をされて断れる生徒を私は見た事ありません」

「それじゃ、聞いても良いって事なのね」

尚先輩が優しそうな笑顔で私に話しかけてくれる。

青城の女王の笑顔は心許せるマリア様のようなようだった。

「お母様はあなたが幼い頃に亡くなったのね」

「はい、急性骨髄性白血病で発症が判つてあつたという間だったって父に聞いた事があります」

「それじゃ、お父様は何処の出身の方なのかしら？」

「それは……南の島としか聞いた事が無いんです。それに父は母と出合った以前の事をあまり話したがらないので私も深く聞いた事が無いんです」

「それだけ育ててくれたお父様を信頼して尊敬していると言う事なのかしら」

「はい、私の自慢の父です」

私自身あまりパパの昔の事を知らないと言うと尚先輩はそれ以上何も聞いてこなかった。

そして私がパパと血の繋がりが無い事は敢えて話さないのでおく。

それは無駄なトラブルを避けるためと私とパパの関係を变に勘ぐられるのが嫌だったから。

パパが私を一番に大事に思ってくれているけれど私だってパパの事を一番に思っていて、パパの事を悪く言われるのなんて真っ平ごめんだった。

「自慢じゃなくて大好きなんだもんね」

そんな事を麻美が耳元で囁いたので私は麻美のわき腹に釘ならぬ肘を刺しておいた。

「あのう、私からも一つ聞いて良いですか？」

「ええ、結構よ。演劇部に関して分からない事があれば気兼ねなく聞いてちょうだい」

「顧問の先生は？」

「あら？ あなたがここに来る前からそこに居るわよ」

「へえ？ うわぁ！」

尚先輩の指差した教室の隅を見ると気の弱そうな影の薄い小柄な男の人がリクルートスーツみたいな背広を着て座っていた。

……何の教科を受け持っていた先生だっけ？

何度かこの先生の授業を受けた事がある。

名前だけは覚えてる『代々木 忍先生』だよな。

何の授業かが思い出せないくらい存在感の薄い先生だった。

尚先輩の話では名前だけだからって笑っていた。

尚先輩と柏木先輩の2人が居れば顧問なんてそんなものかもしれない。

解す

夏休みに突入して私の生活は今までと一変してしまった。

中学の頃は夏休みの初めに課題を殆ど終わらせて麻美達と遊びまわって。

パパの休みの日はパパと海に行ったりして遊びに連れて行ってもらった。

高校1年の夏休みは……部活動で終わってしまいそうだった。

「ねえ、麻美。演劇部って文化部だよな」

「そうだよ、だから何？」

「なんで体操服のジャージでランニングなんかしなきゃいけないの？」

「良いから走る。おしゃべりしていると怒られるよ」
「そんな事を麻美と話していると『真面目に走る!』と尚部長の声が飛んだ。」

基本的に発声練習や台本の読み合せやエチュードと言う即興の1人芝居をして演技力や表現力の練習をするのだけだ。

基本は部活の3割弱で残りは基礎体力をつけるためと柔軟な体を作る為のストレッチや筋力トレーニングがあり、

部活のメインとも言えるのが持久走つまりランニングだった。

そしてランニングの合間に発声練習をさせられて滑舌が悪かったり声が小さいとランニングの周回が追加されてしまう。

何でも長丁場の劇の時や激しい立ち回りの時に台詞がきちんと見えるようにする訓練らしい。

まあ、柏木副部長の受け売りなんだけどもね。

最初の一週間が特にきつかった。

体育以外に全く運動をしていなかったからなのかもしれないけれど、自分の運動不足を思い知った。

土曜日も軽く？ 部活があつて。

そして日曜日は久しぶりにパパとデートの約束をしていたのに……

「ミーナ、起きてる？」

「う、うん」

「入るよ？」

「うう、駄目」

「どうしたの？」

パパは私が嫌だと言うことを絶対にしない。

駄目だと言われれば決して部屋のドアを開けたりしなかった。

「体中が筋肉痛で大変なの。もう少しだけ待ってて」

「それじゃ、リビングに居るからね」

何とか起き上がってパジャマのままリビングに向うと、美味しそうなスープが湯気を上げてこんがり焼かれたトーストがお皿に盛つてある。

時計を見ると出かける約束の時間はとっくに過ぎていた。

「もう、起こしてよ」

「起こしたよ、何度も」

「うう、ゴメンなさい」

スープのカップに口を付けながらパパに謝る。

目覚ましで起きられなかったのは私が悪いのだから。

パパはちゃんと約束の時間に間に合うように朝食を準備して私が起きるのを待つてくれていたんだと思う。

「今日はお掛けしないで、ゆっくりしようね」

「ええ、出掛けたいよ」

「その体で？」

「うう、それは」

私が一番判っていた。

ベッドから起き上がるのもやっとで、まるで油の切れたロボットの様に体はギクシャクとしか動かせないのだから。

「はあ、演劇部なんかに入らなければ良かった」

「そうかな、ミーナは少し体を動かした方が良いと思うよ。麻美ちゃんもミーナの事が心配で演劇部に誘ったんでしょ」

「仕方が無いか。私自身で選んだ事だもんね」

「良い子だ」

子どもの頃のように優しく頭をクシャって撫でてくれる。

でも今はそれが恥ずかしくって顔が赤くなるのが判る。

「もう、恥ずかしいよ。子どもじゃないんだから」

「ええ、ミーナは僕の大事な娘だからね。何も恥ずかしがる事無いじゃん、親子なんだから」

パパの口から親子と言った言葉が発せられた瞬間チクリとする。

それは今まで感じた事の無い感覚だった。

でもそれをパパに気付かれる訳にはいかず平静を装う。

「ミーナ、その格好のままこっちにおいで」

「パパ？」

食器を片付けて着替えに部屋に戻ろうとするとパパにいきなりそんな事を言われて鼓動が跳ね上がった。

「ん？」

「ん？ じゃ無いでしょ。一応私は年頃の女の子なの」

「ん……なんで？」

「もう、なんでじゃないでしょ。あのね、一応ノーブラだし」

「ん？ 変なの。良いからおいで」

「う、うん」

何を言っても動じないパパに従うしかなく、恥ずかしさを隠しながら渋々パパの前に立った。

「そこに足を投げ出してこっちを向いて座って」

「こっつ？」

「そう、それじゃ足に触るよ」

パパに言われたとおりパパに向って足を投げ出して座るとパパは私に声をかけながら強張っている筋肉をほぐし始めた。

パパの手が足先から脹脛に向かいそして内腿に触れる。

「うわぁ、びつくりした」

「ゴメン、ゴメン」

流石に驚くと優しい笑顔で謝ってくれるけどちょっとだけ複雑な気分になった。

パパは私を娘としか見ていないのかな？

それとも私がまだ子どもだって事なのかな？

両足のマッサージが終わるとうつ伏せになる様に言われて背中や腰のマッサージをしてくれる。

全然痛みなんか感じないくらいに気持ちが良い。

腰からだんだんと背中に向かい優しく揉み解してくれる。

パパの手が脇に近づくと少しだけこそばゆい。

「ミーナもちゃんと女の子の体に成長してるんだね」

「ぱ、パパのエッチ！」

「そんな事を言わないでよ。僕はミーナのオムツを換えた事だってあるんだよ」

思わず顔が真っ赤になる。

ちゃんとパパは私の事を女の子だって認識している。

でも、オムツって……

パパには全てを見られてしまっているようで顔を上げることが出来なかった。

天然なのか意識的なのかは昔からわからないけれど、パパはちゃんと私を見てくれている。

ただどあまり近づき過ぎない様に一線をさっと引いて距離を取っているように思えた。

うつ伏せのまま肩から腕をマッサージしてくれる。

「どうして、パパはスポーツトレーナーみたいな事が出来るの？」

「ん？ 昔から体を動かすのは好きだったしね。色々かなあ」

「もう、いつもずるいよ。パパはちつとも昔の事を教えてくれないんだもん」

「ん？ そうかな？ パパの子どもの頃の話なんか聞いてもつまらないよ」

「それでも聞きたいもん」

「そうだね、子どもの頃は毎日の様に海で遊んでいたかな」

「ふうん、パパの生まれた所って南の島だったよね」

「ん、そうだよ。日本の果てにあるんだ。真つ白な砂浜だね。海が綺麗で」

「私も行つて見たいなあ」

「そうだね」

起きたばかりの筈なのに段々と眠くなり意識が遠くなっていく。パパが昔どこかで聞いた事があるような歌をハミングしている。それはまるで暖かい優しい海に包まれるようで。

「おやすみ、僕のお姫様」

頬に優しい何かが触れたような気がするけれど私は眠りの海に誘われていた。

「ん？ ん？」

どれ位寝ていたのだろう気が付くと体にはタオルケットが掛けられていてパパの姿は無かった。

寝すぎてボーとした頭を擦りながら起きると外は日が傾いて夏の日差しが和らいでいる。

ソファーを見ると小夜ちゃんが本を読んでいる姿が目に入った。

「あれ？ 小夜ちゃん。パパは？」

「おはよう。美奈は寝ても覚めてもパパなのね」

「うう、だって。今日は一緒にお買い物に行く約束してたのに」

「部活で疲れ果てて眠りこけてしまったと」

「うん、パパがマツサージしてくれたから筋肉痛が……あれ？ 全然痛くない」

「どうでも良いけれど、ヨダレが垂れてるわよ。一日中女の子がパジャマなんかで居ない。シャワーでも浴びてしゃきつとしなさい」

「はい」

小夜ちゃんに言われてバスルームに飛び込んで顔を見るとヨダレなんか垂れてなかった。

軽くなった体に熱いシャワーを浴びて目を覚ます。

パパは買い物にでも行ったのかな？

そうだ小夜ちゃんならパパとママの昔の事を知っているかも。

今まではなんとも思わなかったパパとママの事をもっと知りたいと思う。

それは尚先輩に聞かれたからかもしれない。

速攻でTシャツにハーフパンツに着替えを済ませて小夜ちゃんの前で正座をした。

「美奈、どうしたの？ そんな仔犬の様な目で見ても何もあげないわよ」

「パパは？」

「買い物に行くから、美奈を宜しくですって。私は別に美奈の寝顔を見る為に来たんじゃないのに。で？ 私に何か聞きたいことでもあるの？」

「うん！」

小夜ちゃんはいつも私がしようとしている事を判ってくれて、凄く大人の女の人だと思う。

「褒めても何も無いわよ」

「あのね、パパとママの昔の事が知りたいの」

「はあ？ 優に直接聞けば良いじゃない」

「だって、教えてくれないもん」

「私に聞かれても私は優の事は美雪と付き合い始めた頃に初めて会ったんだから、それ以上昔の事は知らないわよ」

「それでも良いの」

「その前に、私に話す事があるんじゃないの？」

小夜ちゃんが読んでいた本をソファーに置いて真っ直ぐに私の目を見ている。

夜遊びしていた事だと思う。

どうして小夜ちゃんが知っているんだろ、パパが言ったのかな？

「優は何も言わないわよ。私の遊び場も美奈が夜遊びしていた街なの。判るわよね、この意味が」

「ゴメンなさい。もう夜遊びはしないから」

「まあ、こうして美奈が元気で居るといふ事は何も無かつたんでしょ」

「うん。でもパパを泣かせちゃった」

「本当に優は甘いんだから。私だったら2、3発ぶん殴っているわよ」

そう言いながら小夜ちゃんが私の体を強く抱きしめた。

そして小夜ちゃんの体が小刻みに震えている。

泣いているの？

「泣いてなんか無いわよ。あなたは美雪の大切な忘れ形見なのよ、もっと自分を大切にしなさい」

「ゴメンね、小夜ちゃん」

小夜ちゃんの顔は本当に哀しそうな顔をしている。

私の事を本当に心配してくれているのが良く判った。

「優を賤け直さないと美奈が駄目になるわね」

「パパを怒らないでね」

「あのね、あなたの顔を見ていたらどうでも良くなってきたわ」

それから小夜ちゃんにパパとママが付き合いだした頃の話聞いた。パパはその頃、街ではちょっとした有名人だったらしい。

何でもやんちゃをしていたって言うけれど今のパパからは想像も出来なかった。

ママとは短大の頃からの付き合いでママ自身もあまり実家の事なんかを話したがりなかつたって小夜ちゃんは言うんだけどパパもママも何でなのかなって思ったら。

「美奈だって普通に優と血が繋がっていないけど親子ですって言うの」

と言われてしまった。

家庭の事情って事なのかな。

それにママは未婚のまま私を産んでいる。

普通に考えたら親はそんな事になれば絶対に反対するよね。

私の本当の父親の事は誰にも言わなかつたくらいだもんね。

そんな事を話しているとパパが買い物から帰ってきた。

「パパ、お帰り」

「ん？ 元気になったみたいだね」

「うん！」

その夜は久しぶりにパパと小夜ちゃんとお家で晩ご飯を食べた。

台本

8月になり部活動も文化祭の公演に向けて動き出した。まだ、何を演じるのかは決まっていなかったけど、それでも皆がワクワクしているのが感じられる。

私もパパの夏休みには一緒に海に行く約束をしていた。それが今年の夏休みの唯一の楽しみだった。

今日は体育館の舞台上で数人に別れて台本を読みながら立ち稽古をして、先輩に言われて麻美と2人で部室に台本を戻しに行く。すると部室から尚部長と柏木副部長の声が聞こえてきた。

「柏木、どうするんだ？　すでに8月に入っているんだぞ」

「部長に言われなくてもさががしていますよ。でも今年は無理かもしれませんが」

「何が何でも探せ。最悪の場合は」

「それだけは勘弁してください。部長のご両親に頼んだら後々が怖いからです」

「ならば何とかしろ。私だってあんな両親に頼むのは真つ平ごめん」

ドアを開けるタイミングを逃してしまい、ドアの前で盗み聞きしているように思い切ってドアを開けた。

「失礼します。台本を戻しに来ました」

「ご苦労様」

麻美と2人で教室の奥にある大きな本棚に台本を戻していると麻美が尚先輩達に声をかけた。

「部長達の声が部室の外まで駄々漏れですよ」

「ああ、ちよっとトラブルがあつてね」

「トラブルですか？」

「うん、8月の合宿の事だね。押えてあった民宿が食中毒をだして

営業停止になつてしまつたんだよ」

「それじゃ今年は？」

「無理かもしれないね。今から2週間後の週末に20人以上の予約なんて取れないからね」

それを聞いた瞬間に私は持つていた台本を床に落としてしまった。

「もう、ミーナは何をしているの？ 大切な台本なのに」

「麻美、合宿つて何？」

「あれ？ ミーナには言つてなかったけ。毎年恒例の合宿が8月の半ばにあるんだよ、つてどうしたの？」

「だ、だつてその週末はパパと旅行する予定なんだもん」

「申し訳ないけれど合宿には全員参加が基本だ。合宿で文化祭の時に公演する題目を決めてキャストも大まかに決定するからね」

柏木先輩の言葉に思わず泣きそうになると麻美が頭を撫でてくれる。でも毎年つて事は3年間もパパと夏休みに旅行するのは無理つて事なのかな？

「でも今年のパパさんと旅行に行けるかもしれないよ。このまま合宿先が確保できなければね」

「それは私としても是が非でも回避したいのだけどね。まあ柏木の腕の見せ所かな」

「そんな事を言われても今からでは無理ですよ」

「それじゃ最終手段で」

「本気ですか？ それだけは勘弁してください」

柏木先輩は今にも泣き出しそうな顔をしているけれど、私は内心ホツとしてこのまま合宿先が決まらなければ良いのにと思つてしまつた。

そんな事を考えていると尚先輩が何処かに携帯で電話をし始め、溜息を付いて肩を落とした。

「尚部長？」

「私の両親に頼もうとしたのだが見事に却下されたよ。子どものお遊びには付き合っている暇は無いと」

「これで八方塞すね」

「ウダウダ言っていないで手分けをして探すぞ。私の代で伝統の夏合宿を途切れさせる訳には行かないんだ」

そんな先輩達の姿を見て私は少し後ろめたい気持ちになった。

それでも私はパパと年に数回の旅行を毎年楽しみにしている。

これだけは譲れないのだけど……

そんな事があつた日の夜。

私はパパと食事をしてリビングで寛いでいてパパはキッチンで食器を片付けていた。

言っておきますけどパパと交代で片付けをしているんだから勘違いしないでよね。

それに私だつて時々は料理するんだから、パパが作った料理より数段落ちるけど。

面白いテレビ番組も無く気まぐれで合宿の事をパパに話してしまつた。

「パパ、今からじゃ20人以上で宿泊できる所なんて無いよね」

「ん？ 何の話なの？」

「あのね、演劇部の毎年恒例の伝統行事である夏合宿が存亡の危機なの。毎年予約していた合宿先が食中毒をだして営業停止になったんだつて。でもね、その合宿の日程がパパと海に旅行に行く日とダブっているの。だからね」

「ん？ あるよ。今からでも30人以上の予約が取れて冷房付きの会議室があつて。あそこなら海の目の前だし合宿には持ってこいじゃないかな？」

「そ、そんな所あるわけ無いじゃん」

「ん〜大丈夫だよ。うちの会社の研修所兼保養所だから、今年も利用者居ないつて総務が嘆いていたからね。みんな海外に行く気まんまんだからしょうがない事なんだけどね」

「一応、先輩に聞いてみるね」

段々声が小さくなってしまふ。

パパは私との旅行なんてなんとも思っていないんだよね。

合宿できる場所を知ってしまったって先輩達に黙っておくわけにもいかず、とりあえず尚先輩に連絡するとももの凄い勢いで褒められて感謝されてしまった。

そして急転直下でパパとの旅行が取りやめ決定した瞬間だった。

「パパ、一応聞いて良い？」

「ん？ どうしたの？」

「食事とかはどうしたら良いの？」

「それも問題ないよ。地元のおばちゃん達が朝晩は作ってくれるし前もって連絡すれば3食作ってくれるよ」

「そっか、そうだよ。保養所なら宿泊料金も格安なんでしょ」

「そうだよ」

声のトーンが下がっていく。

自分自身でパパとの旅行を台無しにした虚しさで脳天気そうなパパを見ていると怒りが沸々と湧き上がってきた。

「パパは私との旅行なんてどうでも良いんだよね」

「あつ、ゴメン。ミーナが部活を始めて部活の合宿の話をしてくれたのが嬉しくって忘れてた」

「ふうん、忘れてたんだ」

「ゴメン、ゴメン」

「パパの馬鹿！ パパなんか大嫌い！」

パパが必死に両手を合わせて謝っているけれど、そう叫んで私は自分の部屋に駆け込んでベッドにダイブして突っ伏した。

「あはは、また怒らせちゃった。ちよっとやり過ぎたかな。台本どおりにはいかないなあ。しょうがない出張るか」

カレライス

演劇部恒例の伝統行事の夏合宿が始まるうとしていた。移動は前もって予約してあった大型観光バスだった。

まあこのくらいは当たり前なのかもしれない。

私立の高校で演劇部は色々な賞を受賞していて、青城の演劇部はそれなりに有名なのだから部費だってそれなりにあるのだろう。

不貞腐れて私はバスに乗っている、隣では麻美が楽しそうにライトノベルを読んでいると部長の尚先輩が声を掛けてきた。

私は何となく聞いていると麻美が話し始めた。

「神楽坂さんには感謝しているのになんでそんなに機嫌が悪いの？」

「自業自得な事をするからでしょ、いい加減に機嫌を直しな。大体ね、パパさんに合宿の話なんかしなければ旅行に行けたかもしれないのに」

「あら、そうだったわね。でも珍しいわね高校生になって父親との旅行が楽しみだなんて」

「ふふふ、美奈はパパさんラブだもんね。尚先輩も美奈のパパさんを見たら判りますよ」

「へえ、そんなに素敵なお父様なんだ」

「もちろん、優しいし背も高くて素敵だしね」

「あら？ 大久保さんは何を読んでいるの？」

「ああ、これはライトノベルです」

「うーん、私はちょっと苦手かな。異世界やら魔法やら漫画みたいなのでしょ」

「でも、これは異色ですよ。剣も魔法もないファンタジーで経済活動の争いが書かれています」

「そうなの経済活動のライトノベルなんてちょっと興味があるわね」

「それじゃ、とりあえず1巻をお貸ししますので読んでみてください
い」

そう言いながら麻美は尚先輩にライトノベルを貸している。

私は気にせず窓の外を眺めていた。

パパは独りで何をしているのかなあ？

会社の女の子は海外旅行だって言ってたし、小夜ちゃんも夏休み返上で飛び込みの翻訳の仕事だって言ってたもんね。

私が居なくて寂しくないのかな？

「ほら、ミーナもそろそろ機嫌を直して。到着するよ」

「うん」

力なく返事をする。

程なくしてバスはパパが予約してくれた研修所兼保養所に到着した。そこは大きな企業の見るから豪華な保養所ではなく。

パパが言うとおり質素な平屋建てのコンクリート打ちばなしで敷地は大企業だけあって無駄に広くつてまさしく研修所兼保養所だった。そしてコンクリート打ちばなしの入り口には『紫月』と彫られる様に書かれていた。

バスから降りて荷物を持ってロビーに行くと外観とは裏腹に中は結構綺麗だった。

落ち着いた藤色のジュータンが敷かれ、ロビーから見える窓の外には目の前にある浜辺と海が広がっている。

部長や部員達もキョロキョロと館内を見渡していた。

「凄い素敵なおね。本当にここで良いのかしら？」

「えっ？ 尚部長、今まではどんな所で合宿していたんですか？」

「普通の海の近くの民宿よ」

尚先輩の言葉に耳を疑ってしまう普通の民宿って……

「天国だ」

「クーラーが効いてる！」

「もしかして会議室あり？」

「炎天下の発声練習なし？」

そんな声が先輩達から聞こえる。すると綺麗な女の人が声を掛けて

きた。

その女の人の格好はメイドさんといえば良いのだろうか落ち着いたグレーのロングドレスを着てエプロンをしている。

長い髪の毛を後ろで一纏めにして、秋葉なんかで流行のメイドさんとは違うけどメイドさんとしか良い様が無い格好だった。

「ご予約者の神楽坂様はどちらに？」

「はい、私です」

慌てて女の人の前に出ると満面の笑顔で抱きつかれてしまった。

面食らっていると体を離して両肩に手をおいて嬉しそうな顔をしている。

「美奈様、お久しぶりです。素敵なおレディーになられて」

「ええ？」

「覚えていらつしやらないのも仕方ありませんね。私がお会いしたのはまだ美奈様がご幼少の頃ですから。失礼いたしました。私はこのハウスキーパーを任されている諏訪真琴すわまことと申します」

「もしかしてマコお姉ちゃんなの？」

「はい！」

僅かに記憶にある。子どもの頃に毎年のようにパパと海に来た時に一緒に遊んでくれたお姉ちゃんがマコお姉ちゃんだった。

「マコお姉ちゃん、あの頃はお母さんの手伝いって言ってたよね」

「はい、母は今も元気で居ますよ。母の代わりにこのハウスキーパーを任されて、久しぶりのお客様が美奈様だって聞いて嬉しくついで」

「もう、美奈様は止めてよ。美奈で良いから」

「そういわれましてもお父様の優様には母共々お世話になっていきますので」

「マコお姉ちゃん。部屋を案内してほしんだけど」

「畏まりました」

マコお姉ちゃんの案内で館内を案内された。

質素を地で行くような外見とは裏腹に館内は落ち着いた感じの造りになっていて海が見渡せる大きな浴場もあり、部屋もホテルに引けを取らないような部屋だった。

とりあえず各自部屋に荷物を置いて食堂に集合するように尚先輩に言われて、時間通りに食堂に集まった。

「それでは今日から3日間の恒例の夏合宿が始まります。今回はちよつとしたトラブルで開催が危ぶまれたが神楽坂さんの紹介でこのような素敵な施設で合宿が出来る事になりました。くれぐれも従業員方々の迷惑にならないようにすること。良いわね」
全員が返事をする。

そう言うところはしっかりと上下関係が見て取れるのだけど部活動から少しでも離れると和気藹々としてチームワークの良さを感じられた。

「しかしミーナの自業自得とは言ってもこんな場所が格安で宿泊できるのなら毎年ここで合宿すれば良いのに」

「まあ、その話は神楽坂さん次第だよ」

麻美がそんな事を言うとう尚先輩が私の顔を見ながら優しくそんな目でそう言う。

「私もマコお姉ちゃんには毎年でも会いたいけれど……」

「ミーナはパパさん命だもんね」

「そんなんじゃないよ。パパの事は好きだよ、でもいつまでも一緒に居られる訳じゃないんだし思い出はいっぱいあった方が良いでしょう」

そんな事を話しているとマコお姉ちゃんが嬉しそうに笑いを堪えている。

ちよつと不思議に思ったけれど久しぶりに会ったからだと思つてた。

一旦、解散して昼食まで自由時間になった。

私は麻美とマコお姉ちゃんの3人で目の前の浜辺を散歩していた。

「美奈様は相変わらずお父様が大好きなのですね」

「うん！」

「でも諏訪さんは昔からミーナとパパさんの事を知っているんですね」

「ええ、命の恩人の様な方ですから」

「命の恩人？」

「はい。美奈様はご存じないと思いますが初めて美奈様にお会いした時は命を助けられた直後の事なんです。優様が美奈様とこの『紫月』に遊びに来られていて美奈様がお昼寝されている時に優様はお一人で散歩をなさっていたんです。ちょうどこの先の岬の上を」

マコお姉ちゃんが指差す先には確かに灯台がある岬が見えた。

私は昔のパパの話が聞けるのがちょっとだけ嬉しかった。

「パパって本当に独りでブラブラするのが好きだもんね。で、迷子になって道を覚えて帰ってくるんだよね。だから誰も知らない裏道とかに詳しいの」

「そうだったんですね。確かにあの岬の道は地元でも限られた人間しか知りませんでしたから」

「でも、どうして岬なんかに住たの？」

「それは母が私を連れて心中をしようとしていたのです。私の父は酒に溺れて借金を繰り返し生活は火の車で母がどれだけ働いても酒と返済に消えてしまい。もう限界だったでしょ、父は幼い私にすら手をあげて幼心にも母の心情が良く判りました。そしてあの岬から飛び降りようとした所を優様に止められたのです。あの時に言われた言葉は今も忘れません」

「パパは何て言ったの？」

「こんな可愛い娘が居るのに娘の人生まで終わらす権利は親には無いはずだ、人生に遅いなんて事は無いんだよ。どんなに歳を重ねてもやり直そうと思った時がり・スタートなんだと。もしやり直す気があるのなら微力だけど力になるからと言われていました。母は泣き崩れ優様に連れられてこの『紫月』に来たのです」

「そうだったんだ」

マコお姉ちゃんは表情一つ変えずにサラッとそんな辛い過去の話をしている。

そんな話を聞いてちょっとだけパパの昔の事を聞けると嬉しくなっていた事に恥ずかしくなった。

「優様は直ぐに行動に移されて会社に直談判して母と私を住み込みで働けるようにしてくださって。その後で美奈様に初めてお会いしたんです」

「でも、あの時は楽しそうに遊んでくれたよね。そんな死のうとじてたなんて」

「母は優様に。私は美奈様に救われたのです。優様に連れられて美奈様に紹介して頂いた時に美奈様は優しい笑顔で私を『お姉ちゃん』と呼んでくれたんです。その私に向けられた笑顔がただ嬉しくって父がこの敷地に入らないように警備も厳重にして頂き、美奈様のお爺様とお婆様のお力添えもあつて借金の方も清算して頂いたお陰で今の母と私があるのです。ですから美奈様と呼ぶ事をお許してください」

「マコお姉ちゃん！ マコお姉ちゃんはパパのお爺ちゃんとお婆ちゃんのことを知っているの？」

思っても見なかった言葉がマコお姉ちゃんの口から飛び出して私は興奮のあまりマコちゃんの両肩を掴んで詰め寄ってしまった。

するとマコお姉ちゃんは少しだけ不思議そうな顔をしてから真っ直ぐに私の目を見て答えてくれた。

「優様のお爺様とお婆様ですか？ 美奈様は優様から何も聞かれないのですね。それならば私が美奈様にこれ以上申し上げる事は何もありません」

「そんな、教えてよ」

「ミーナ、駄目だよ。真琴さんが困ってるじゃない。命の恩人が娘に言わない事を真琴さんが言える訳無いでしょ」

「そうだね、パパにも家族がちゃんと居たんだね。それが判っただけでも十分かな」

麻美に言われてざわついていた心がストンと落ち着いた。

すると隣からお腹が鳴る大きな音が聞こえてきた。

「もう、麻美でしょ」

「えへへ、ばれたか。だって凄く美味しそうなカレーの匂いがするんだもん」

「そろそろ昼食の時間ですね。今日はシェフ特製のカレーですよ。参りましょう」

「「はい」」

紫月に戻り食堂に行くと学食の様なビュフェスタイルになっていて、サラダやフルーツが食べ放題で女の子には嬉しい限りのスタイルだった。

食堂に時間通りに全員が集まり昼食が始まる。

各々で好きなだけ食べられる量を考えてお皿に取っていく、皆が取り終えてテーブルに着くと副部長の柏木先輩が声をかけた。

「いただきます」

その声を合図に一齐に皆が食事を始める。

麻美は私の前でカレーをスプーンで掬って口に運んで不思議そうな顔をしている。

「麻美？ どうしたの？ 美味しくないの？」

「このカレー凄く美味しいんだけど、どこかで食べたことがある味がする」

「どこかの有名なシェフの味なんじゃないの？」

「違うな、この味はミーナなら絶対に判るはず」

「どれどれ」

麻美がスプーンで掬ったカレーを私の前に突き出した。

スプーンを口に入れるとカレーの味が口いっぱいに広がり思わず椅子を倒しながら立ち上がってしまった。

「神楽坂さん？ 食事中にどうしたの？」

「パパだ！」

「へえ、お父様？」

椅子が倒れる音に驚いた部員や尚先輩の言葉は耳に届かずキッチンに駆け出していた。

だってあのカレーの味はパパが作ってくれるカレーとそっくりな味だったから。

そしてマコお姉ちゃんが笑いを堪えていた理由もそれなら納得が出来る。

キッチンに駆け込むと優しい笑顔でパパが立っている。

それもコックさんの格好までして。

「ははは、やっぱり判ったか」

「パパ！」

私が飛びつくように抱きつく優しく受け止めてくれる。

「当たり前でしょ。パパの作ったカレーの味が判らないようじゃ、

パパの娘失格だもん」

「まあ、シェフ特製のカレーだからね」

「どうしてここに居るの？」

「ん？ ミーナの機嫌を損ねちゃったからね。僕がここに居るからって合宿をサボっちゃ駄目だよ。自由時間は僕に会いに来ても構わないけれど」

「うん！」

「それともう一つ。皆が居る前ではあんまり抱きつかないでね。恥ずかしいから」

「へえ？」

パパが私の体を離して食堂の方を見ている。

思わず振り返ると演劇部の皆がキッチンを覗き込んでいた。

顔が真っ赤になるのが判る。

パパが居ると思っただら合宿しに来ていた事なんて吹き飛んでいた。

するとパパが私の腰に手を回してキッチンから食堂の方に向かって歩き出した。

「パパ？」

「ちゃんと皆に挨拶しないとね」

食堂に行くとは既にテーブルに座っていた。

パパが皆を見渡してから挨拶をしてくれた。

「なんだか大騒ぎになってしまっただけです。私が神楽坂美奈の父親の優です、こんな娘ですが宜しくお願いたします。ここは私の会社の保養所なので遠慮なく使ってください。もし皆さんがよろしければ毎年でも構わないですよ。最近は海外が人気で余りここは使用されなくなってスタッフも寂しい思いをしていると思いますので」

「それはありがたいお言葉です。私が演劇部部長の白銀 尚と申します。神楽坂さんとはどこかでお見受けした事があるような気がするのですが？」

「あれ、白銀ファイナンシャルグループのお嬢様じゃないですか。藍花商事の営業をしているのでどこかでお会いした事があるのかもかもしれませんね」

尚先輩とパパとの間に一瞬だけ緊張感が走った気がするけれど直ぐにいつもの尚先輩とパパに戻っていた。

パパが挨拶を済ませてキッチンに戻ると中断していた昼食を皆が食べ始めた。

「相変わらず、パパさんの前だとミーナは見事に壊れるよね」

「だって……」

「これでミーナがファザコンなのを皆が知った訳だ」

「うう、そうだよ。私が迂闊だった」

「だって、それがミーナだもん」

麻美からの酷い言われ様なだけだけれど仕方がないよね。

どうしてパパの事が絡むと見境が無くなっちゃうんだろう。

「それが恋よ」

「へえ？」

耳元で声がして私が素っ頓狂な声を出して振り返るとそこには誰も居なくて、同級生の部員が突然振り返った私の顔を見て不思議そう

な顔をしていた。

主役

翌朝は早朝の砂浜ランニングから始まった。

いつものランニングとは違い砂に足を取られて距離は半分なのに倍以上に辛い。

息が上がってきた所で発声練習がある。

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

「か・け・き・く・け・こ・か・こ」

「さ・せ・し・す・せ・そ・さ・そ」

部員達のお腹から発する声が白み始めた砂浜に響き渡る。

発声練習が終わりクールダウンを兼ねて柔軟性ストレッチ運動をペアになって始める。

「麻美、午後までもたないかも」

「ええ、何言ってるの？ 始まったばかりだよ」

「これじゃ運動部と変らないじゃん」

「まあ、仕方がないでしょ。主役クラスになったら文化祭の公演でも1時間くらい出ていなきゃいけないんだよ」

「でも、主役クラスなんて1年生には無理でしょ」

「あのね、1年から体を作っていけないと何年になっても無理でしょうが」

麻美とそんな会話をしていると紫月の方からフライパンを何かで叩く音と「朝ご飯だよ！」というパパの呼び声が聞こえてきた。

「パ……」

「朝ご飯だ！」

思わず『パパ』と叫びそうになり慌てて口を閉じると私の声を掻き消すくらいの声で麻美が叫びながら立ち上がった。

「大久保さん？」

「あつ、すいませんでした」

尚部長がちよつと怒った顔をして麻美を睨むと部員から笑い声が上

がった。

「大久保さんはまだ色気より食い気だね」

「ああ、酷いですよ。柏木副部長は」

柏木先輩にからかわれて麻美は頬をわざと膨らませて腕を組んでいた。

「本当にしょうがないわね。2人とも」

「ええ？ 私もですか？」

微笑みながら麻美と柏木先輩を見ていた尚先輩が私の方を見ながらそんな事をいうものだから思わず声を上げてしまう。

「あら？ 思わず『パパ！』って叫びそうになったのを必死に我慢していたのでしょ。さあ、食事にしましょ」

尚先輩の言葉で部員が立ちあがり紫月に向って走り出した。皆のお腹が空いていたのも事実のようだった。

「もう、麻美の所為で私まで恥ずかしい思いしたじゃん」

「知らないつと、パパさんが作った朝ご飯だ！」

私が麻美に抗議しながら麻美の腕を掴もうとすると麻美は嬉しそうにクルンと体を1回転させて私をかわして走り出した。

朝ご飯は和食だった。

ご飯にスタンダードなお豆腐の味噌汁に出し巻き玉子。

それにサラダに新鮮な鰯の塩焼き。海苔に納豆にこれぞ日本の朝ご飯だった。

「ミーナは毎日こんなに美味しい物を食べているんだ」

「普通だよ、だって健康は食からってパパの口癖だもん」

「ミーナのパパって不思議だよ、年寄り臭い時があるもんね」

私は麻美の言葉に耳を貸さずに美味しい鰯の塩焼きを綺麗に食べようと集中していた。

すると尚先輩の声がした。

「1時間の休憩の後で会議室に集合する事」

『ハイ』部員達が一糸乱れず返事をした。

食事を食べ終わると各自が使った食器をキッチンまで下げてキッチンを覗き込みながら『ご馳走様でした』と声をかけて自由時間を過ごす。

1年生は殆どが部屋でこれから行なわれるお芝居の練習の台本に目を通す。

2年と3年の先輩達は余裕なのだろう砂浜を散歩したりのんびりと過ごしている。

私と麻美も軽くシャワーで汗を流してから部屋で互いに台詞を言い合って役を交代しながら練習をしていた。

「美奈、そろそろ時間だから会議室に行こう」

「うん」

部屋を出て会議室にむかって麻美と歩き出す。

会議室はちょうど皆が泊っている部屋の反対側にあって食堂とロビ―を抜けて行く感じになっている。

食堂の脇を歩いていっていると中からパパ達の声が聞こえる。

片づけが一段落してスタッフと食事をしているみたいでオバちゃん達の声も聞こえてくる。

「優様の作られたご飯は美味しいです」

「ありがとうございます」

「何処で習われたのですか？」

「ああ、若い頃は色々な仕事をしていてね。居酒屋やレストランの調理場でバイトしていたんだよ」

「でも、それだけでこんなに美味しい料理を作れるようになるのですか？」

「ふふ、これは美奈に内緒だよ……」

思わずパパの声に耳がダンボになって立ち止まってしまった。

「ほら、美奈。遅れるよ」

「ああ、もう。判ったよ」

「何を怒ってるの？」

「はあ〜」

麻美に腕を引つ張られてパパの言葉が最後まで聞けなかった。

その代わりにオバちゃんの微妙にイントネーションが違う大きな声とマコお姉ちゃんの驚く声が聞こえてきた。

「そうそう、真琴ちゃんはいつも仕事仕事してるだら。久しぶりに神楽坂さんが見えたでしょう、だからたまには甘えてきたら良いだらあ」

「ええ、優様に迷惑が……」

会議室に入ると殆どの部員が集まっている。

会議室は長テーブルやパイプ椅子が綺麗に片付けられて、フラットな状態になっていて部長や副部長を中心に部員が体育座りをしている。

そして尚部長に名前を呼ばれると呼ばれた数人で立ち稽古が始まる。皆が立ち稽古をしているのを見るのも大切な事で真剣な表情で演技を皆が見ている。

一通り終わると部長や副部長、それに上級生から何処が良くて何が悪いか指導してくれる。

私の名前が呼ばれ他に2年生の先輩と同級生とで立ち稽古を始める。演技に集中しようとすればするほど食堂でのパパの事が頭に浮かんでしまふ。

演技が一通り終わると尚先輩に指摘されてしまった。

「神楽坂さんは集中しきれてないわね。良いモノを持っているのに勿体無いわよ。何か気になることでもあるのかしら？ まあ、始めたばかりだから仕方が無いのかしら」

「すみませんでした」

色々指摘されたのは私だけではないのだけど自分自身で判っているだけに凹んでしまふ。

1・2年生が演技し終わると尚部長と柏木副部長の3年生による立ち稽古が始まった。

流石に段違いだった、見ている下級生達を圧倒する。

休憩を挟んで後半は文化祭に向けての演目と配役が決められる事になっただけだ。

「美奈は凄いね」

「ええ？ 何を言ってるの？ あんなに指摘されたのに」

「でもね、今まで一度も尚先輩は誰一人として良いモノを持っていないなんて言わなかったんだよ。美奈には素質があるのかも」

「そんなに煽っても何もあげないよ」

休憩が終わっても私の頭の中にはパパとマコお姉ちゃんの事ではなかった。

文化祭の演目は麻美が尚先輩に貸したライトノベルを抜粋しながら物語を組み立てていくらしい。

「美奈、ちゃんと聞いているの？」

「聞いているよ。『狼と香辛料』でしょ」

「凄い面白いんだから。今度読んでみれば」

「う、うん」

情けない事にパパの事になるとどうしようもなく他の事に集中出来なくなってしまう。

尚先輩が配役の説明をしている。

1年生は裏方の仕事から覚えていく。

演劇では役者以上に裏方の仕事が必要な役柄で、故に1年生が端役にも選ばれればそれは凄い事だと麻美から聞いている。

いくつかの大会で賞を取っている青城の演劇部はそれだけ部員の層が厚いと言う事なのだろう。

私なんかは演劇に興味も無く麻美に誘われて半ば強制的に演劇部に入部したのだから3年間ずっと裏方でも良いと思っていた。

何気なく窓の外を見ると砂浜をパパの後について歩いているマコお姉ちゃんの姿が見えた。

食堂で聞いたオバちゃんの声が蘇ってくる。

『久しぶりに神楽坂さんが見えたでしょう、だから甘えてきたら良いだらあ』

その時に会議室にどよめきが起こり、尚先輩の声がした。

「神楽坂さん？ これで良いかしら？」

「は、はい？ へえ？」

「了承という事で良いのかしら？」

尚先輩が示しているホワイトボードにはキャラクターの名前と配役が書かれていて、ヒロインの『ホロ』というキャラの下に私の名前が書かれていた。

「美奈、主役だよ！」

「……………」

麻美の嬉しそうな声にも何も反応が来ない。

有り得ない事が起きたのだ。

1年生のそれも途中から入部した私が主役なんて出来る訳が無かった。

「む、無理です、部長」

「決定ね」

「ええ！ そんな」

「ちゃんと聞いていない罰と言うのは嘘で読めば読むほどあなたしか『ホロ』の役をこなせる人が居ないの。皆でフォローするから頑張りなさい」

「決定つて……………」

全身から力が抜けてしまい、その場にしゃがみ込んでしまった。

同級生からは凄いななんて言われて、2年生と3年生の先輩は笑顔で私の顔を見ている。

私の顔は血の気が引いて青いに違いがないのに。

「では昼食後は自由行動になります。この海は穏やかだと聞いていますぐくれぐれも注意する様に。解散」

柏木副部長の声で部員がそろそろと会議室を出て行く。

私は麻美に連れられて会議室を後にした。

ピーチ

昼食は良く冷えた素麺だった。

バランスも考えられていて豚しゃぶのサラダ付きでノンオイルの胡麻ドレッシングとピリ辛の中華風ドレッシングが用意されていた。

1年の私が主役に抜擢だなんてあまりにも衝撃的で今は考えも及ばない状態で考えるのを止めてしまっていた。

食堂ではマコお姉ちゃん達が配膳してくれている。

「マコお姉ちゃん。パパは？」

「どうかなさいましたか？ 美奈様は元気が無いように見えますけど。優様は海に行かれましたよ。私、優様に我が俣を言っただけに散歩に付き合っただけです。」

「お散歩？」

「はい、優様はなんと言えれば良いのでしょうか私の理想の父親ですから。優しくって大きくって包み込んでくれるそんなお方です。」

「そっか、それじゃパパになってもらえば良いじゃん。」

「ええ、それは出来ません。」

「私がお願ひしてみますね。パパが良いって言えればマコお姉ちゃんは良いんだよね。」

「は、はい。それは優様がそれで良いとおっしゃるのなら、私は一向に構いませんが。」

マコお姉ちゃんが赤くなつてモジモジしている。

そんなマコお姉ちゃんを始めて見て、オバちゃん達が言おうとしていた事が少しだけ判った気がした。

恩義を感じて今まで一生懸命に仕事に打ち込んで来たのだろう。

パパの話ではこの保養所はあまり使われていない、そんな使われていない施設なのに埃一つ無いくらいに目が行き届いている。

だからこそパパは毎年でも合宿に使ってくださいと言ったんだと思う。

パパはちゃんとマコお姉ちゃんを認めている証拠だし、マコお姉ちゃんも恩義なんて重苦しいモノを背負って行く事を良しとは思わない筈だから。

昼食を食べ終わると私は直ぐに麻美に声をかけた。

「麻美、泳ぎに行こう！」

「へえ？ 立ち直り早！」

「早く行くよ」

水着に着替えて夏空が広がるプライベートビーチの様な砂浜に飛び出した。

ビーチを見るとパラソルが一本立っていて、パラソルの下でサマーベッドに座って海の方を見ているパパの姿が見えた。

「パパ！」

「美奈、待つてよ」

麻美と繋いでいた手を離して駆け出すと麻美が慌てて追い掛けてきた。

パラソルの下まで来てパパの顔を見ると海の方にいる先輩や同級生の水着姿を見ているようにしか見えなかった。

「パパ？ 何をしているの？」

「ん？ 目の保養かな」

「はえ？」

思わず変な声を上げてしまう。

いつものパパからとんでもない事を聞かされたような気がしてもう一度聞いてみた。

「パパ、何をしているの？」

「ん？ 目の保養だよ」

「……………」

聞き間違いじゃ無いみたい。なんだか判らないけど心の底から沸々と湧き上がってくる。

思わず、羽織っていたシャツを脱ぎ捨ててパパの目の前に仁王立ち

になりパパの視線を遮断する。

私が着けている水着はパパのお勧めのシンプルな花柄のビキニだった。

「ミーナ、そんな所に立つたら見えなでしょ」

「そんなに見たいのなら私の水着姿を見れば良いでしょ！」

「どうして？ 僕はミーナの一糸まとわぬ姿を何度も見た事があるんだよ」

「そ、それは赤ちゃんの頃でしょ」

「ええ、一緒にお風呂に入ってたのが……」

「駄目！ どうしてそんな恥ずかしい事を友達の前で言うの？ パパなんか……？」

大声で叫ぼうとして麻美を見るとお腹を抱えながら爆笑モードになっている。

語尾が尻すぼみになってしまった。

「酷いよ、麻美まで」

「ああ、苦しい。だってこのビーチってプライベートビーチみたいで監視員なんていないじゃん。それに大人の人も。ね、パパさんそこまで麻美に言われて気が付いた。

パパは昼食をオバちゃん達に任せて誰が泳ぎに来ても良い様に安全の事を考えてビーチに来ていたんだ。

でも、麻美が気付いて私がパパの行動に気付けないって……何だか凹むなあ。

「それじゃ、パパは監視してたんだね。危険が無いように」

「ん？ やっぱり保養かな？ この海は遠浅だからね」

「それじゃ、一緒に泳ごうよ」

「ん？ ここで座って」

「それは却下、自由時間はパパと一緒に居て良いんですよ。せつかく海に来たんだから泳ぐの」

「しょうがないな、ミーナは」

そう言いながらパパは立ち上がって私の頭をクシャッと撫でてくれ

た。

パパはハイビスカス柄のサーフパンツを穿いている、筋肉質で凄く締まった体つきをしているのを不思議に思った。

だって、前まではもう少し柔らかかそうな体つきだった記憶があるって変な意味じゃないよ。

ちよつとだけ恥ずかしくなつてパラソルの方を見ると麻美はパラソルの下で座つたままだつた。

「麻美、泳ごうよ」

「ちよつとだけ休憩しとく。食べ過ぎちゃつた」

「もう」

仕方なくパパの腕を掴むといつの間に来たのかパラソルの下で尚先輩と麻美が何かを話しているのが見えた。

「あれじゃ、まるで恋人同士ね。あなたの方でいったとおり親子には見えないわね。それにお父様は普段はむしろ老けて見えるように心掛けている気がするのだけど」

「流石、部長ですね。パパさんは若いのに敢えて年上に見せようとしてるんです。美奈と親子である為に」

「大久保さんは妙な言い方をするわね」

「白銀部長、ここだけの話ですよ。美奈とパパさんは血の繋がりが無くつて、パパさんは19歳の頃から美奈のことを独りで育ててきたんです。美奈はそれを高校に上がる前に知つてギクシヤクしていたのがやつと元通りになつて。それでもお互いに意識しているんだと思いますよ、親子でいる為に」

「それじゃ、あなたはどなの？」

「えへへ、私もパパさんの事は大好きですよ。私は父の顔も存在も知らないで生まれてきましたから。そんな私にもパパさんは凄く優しく接してくれますから」

「でも私はあの神楽坂さんには凄く黒い闇の様なモノを感じるんだけど」

「そうかもしれないですね。パパさんは誰にでも優しいですし。心に傷を持っていたり、闇を抱えている人に対しては特にです。それはパパさんが痛みを知っているからだと思うんです。パパさんの優しさの裏に何かあるうと私は美奈とパパさんを信じますから」

「それがたとえ悪でも？」

「悪や正義なんて立ち位置の差じゃないんですか？ 例えばある企業が大規模な開発をしようとしている。そんな企業に牙を向く人は企業から見れば悪かもしれない、でも開発されてしまう地域住民からしてみれば企業に牙を向く人は正義なんですよ」

「あなたは本当に高校生なの？」

「うふふ、尚先輩には言われたくないです」

「お互い様なのね」

「なんで、眼鏡を掛けて来るかなあ。コンタクトにすれば良いのに」
「そうかな、眼鏡を掛けていると頭良さそうに見えるからかな」
「変なの」

「このビーチは波が凄く静かで遠浅だったと思う、子どもの頃の記憶だからちよつと曖昧かもしれないけれど今日は少しだけ波がある様な気がした。」

それでも他の海水浴場に比べれば静かな方なただけだ。

私がパパの手を引っ張りながら波打ち際に行くと同級生で一卵性双生児の山吹姉妹が居た。

2人は色違いのフリルが付いた水玉のお揃いのワンピースタイプの水着を着て大きな浮き輪につかまって遊んでいた。

「うわあ、美奈ちゃんのパパだ」

「パパ、同級生の山吹さんだよ。声を掛けてくれたのがお姉ちゃん
の瞳ちゃんでお姉ちゃんの後ろに隠れているのが妹の愛ちゃんだよ」

「はじめましてかな？ 食堂で何度か会っているかな」

「はい」

瞳ちゃんと愛ちゃんは演劇部に入って最初に仲良くなった友達なん

だ。

姉の瞳ちゃんは物怖じしない性格で妹の愛ちゃんは引つ込み思案な性格なの、妹の性格を少しでも直そうと瞳ちゃんが半ば強引に愛ちゃんを連れて演劇部に入部したんだって。

2人とも小柄でぱつと見たら高校生には見えないんだけど、天然パーマのクリンクリンのセミロングの髪の毛でまるで天使みたいに可愛い。

でも2人の性格は正反対なんだよね。

「瞳、あっちに行こう」

「もう、愛はしょうがないな。それじゃ後でね、美奈ちゃん」

「うん」

浮き輪の中にいる愛ちゃんが消えそうな声で言うのと瞳ちゃんがパパにお辞儀をして、浮き輪に付いているロープを掴んで沖に向かって歩き出した。

「可愛いでしょ。天使みたいで」

「そうだね、演劇部には色々な人が居て楽しそうだね」

「凄く、楽しいんだよ。先輩も後輩も無く友達みたいで……えい！」

「ははん、ミーナはそう言うことをするんだ」

私の話を聞いていたパパに向かってふざけて両手で海水を掛けるとパパは頭から水を垂らしながら仕返しをしようとす。

「あっかんべーだ」

「ミーナ、覚えてろ！」

「鬼さんこちら」

子どもの頃の様にパパと海の中で追いかけてつこをする。

パパが本気を出せば直ぐに追いつかれて捕まってしまうけど、パパはそれをしないで追い掛けてきてくれる。

そんな少しの事が嬉しくてはしゃいでしまう自分が居る。

波打ち際に走り出したり、泳いで逃げ回ったりしていると時間を忘れてしまう。

「ミーナ、ギブアップ！」

「もうなの？ だらしが無いなあ」

「あのね、ミーナの方が若いんだから敵うわけ無いだろ」

「嘘つき、本気なんて出してないくせに」

「あはは、バレバレか」

パパは波打ち際で座り込んで後ろに手を着いて空を見上げている。

私もパパに釣られて空を見上げると大きくって真っ白な綿菓子みたいな雲が青い空をゆっくりと泳いでいた。

太陽の光りが眩しくって思わず額に手を置いた。

「綺麗だね」

「気持ち良いよね」

そんな事していると柏木先輩の声が響いた。

「おい、戻って来い！ そんなに遠くに行くな！」

「柏木先輩？」

私が振り向いて海を見ると沖の方に浮き輪が見える、それは瞳ちゃんと愛ちゃんが遊んでいた浮き輪だった。

すると、急にパパが立ち上がった。

「パパ？」

「ここの沖は少し潮の流れがあるんだ。戻れないのかもしれない」

「ええ！」

私が声を上げるとパパが眼鏡と何かを手渡した。

「ミーナ、持つて。僕が連れ戻してくる」

「パパ、危ないよ」

「柏木君、白銀さんに連絡を」

「は、はい」

柏木先輩の返事も聞かずにパパは走り出して海に飛び込んでいく。そしてまるでライフガードの様に顔を出しながらクロールで沖に向っている。

波間にパパの頭が見えたり消えたりを繰り返している。

心配で腰まで海に入ると後ろで尚先輩を呼ぶ柏木先輩の声がした。

パパがあつという間に瞳ちゃんと愛ちゃんの浮き輪にたどり着いて声を掛けてるのが見てとれた。

2人も必死になって砂浜に向って泳いでいたのだろう。

そして浜に向ってパパが泳ぎ始めて少しすると3人の姿がはっきりと見えてきた。

ホッとしてパパが海に飛び込む前に私に渡した物を見ると、それはパパの眼鏡とパパが履いていたハイビスカス柄のサーフパンツだった。

「うわあ、パパの海パンじゃん。それじゃ今は……」

慌てて顔を上げるとパパが浮き輪のロープを引きながら胸まで海に浸かって歩いているのが見える。

そしてやっと浅瀬に戻ってくると尚先輩が白いワンピースのまま海に駆け込んだ。

心配で仕方が無かったんだと思う、無事な2人の姿を見て尚先輩がもの凄く怖い声で瞳ちゃんと愛ちゃんを叱り飛ばそうとした。

「あれほど注意したのに、あなた達は！」

「ストップ！ 白銀さん落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか？」

「ストップ」

パパが荒々しい声を上げる尚先輩の目の前に人差し指を上に向けて突き出して優しく言いながら微笑み返した。

「白銀さん、怒っちゃ駄目だよ。瞳ちゃんと愛ちゃんは十分反省しているし自分達が一番悪かった事を理解しているから」

「神楽坂さんは甘過ぎます！」

「それじゃ、白銀さん。一番怖かったのは誰なの？ 怒って良いのは聞き分けが無く反省が見られない時だけだよ。彼女たちは十二分に反省しているでしょ」

パパの言葉で尚先輩の怒りの矛先が大きな青空に吸い込まれていった瞬間だった。

尚先輩の顔には安堵と優しさが戻っている。

それを確認したパパはしゃがみ込んで、疲れ切って放心状態の瞳ちやんと愛ちやんの頭を撫でながら2人に優しく声を掛けると2人は感情が爆発したように泣き出してパパに抱きついた。

「もう、大丈夫だからね」

「ゴメンなさい！」

「ん、怖くない、怖くない」

2人に抱き付かれてパパは尻餅を付いてしまったけど、まるで小さな子どもをあやすみたいで2人を包み込む様に抱きしめている。

しばらくすると瞳ちやんと愛ちやんはまだしゃくり上げているけれど落ち着きを取り戻したようだった。

「柏木君、2人を頼めるかな？ かなり体力を消耗しているからね、宿で体を温めて休ませてもらえるかな」

「は、はい」

パパに呼ばれて柏木先輩と尚先輩が瞳ちやんと愛ちやんをバスタオルで抱えるようにして合宿先の紫月に連れて行く。

騒ぎで集まっていた先輩や同級生も心配しながら後を追うように紫月に戻っていった。

「はあ〜良かった。何事も無くて」

「そうだね。久しぶりに全力で泳いだから疲れたよ」

そんな事を言いながらパパは砂浜に倒れ込むように仰向けで大の字になった。

「でも、パパの事を見直しちゃった。凄く泳ぐのが早いなだね」

「僕が生まれ育った島じゃ泳ぐくらいしか遊びが無かったからね」

「そうなんだ、でもこんな物を女の子に持たせるかな」

「ん？ ああ、サーフパンツね。仕方が無いでしょ緊急事態だったの、サーフパンツは足に絡み付くから泳ぎにくいんだよ。もしかして裸だと思ったの？」

「馬鹿！ 思うわけ無いでしょ」

ちよっただけ脳裏を掠めた事をずばり言われて恥ずかしくなって声

を荒げちゃった、パパは競泳用のハーフスパッツの黒い水着をサーフパンツの下に穿いていたの。

パパにサーフパンツと眼鏡を渡すと無造作に砂浜に放り投げた。仕方なくパパの側にしゃがみ込んでサーフパンツを簡単に畳んでその上に眼鏡を置いてパパの顔を見る。

眼鏡をしていないパパの顔をみるのって始めてかも。

髪の毛は濡れてしまつて自然に後ろに流れてて、疲れて目は閉じているけれど睫が意外と長くて。

いつもと別人の顔に見えて思わず顔を近くに寄せてマジマジとパパの顔を覗き込んだ。

すると、突然パパの瞳が開いた。

「うわぁ！ み、ミーナは何をしているの？」

「ご、ゴメン。眼鏡をしてないパパの顔が珍しくって」

「もう、キスされちゃうのかと思つたよ」

「そんな事をパパにする訳ないでしょ」
慌てて顔を離すけれど心臓の鼓動があり得ないくらいにドキドキしてる。

眼鏡を外し髪が自然のままのパパの顔はとても若く見えて、予想以上に衝撃的だった。

何故か判らないけれど、銀髪のおッドアイの男の人の顔とパパの顔がオーバースラップする。

もう、私つては何を考えているんだろう……

「あの、ミーナ。親子と言うより馬鹿ツプルにしか見えないんですけど」

「うわぁ、い、何時からいたの？」

急に麻美の声がして驚いて尻餅を付きそうになつちやっただ。

麻美はシンプルな青いストライプのタンキニの水着を着て私とパパの事を覗き込むようにしていた。

「酷い言われ方だな。私だつて心配だったから部長達とずっと居たでしょ」

「ゴメン、気付かなかった」

「そりゃそうか、大好きなパパさんの身に何かあったら大変だもんね」

「もう、麻美は本気で怒るよ」

私は立ち上がって照れ隠しの為に腕を振り上げて麻美を追い掛ける。麻美が私をからかいながら紫月に向って走って逃げて行くのを追いつけた。

「さあ、僕もシャワーでも浴びて一休みかな」

焼きもち

紫月の自分達の部屋に戻ってのんびりする事にしたの。

他の皆も海には行かずに部屋や大浴場でのんびりしているみたい。

流石にあんな事があつた後じゃ、海には行きづらいもんね。

「麻美、大浴場に行こう」

「う、うん。ミーナは恥ずかしくないの？」

「えっ？ 別に。だって女の子同士じゃん」

「わ、私は良いよ。部屋でシャワーを浴びるから」

「問答無用！」

麻美の口癖を真似して麻美の手を引っ張って半ば強引に大浴場に連れ出した。

でも、直ぐに後悔する事になった。

「神楽坂さんだ！」

私と麻美が大浴場に行き。体を流してから湯船に入ろうとすると先に来ていた2年生の先輩の声で私と麻美は囲まれてしまった。

「ねえねえ、神楽坂さんのパパって何歳なの？」

「何処の大学だったの？」

「神楽坂さんのお父様には特定の人が居るの？」

「今度、是非紹介して。お願いします」

矢継ぎ早にパパに対しての質問攻めにあつてしまつた。

訳が判らずオタオタしていると麻美が大浴場に来るのを嫌がっていたのに、恥ずかしげも無く急に立ち上がった。

「はいはい、その前に先輩に聞いて良いですか？ 山吹さん達はどついています？」

「あはは、そつだよね。ゴメン」

私の名前を叫んだ先輩は罰が悪そうに頭に手を当てた。

「彼女達なら、さっきまで部長とここでお風呂に入つてて、ちよっ

と前に部長に連れられて部屋に戻ったよ。今頃は寝ているんじゃないかな。凄く疲れていたみたいだから」

「そうなんだ、良かったね。ミーナ」

「うん！」

私が麻美に笑顔で返事をするのと周りに居る先輩や同級生の視線が突き刺さって、あまりの居心地の悪さに私の横で立っている麻美の手を掴んでしまった。

すると麻美が私の横で湯船に浸かって質問をしてきた。

「パパさんの歳は？」

「32歳」

「何処の大学？ もしくは高校？」

「うーんと、高卒って聞いたことがある」

「恋人は居るの？」

「居ないよ」

「それじゃ、皆に紹介する？」

「パパに迷惑が掛からないなら良いかな」

「以上で質問タイム終わり！」

麻美が強引に話を切り上げてしまうと「宜しくね」などと言いながら先輩達が私と麻美の回りから居なくなった。

やっぱり紹介しないとイケないのかな？ なんだか心の中がモヤモヤしている。

そんな事を感じていると麻美が独り言のように喋り出した。

「ああ、皆にはれちゃったか」

「ええ、何が？」

「何がって、ミーナのパパさんが凄く優しくって格好良いって事。ミーナだってイケてるって思っているんですよ」

「私は別に」

「へえ、眼鏡を外したパパさんの顔に見蕩れていたくせに。あれは恋する乙女の顔だったぞ」

ブク・ブク・ブク…… 乙女って、それも恋する？ 麻美にそんな

事を言われて顔が真っ赤になってそんな顔を見られるのが嫌で湯船に潜っちゃった。

「うわあ、フラフラしゅる」

「あのね、湯船に浸かり過ぎなの。のぼせて当然でしゅ」

「だって、麻美が変な事を言うんだもん」

「あはは、ここにもニブチンが」

「何が？」

「ぷっぷぷぷ」

何も噴出す事は無いと思うんだけどな。

真面目に聞いたのに麻美は噴出してから爆笑モードになって話しにならなかった。

そんな麻美を無視しながら部屋に向っていると前からマコお姉ちゃんが歩いてきた。

「マコお姉ちゃん」

「あら？ 美奈様はお風呂上りですか？」

「うん、ちよつとのぼせちゃった」

「それでは、直ぐにお部屋に何か冷たいお飲み物でもお持ちしますね」

「ありがとう、もう平気だから。それよりパパを見なかった？」

「優様ですか？ 優様ならお風呂から上がられて中庭の木陰でハンモックに揺られていますよ。ほら、あそこで」

マコお姉ちゃんが指差した窓の外を見ると大きな木の木陰でパパがハンモックに腰掛けて、数人の演劇部の女の子に囲まれていた。

「早！ 流石、演劇部。前に出たがる女の子ばかりだね」

「あらあら、優様はやはりおもてになるんですね。お優しい方ですもんね」

パパは満面の笑顔で女の子達と何かを話しているみたいだった。そんなパパを見ていると訳も判らずイライラする。

「もう、パパたら。デレデレと鼻の下なんか伸ばして」

「はいはい、パパさんの事が気になるんですよ。行くよ!」

「うわあ、待ってよ。麻美!」

麻美が私の手を取って走り出して慌てて後を付いていく。

マコお姉ちゃんは麻美の勢いに呆気に取られて立ち尽くしていた。

中庭に面したドアを開けてそこにあつたサンダルを履いて中庭に出ると女子部員が自己紹介をした後だったみたい。

「志穂ちゃんに舞ちゃん。それに純ちゃんと美紀子ちゃんに恵美ちゃんだね」

「うわあ、美奈さんのお父さんに名前で呼ばれちゃった」

「なんだかこそばゆいね」

「これからも宜しくお願いします」

「は、恥ずかしい」

「か、格好良い!」

そんな事を口々に言っつてパパに質問をし始める。

パパがどう答えるか知りたくて麻美の手を引いて木の陰に隠れてしまった。

「あのう、聞いても良いですか? その左手の薬指と小指のリングって……」

「ああ、これは僕と美雪の結婚していた証だよ。結婚指輪じゃないんだけど付き合い始めた時に2人で買ったペアリングなんだ」

パパは左手の薬指と小指に何も装飾の無いシンプルな幅広のシルバ―の指輪をしていて仕事中も絶対に外さないの。

仕事中に外さないと注意されないのって聞いたことがあるんだけど。やっぱり最初の頃は言われたみたい、でもパパは頑なに指輪をして仕事に行つて『結婚していた証』だって指輪の事を聞かれる度に説明し続けたみたい。

「美雪さんつて美奈さんのお母さんですか?」

「そうだよ。ミーナは美雪に良く似ているからね、そう言えば写真が。ほらね」

「うわあ、綺麗。目元なんか美奈さんにそっくり」

パパが財布からママの写真を皆に見せている。

正直言うとパパがママの写真を肌身離さず持っていた事が不思議だった。

「美奈ちゃんのママって凄い美人さんなんだ。美男美女のカップルって本当に居るんだね」

「あはは、僕なんか何処にでも居る君達から見れば普通のおじさんだよ」

謙遜してそんな風に言っているんじゃないかと、パパは本当に真面目に自分の事を普通だと思って思っている節があるの。

娘の私が見ても結構イケてるって思っただけだなあ。

すると突然、背後から声がした。

「優様、そろそろお時間が。み、美奈様？」

マコお姉ちゃんがパパを呼びに来たみたいで、咄嗟に口到人差し指を当てて「しい」と小声で言ったけど遅かった。

パパがハンモックから立ち上がる気配がして見つかってしまった。

「あれ？ ミーナに麻美ちゃんじゃないか。そんな所に隠れて何をしているの？」

「ふんだ！ パパのバーカ」

「美奈、美奈ってば」

思わず悪態を付いて振り返ってマコお姉ちゃんが開けているドアに向って急ぎ足で歩きはじめると麻美が慌てて追い掛けてきた。

「どうしよう、神楽坂さんを怒らせてしまったみたい」

「大丈夫、ちょっと拗ねているだけだから。僕が後で話をしておくよ」

そんなパパの声が聞こえてきたけど絶対に機嫌なんか直さないんだから。

ドアの所でマコお姉ちゃんが不思議そうな顔をしていたけど私は構わずドアから中に入って部屋に向った。

夕食の準備が出来ましたって連絡があつて、麻美と食堂に向う。
今日の晩御飯はハンバーグだった。

学食みたいにトレイを持ってサラダやフルーツが盛つてある小皿を
トレイに載せて進むとパパがフライドポテトの盛つてある大きなお
皿に焼きたてのハンバーグに目玉焼きを乗せてトレイに載せてくれ
ている。

ご飯とスープはマコお姉ちゃんが入れているのが見えた。

「うわぁ、美味しそうだね。ミーナ」

「うん、パパが作ったのかなぁ」

「本当にミーナはパパが好きなんだね」

「でも、今日はパパなんか嫌いだもん」

「まだ、拗ねているの？　しょうがないなぁ」

そんな事を麻美と言いながら並んでいると直ぐに私と麻美の番にな
った。

「パパさん美味しいそうだね」

「美味しいよ、地元の和牛のハンバーグだからね」

「うはぁ、美味しそう」

麻美が嬉しそうにトレイに載せてもらったハンバーグの匂いをかい
でいた。

そして私がトレイを差し出すとパパがお皿を載せてくれてハンバー
グにお子様ランチについているような小さな旗を立てた。

黄色いニコニコマークの旗でマークの下に『To The Bea
ch!!』とパパの字で書かれていた。

目ざとくその旗を見つけた麻美が声を上げる。

「ああ、ずるい！　ミーナだけ特別なの？」

「あのね、麻美。旗が立っているだけでしょ」

「私だって旗が欲しいんだもん。やった！　フラッグが立った！」

パパが笑いながら麻美のハンバーグにも小さな日本の国旗を立てる
と子どもの様に麻美がはしゃいでいる。

フラッグが立つって微妙に違う意味だと思ったけど麻美のいつもの

悪ふざけだと思って聞き流した。

食事が終わろうとした時に部長の尚先輩が立ち上がり皆に声をかけた。

「申し訳ないけど、食事を終えたらそのまま食堂に残ってもらいたい。どうしてもしておかなきゃいけない事と報告事項があるから」

「もう皆食べ終わっているね。ご馳走様でした」

尚先輩に続いて柏木先輩が声をかけると全員が声を上げた。

すると山吹姉妹と尚先輩が立ち上がりキッチンの近くに歩き出して、山吹姉妹が皆に向って頭を下げた。

「ご心配をお掛けして大変申し訳御座いませんでした。これからも演劇部で頑張りたいので宜しくお願いいたします」

何処からともなく拍手が聞こえる。

それはキッチンの入り口にいたコック姿のパパだった。

すると部員達もパパに続いて拍手をし始める。

尚先輩が山吹姉妹に何かを言うと2人がキッチンの入り口に居るパパの前に立って再び頭を下げた。

「神楽坂さん、本当に助けていただきありがとうございます」

「ん、海や自然には危険が付きものだからね。もう、判ってるよね」

「はい！」

「ん、良い子だ。瞳ちゃんも愛ちゃんを助けようと必死だったもんね」

そんな事を言いながらパパは2人ともお揃いの可愛らしいロゴの入ったTシャツにお揃いの短パンを穿いている瞳ちゃんの頭を優しく撫でると瞳ちゃんが恥ずかしそうに照れている。

それを見ていた尚先輩が驚いた顔をしていた。

私も驚いてしまう。殆ど見分けがつかない双子なのにパパはこの短時間の間に既に2人をきちんと見分けているようだった。

「あのう、神楽坂さん。もしかして彼女達を見分ける事が……」

「もちろんだよ、2人とも全然違うでしょ」

「……………」

パパは平然と言つてのけると尚先輩が今まで一度も見た事のない様な顔をして啞然としている。

それは私だけではないみたいで同級生はともかくとして2・3年の先輩達は驚きを隠せないでいるみたいだった。

すると尚先輩がパパに後ろを向かせ瞳ちゃんと愛ちゃんの立ち位置を入れ替えてパパに確認させるとパパは2人がどっちか言い当ててしまう。

何度やつても結果は同じだった。

そして、尚先輩は2人の後姿でパパに確認をさせようとしていた。

「どちらが誰だか判りますか？」

「ん、こっちが瞳ちゃんでこっちが愛ちゃんだよね」

瞳ちゃんと愛ちゃん達ですら驚いて目をまん丸にしている。

「うわあ、美奈ちゃんのパパは凄すぎです。私達のパパとママでさえ区別がつかないのに」

瞳ちゃんがそう言うのと愛ちゃんがウンウンと大きく頷いている。

それはまるで何かのショーを見ているみたいだった。

「そんなに皆に見られると照れてしまうよ。僕は営業の仕事をしているからね、仕事柄かな。人の顔を覚えるのが仕事みたいなものだからね。一度会った人の顔と約束は忘れないよ」

「本当ですか？」

パパが照れながら鼻の頭を指で搔いていると誰かがそんな事を言い放った。

「うん、食事前に自己紹介してくれた子の名前と顔なら一致するよ。あそこに居るのが純ちゃんに志穂ちゃん。こっちが舞ちゃんで奥に居るのが美紀子ちゃんに恵美ちゃんだよね」

「す、凄い」

柏木先輩が呆気にと取られて声を漏らして食堂からは喜びの声やら歓声が上がっている。

パパが名前を言い当てた女の子達は中庭で自己紹介をしていた先輩

や同級生だった。

そして彼女達は周りにいる人に抱きついたりして大喜びしていた。周りは盛り上げるけど私には府に落ちない事が、パパは確かに『約束は忘れない』って言っていたよね。

急激に温度が下がってくる。

私との旅行の事を忘れていたくせに……

そんな騒ぎがあつた後で私はパパからのメッセージを無視して麻美と部屋に戻って来ていた。

「でも凄いね、パパさんて。エリートサラリーマンだね」

「そうだね」

「はあ〜更に輪を掛けて機嫌が悪くなってる」

「パパなんか知らないもん」

「ミーナ、パパさんから何かあつたんじゃないの？」

鋭い、麻美はハンバーグの旗の事を言っているんだと思うけど私は誤魔化そうとした。

「別に」

「何も無い訳ないよね。パパさんがミーナのハンバーグに旗を立てたんだもんね。それに何か文字が書いてあつたよね」

「何でもないよ」

「ふうん、惚けるんだ？ この麻美様の目を欺けるとも？」

私を睨み付ける様にして麻美が襲い掛かってきて私の脇やわき腹をくすぐり始める。

逃げ出そうとしたけれど麻美に体力で敵うわけも無く、のた打ち回り息が出来なくなる寸前までくすぐられてしまう。

「ご、ゴメン。真美、もう勘弁して。息が出来なくて苦しいよ」

「それじゃ、言いなさい」

「うう、パパがビーチについて」

「もしかしてパパさんが砂浜で待ってるの？ もうかなり時間が経ってるよ」

「私は行かないもん！」

そう言って寝転がったまま麻美に背を向けた。

「そう、好きにしなさい」

「えっ？」

「ミーナの好きにすれば。そのうちパパさんも諦めて戻ってくるでしょう」

それだけ言うと麻美は壁にもたれて読みかけのライトノベルを読み始めてしまった。

私は仰向けになってヘッドフォンを耳につけて音楽を聞き始める。しばらくすると部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

麻美がそう言うとドアが開いてマコお姉ちゃんが立っていた。

私はヘッドフォンを外してマコお姉ちゃんの顔を見上げた。

「美奈様、優様をご存知ないですか？」

「どうしたの？」

「はい、優様に明日の事で連絡しておきたい事があるのですが携帯にも出られず、お部屋にも姿が見えないので」マコお姉ちゃんにそんな事を言われて時計を見ると食事が終わってから2時間が過ぎようとしていた。

まさか……まだ砂浜に居るの？

「パパを探してくる！」

「いつてらっしゃい。真琴さん、パパさんが帰ってきたら真琴さんに連絡するように伝えるから」

「はい、宜しく願います」

私は携帯を持って部屋を飛び出した。

マコお姉ちゃんだけが訳が判らずにポカンとしていた。

月の沙漠

紫月を飛び出して砂浜に向う。

空には綺麗な丸い月が浮かんでいて月明かりで外は明るい。

恐らくパパは紫月の前の砂浜に居るだろうと目を凝らして見るけれど人の影も形も無かった。

月明かりの夜はあの夜を思い出させ怖かったけれど、ここは街ではなく砂浜でこの砂浜の何処かにパパがきつと居ると思うと少しだけ怖さが和らいだ。

勇気を出して砂浜を歩き始める。

少し歩いただけなのに私は何かに躓いてよろけて声を上げてしまう。

「きゃあ！」

「ん？ ミーナ」

直ぐ先からパパの声が聞こえてきた。

砂浜に手を着いて顔を見上げるとパパが砂浜に仰向けになっていて体を起こしながら砂でも顔に掛かったのか眼鏡を外して顔を払っている。

そして私の方に顔を向けた。

パパと声を掛けようとしてパパの顔を見て心臓の鼓動が跳ね上がった。

眼鏡を外して月明かりに照らされてパパの目が朧げに右の瞳は金色にそして左の瞳は青く不思議な色を放っているように見えた。

それはパパが眼鏡を掛け直した一瞬の間だったから気のせいだったのかもしれない。

それでも心臓の鼓動は早打ちを止めてくれない。

「ミーナ、遅かったね」

「ご、ごめん」

パパの声で私は夢から覚めたように現実を引き戻されたような気が

した。

月明かりに照らされたパパの顔はいつもの眼鏡を掛けたパパの顔だった。

そんなはず無いよね……そうだよね有り得ないよね。

「ん、どうしたの？ 誰かと見間違えたかな？」

「私がパパの顔を見間違えるなんてそんな事があるわけ無いでしょ」
私は声を少しだけ荒げて自分の中に湧き上がった疑問とあの人の顔を払拭しようとした。

「そうか。僕はミーナに好きな人でも出来たんじゃないかと思ったよ」

「ええ？」

「だって、直ぐに来てくれると思ったのに。来ないから誰かにメールとか電話していたのになって」

パパにそんな事を言われてまるであの男の人の事を見透かされているようでびっくりしたけれど、パパは見当違いな事を考えていたみたいで胸を撫で下ろした。

「もう、そんな人なんて居るわけ無いです。ただ」

「ん？ ただ？」

「パパが皆と仲良くしてるから……」

「ん、そうか。こっちにおいで」

パパの横に少し間を開けて座るとパパが私の頭に手を置いて私の体を少し引き寄せた。

パパの体に凭れると少しだけパパの体が冷たく感じる、夜風にずっと吹かれていたからだろう。

「ゴメンね」

「ん？」

「何でもない」

「ん」

何も言わずにパパは寄り添ってくれる。

何も言わない優しさも有りかなくなって思うけど、私は今まで通りパパ

には何でも話してパパにして欲しい事はちゃんと伝えたい。
いつまでかは判らないけれどその時までパパとは変らない関係を
続けていきたいから。

「パパは私が襲われた時に助けてくれた人を知っているの？」

「ん？ どうしてかな」

「あの人は私を助けて『Vino』に連れて行ってくれた。マスタ
ーは無いも言わなかったけれど『誰だ』とも言わなかった。という
事はあの人の事を少なからず知っていると言っことですよ。マスタ
ーとパパは付き合いが長いんですよ。それなら知っているかなって」
「銀の髪で青い瞳と金の瞳を持つ銀狼の事だよな」

「銀狼？」

「そう、シルバーウルフなんて呼ばれていた伝説の人だよ」

「伝説の人？」

「パパはやっぱり知っていた。」

「パパの教えてくれたのは、昔々あの街が海外の色んな国の悪い人か
ら街を救ったって言う話だった。」

「日本の暴力団が法律で弱体化しそこに潰れ込んで外から色々な国の
マフィアと呼ばれている人たちが流れ込んできて、警察でさえ手が
付けられなくなってバラバラになりそうになった時に街を纏め上げ
た凄い人が居るって言う話だった。」

「それで伝説の人なの？」

「まあ、話半分の噂話だけだね。今でもほんの些細な事が都市伝説
なんて言われているでしょ。それと同じだよ」

「この話はこれでお終いだっただ、そして最後に一つだけ聞いてみた。」

「パパはその銀狼と呼ばれていた男の人に会った事はあるの？」

「僕は無いな。ミーナの事を助けてくれた人も本人なのかなんて判
らないでしょ」

「パパに言われて妙に納得してしまった。」

「今はコスプレなんていうアニメや漫画のキャラクターになり切って

いる人もいる。

そんな伝説とまで言われている人に憧れを抱く人も居るはずだから。何となく納得はするけれど、どこか寂しいものを感じたのも正直な気持ちだった。

「それじゃ、マコお姉ちゃんと朝ごはんの後に食堂で何を話していたの？」

「あはは、聞かれちゃったのかな？」

「美奈には内緒だよって」

「恥ずかしいな、実は内緒で料理教室に通っていた事があるんだよ。僕は調理の仕事をした事があるけど基本から教えてもらった訳じゃないからね」

「そうだったんだ」

「それと料理の秘訣は愛情だからね」

「パパに愛情なんて言われて顔が赤くなってしまう。」

でも月明かりじゃパパにはばれないよねってばれてる？」

ちよつとだけ気になって別の話を聞くことにした。

「パパはママの写真を肌身離さず持っているの？」

「持っているよ。僕の大切な家族だからね」

「パパが皆に見せていた写真を見せてくれた、その写真は綺麗なママが小さな女の子を抱っこして微笑んでいる写真だった。」

「これってママと私の写真じゃない」

「そうだよ。もしかして美雪だけの写真だと思っていたの？」

「う、うん」

「美雪だけの写真は殆ど無いよ、いつもミーナと一緒にいたからね」
「そうなんだ」

「はあはん、それで真琴や演劇部の子と僕が仲良くしていたんで拗ねていたんだ。本当にミーナは美雪とそっくりだね」

「えっ？ ママと」

「うん。美雪も焼きもち焼きでね、ご機嫌取るのが大変だったんだ」

から」

「そ、そうなんだ」

あ、あれ？ 今、ママにも焼きもちを焼いていたのかな？
少しチクリとしてしまう自分に驚いてしまった。

しばらく波の音を聞いていると心が落ち着いてくる。

「綺麗だよ、月明かりって」

「不思議な光りの色だよ。青というか紫というか、あつだから紫月なのかな？」

「そうかもね」

パパに凭れながら眠ってしまいそうになる。

普段ならまだ眠くなる時間じゃないのに安心感とパパの温もりとパパの鼓動が伝わってくるようで。

眠気を覚ますように私はパパに頼み事をした。

それはマコお姉ちゃんのことだった。

「そうだね、僕もミーナと同じ考えだよ。真琴の重荷にはなりたくないけれど、如何せん真琴は生真面目な女の子だからね。恩義に感じすぎて困ってはいるんだけど僕が何度言っても聞かないんだよ」

「それじゃ、私が少しマコお姉ちゃんに話してみる」

「頼めるかな」

「うん！」

パパは私の考えに同意してくれた。

マコお姉ちゃんのお父さんはお酒を飲んでマコお姉ちゃんが子どもの頃から暴力を振るっていたらしい。

それ故に男の人が苦手で特に強い口調や大きな声の男の人の前では萎縮して何も聞かなくなってしまうって、パパも強く言えないで困っていたみたいだった。

「さあ、皆が心配するから戻ろう」

「うん。パパ、手を繋いで良い？」

「ん、良いよ」

私がパパと手を繋いで紫月の自分の部屋に戻ると麻美が手薬煉を引いて待ち構えていた。

部屋のドアを開けるなり麻美が私の側にいたパパにマコお姉ちゃんが探していた事を告げると、パパは直ぐにマコお姉ちゃんのところに行ってしまった。

麻美は相変わらず壁に凭れてお気に入りライトノベルを読んでいた。

そして本を床に置いて立つたままで居る私に話しかけてきた。

「さあ、何から話してもらおうかな？」

「ええ？ 何を？」

「何をじゃないでしょ。男と女がロマンチックな夜の砂浜でする事と言えば何かな？」

「んと、お喋りだよね」

麻美の質問に即答すると麻美の体が崩れ落ちた。

「あのね、健全な男女ならキスの一つや二つはするでしょ、普通は」

「キス？ キスう！」

月明かりの砂浜でパパとキスをしている所を思い浮かべてしまう。足の指先からカツと熱いものが体を駆け上がり頭まで達すると爆発音と共に顔や頭の毛穴と言う毛穴から水蒸気が噴出したような感覚になり、腰が砕けてしゃがみ込んで有り得ないくらい真っ赤になっている自分に気付いた。

「呆れた、キスを想像しただけでそんな状態になるなんて。どれだけ純粹培養されてきた訳？ 全てパパさんの責任だね。パパさん！」

「あの、お呼びでしょうか？」

「うわあ！」

「駄目！」

麻美がパパの事を大声で呼んだ瞬間にマコお姉ちゃんの声が出て、麻美は驚いて正座をして私は思わず変な声を上げて麻美の横まで這いずっていた。

「あのう、美奈様がお呼びだと。優様がおしゃいましたので夜分失礼かと思いましたが」

「う、うん。構わないから入って良いよ」

「失礼します」

マコお姉ちゃんが礼儀正しく一礼して部屋に入ってくる。

私と麻美は何とか平静を装い、麻美は一息ついてからライトノベルを再び読み始めてしまった。

「マコお姉ちゃん、適当に座ってね」

「は、はい。それでご用件は？」

「少しマコお姉ちゃんに話したい事があるの」

「はい」

正座をしているマコお姉ちゃんに私がきちんと向き合うように座り直すと、マコお姉ちゃんは少しだけ不安と言うか怪訝そうな顔をしている。

私は自分で考えた事を素直にマコお姉ちゃんに話し始めた。

「マコお姉ちゃんはパパに恩義を感じて仕事をしているんだよね」

「はい、結様は私と母の命の恩人ですから」

「その命の恩人の娘が私だよ」

「は、はい。美奈様は……」

「こんな言い方は年上のマコお姉ちゃんに対して凄く失礼な言い方かもしれないけれどはっきり言わせて貰うね。その美奈様は止めて欲しいの」

「そんな、私はただ」

「恩義に感じて？ 私には重過ぎるの。私がマコお姉ちゃんを助けた訳じゃないし私に対して恩義なんか感じないで欲しいな」

「でも美奈様は優様の」

「私はマコお姉ちゃんとは本当の姉妹の様にしていたいから、駄目かな」

「そんな事はございませんが……」

マコお姉ちゃんが急にこんな事を言われて戸惑っているのが良く判

る。

今、この関係を壊してしまわないとこれからのマコお姉ちゃんにとって一番駄目な事だと思うからあえて心を鬼にする。

マコお姉ちゃんとは本当の姉妹の様になりたい、それが私の本心だしそうなれると信じているから。

「久しぶりに会って私はマコお姉ちゃんの事を直ぐに思い出せなかった。それはマコお姉ちゃんと私の間には恩義と言う重く厚い壁があるからだと思うの。次に会った時も今回と同じが良いの？ 直ぐに思い出してもらえなくて良いの？」

「そ、それは嫌です。私も美奈様とは仲良くしたいです」

「本当に？ 仲良くなりたい友達のことを様付けで呼ぶの？」

「よ、呼びません。でも……」

「パパの事はどう思ってるの？ 嫌い？」

「そんな嫌いだ何てとんでも御座いません」

「そうだよ。パパも言ってたよマコお姉ちゃんは男の人が苦手なだけだつて。マコお姉ちゃんのお父さんは今どうしているの？」

「判りません、ここで母がお世話になるようになってから体を壊してどこか遠くの病院に入院したと聞いたのが最後で」

「あのね、パパも私と同じ気持ちだと思うよ。マコお姉ちゃんの重荷にはなりたくないつて言っていたからね」

「私は優様にとつても重荷なのでしょうか？」

「マコお姉ちゃんが決めてくれる？ 凄く酷な事を言っているのは判っているつもり。もっと時間が有れば良いのにと思っけど私とパパは明日には帰らなければならぬの。一晩しか時間が無いけど明日返事を聞かせて欲しいな」

「判りました」

困惑した弱弱しい声でそう言つとマコお姉ちゃんはこんな時でも礼儀正しく一礼をして部屋を出て行った。

「はあく疲れた」

「ニブチンのミーナにしてみれば上出来かな」

「うっ、凄く酷い言われ方をしているような気がするんですけど」
「だって、キスだけでアレじゃね」

「……………」

その夜は眠る寸前まで枕元でもの凄い話を麻美に延々とされて真っ白に燃え尽きてしまいそうだった。

姉妹

合宿最終日の朝がやってきた。

夏らしい朝と言えば良いのだろうか。

海風が気持ちよく蝉が元気に朝から鳴いている。

今日も太陽は元氣100倍なのだろう。

そんな清々しい朝と裏腹に私は昨夜の麻美に聞かされた話でぐったりしていた。

演劇部の朝練の後で気分転換に大浴場で気分一新してから食堂に向う。

今日は午後の出発なので朝練の後は自由時間になっていた。

朝食を各自で食べて好きなように過ごす。

残り時間を海で目一杯遊ぼうと大半の部員は館内に残っていないかった。

マコお姉ちゃんの姿が見えないのでパパに聞くとお母さんの所に用事があり早い時間に出て行ったらしい。

皆が海で遊んでいるのにパパが私と紫月に居て良いのかと聞いたら顧問が居るだろってパパに言われて初めて気付いた。

それも合宿最終日に…… 確かに今更だけどバスの中にも居たっけ。存在自体が薄い代々木先生が……

すっかり忘れてた、皆が一同に集まる食事の時に居たのかさえ思い出せなかった。

私は顧問の事もあつという間に忘れて、パパにマコお姉ちゃんやマコお姉ちゃんのお母さんのことを聞いていた。

マコお姉ちゃんのお母さんは紫月での働きを買われて、今は少し離れたリゾートホテルでハウスキーパーの管理職としてとして働いているらしい。

どうして助けたのなんて聞く必要も無いだろう人として当たり前

事をしたただけだとパパは言うに違いないのだから。

お昼前に紫月の前にどこかのホテルの名前が書いてある軽自動車
が止まる、パパが出迎えてマコお姉ちゃんと綺麗な女の人が降りてき
てパパに挨拶をして居るのが見えた。

あれがマコお姉ちゃんのお母さんなのかなと思っていると直ぐに車
で帰ってしまう、するとパパとマコお姉ちゃんが食堂にやってきた。
マコお姉ちゃんは眠れなかったのか少し疲れた顔をしている。

私と目が合うと少しだけ体を強張らせて視線を外されてしまい、堪
らず声を掛けようとしたらパパが手で待ての仕草をして私の事を制
した。

そしてマコお姉ちゃんを私の前に座らせてパパは何も言わずにマコ
お姉ちゃんの横に腰掛けた。

なんだか凄く居心地が悪い。

それはマコお姉ちゃんが憔悴しているのは私の所為で、それと同時
にマコお姉ちゃんの出した答えが怖かった。

2人にお茶でもと思って堪らず席を立ち、キッチンのカウンターに
お茶を入れに向った。

それを私が怒っていると勘違いしたのかマコお姉ちゃんが思わず口
を開いた。

「ゆ、優様。私はどうしたら良いのか判りません」

「ん？ 真琴は十分過ぎるほどしてくれているよ、もう少し肩の力
を抜いてごらん。真琴のお母さんだって心配しているんだよ。私が
あの子に命の恩人だからと言い過ぎたのがいけなかったのかもしれ
ないってね」

「でも、それは母の責任じゃなくって」

「僕もね、今までの真琴を見ているのが辛いんだよ。いつまでも恩
義に縛られて重い足枷を嵌めてしまったみたいだね。それならば、
あの時に助けられない方が良かったのかな？」

思わず耳を疑ってしまった。

あんなに優しいパパがそんな事を言うなんて信じられなくて思わずグラスを落としそうになってしまった。

死のうとしてしている親子を助けられない方が良いなんて思うはずが無い。誰だって躊躇わずに助けるだろう、それはある種の本能のような物なのだから。

「やはり、優様にとつても私は重荷になっていたんですね」

「違うよ。真琴の事が好きだから僕もミーナも心を鬼にして言うんだよ」

「でも、私はどうしてたら良いのか……」

マコお姉ちゃんは座ったまま泣き出してしまった。

涙を拭うでもなく両手は膝の上にきちんと置いたままポロポロと涙を零している。

パパが微笑みながらマコお姉ちゃんの涙を指で拭い優しく抱きしめた。

食堂にはマコお姉ちゃんが子どもの様に泣き叫ぶ声が響き渡っている。

まるでその姿は親に縋る小さな女の子に見える。

どうしたら良いのか判らないと言うマコお姉ちゃんの言葉の意味が判った気がした。

どう甘えたら良いのか判らなかつたんだと思う、それは小学生の頃の私と良く似ていた。

マコお姉ちゃんも私と同じだったんだ。

お母さんは必死になって仕事をしたんだと思う、助けられた事に報いる為に。

それをいつも側で見ていたから邪魔をしちゃいけないと自分自身もお母さんと同じ様にといい信じ続けて、母親と同じ紫月のハウスキーパーの仕事をして必死に報いる為に頑張ってきたのだろう。

「優様」

「ん？」

「私はどうすれば？」

「ん、真琴が始めてミーナに出会った時に僕は思ったんだ。まるで姉妹みたいだと。でも本当の姉妹にはなれない。真琴には僕とミーナはどう見える？」

「とても仲の良い素敵な親子にしか見えません」

「実はね、僕とミーナには血の繋がりは無いんだ。法律上は実の親子じゃないんだよ」

「そ、そんな……」

「ん、そうだね。信じられないよね。でもこれは本当の事でミーナにもこの事は告げてある。それでも真琴からすれば僕とミーナは親子にしか見えないんだよね」

「は、はい」

「それなら血が繋がって無くても姉妹にはなれるよね。ミーナと真琴が姉妹なら僕は真琴の何かな？」

「……さん」

「ん？ もう少し大きな声じゃないと聞こえないよ」

「お、お父さん！」

パパがマコお姉ちゃんの殻を破ったんじゃない。

マコお姉ちゃん自身に殻を破らせたんだ。

それはまるで親鳥が卵からかえろつとする殻の中にいる雛鳥に優しく鳴き続ける様に。

再びマコお姉ちゃんがパパにしがみつきながら、パパの腕の中で心の鎖を断ち切るかの様に泣いている。

その姿はすでに小さな女の子ではなく父親と娘の姿だった。

「今度、東京において。僕もミーナも待っているからね。約束だよ」

「はい、その……優……父」

「真琴が呼びやすい言葉でゆっくりで良いからね」

「はい！」

その言葉は何処までも澄んでマコお姉ちゃんの人柄を表すような真つ直ぐな響きだった。

東京に帰る時間になってしまいバスが迎えに来ている。

皆は私達に気を使ってか先にバスに乗り込んで何も言わずに待っていてくれた。

「マコお姉ちゃん、待ってるからね」

「うん、美奈も元気だね」

「お姉ちゃんもね」

「マコ、くれぐれも体に気を付けるんだぞ」

「はい、お父さん！」

私には血の繋がらないパパとお姉ちゃんがいる、だけど何処にも負けない家族だと思う。

コスプレ

夏休みも終わりに近づき私はマンションで孤軍奮闘・四苦八苦していた。

学園祭の演目も決まり、正式に主役のヒロインに抜擢されてしまった。

青城高演劇部は演目と配役が決まってからはもの凄い勢いで動き出す。

元々、チームワークは抜群で尚先輩と柏木先輩の指示系統はしつかりしていてその直属の先輩方は本能的？ 自動的に体が動き出す。

1年生はそれこそ小間使いの様に使われ東奔西走している。

しばらくすると不思議な事に自分が付くべき先輩の下で準備する様になっていった。

『本当に1年生は大変なんだから。主役に抜擢された誰かさんと違って』と麻美に笑われながら言われてしまった。

まあ麻美特有の弄りなのだろう。麻美は中学の頃から演劇部だったので主役クラスがどれだけ大変なのか知っているはずだから言える事なのだと思う。

私にしたって麻美以外の部員から同じ事を言われたら腹が立つに違いない。

そして既に台本も公演時の衣装も私の手元に届いていて台本は頭の中へ、衣装は着てみて手直しをしないといけない。

暗記は得意な方なので台本は頭の中にすんなり納まっているけれど、暗唱と演技はまったく別物で……

先輩方にアドバイスを貰おうとしたら部長の尚先輩にあなたはあなたのままで良いのと言われてしまい、誰からもアドバイスして貰えなくなってしまう。

そして衣装の方は採寸通りに裁縫が得意な先輩数人が手芸部などに手伝ってもらって仕上げ、試着してみたのだけどのだけど今一し

つくりしなかった。

という訳で私はマンションで孤軍奮闘・四苦八苦している。

「ん？ ミーナは何をしているのかなあ？」

「うわあ、な、なんでパパが居るの？」

「えっ、ええ。酷いな、今日は早く帰るからって言っておいたのに」

「あっ、忘れてた……」

「で、ミーナは衣装を着けてコスプレ？」

「わっちはコスプレなんて趣味はありんせん。それとも主様はこれが好みかやあ？」

会社から帰ってきたばかりのパパがスーツを着たまま『上手い、上手い』と言ってお腹を抱えてソファアの上で転げまわっている。

なんだか褒められている気がしない……

剥れて座り込むとパパが気付いたみたいだった。

「ゴメン、ゴメン。あんまり似ていたからさ」

「嘘つき、おかしいから笑うんでしょ」

「本当に似ていると思うよ。でも公演は物まねをする所じゃないからね。役をいかに自分の物にするかが大事なんだよね」

いきなり確信を突かれて何も言えなくなってしまった。パパに言われた事と同じ事を尚先輩に言われたから。

それは衣装を着けてうる覚えの台詞を言わされた時だった。

「コスプレ大会では満点かもしれないけど舞台では及第点は取れないわね。物まねじゃなくて、いかに役になり切るかが大事なの」

そこまで言っておいてアドバイスは必要ないってちよっと酷いと思っってしまった。

「それで、衣装を合わせた感じはどうなの？」

「う、うん。はっきり言うとしっくりこないの。動きづらい訳じゃないのだけど何だか引っ掛かる様な気がして」

「そうなんだ、それじゃ手直しするしかないね」

「パパ？」

「僕には無理だから」

即答されてしまった、パパなら何でも出来ると思ったのに。

どうしようか考えているとパパが携帯を取り出し出て何処かに電話をし始めたの。

「俺だけど。暇だろちょっと裁縫しに家に来ないか？」

「はあ？ 嫌だ？ 暇じゃない？」

「じゃ良いや、青高祭の演劇部のチケットは他の奴にやるから」

パパが話している青高祭の演劇部の公演のチケットは、ある意味プラチナチケットの様になってしまっていて毎年の様に電話回線がパンクするほどの問い合わせがあるけど生徒の知り合いが居ない限り手に入らない。

青城高の演劇部の人気の高さの思い知り、もの凄いプレッシャーを感じているのも事実だった。

パパがそんな電話をしてしばらくするとチャイムが連打された。衣装を着たままだった事などすっかり忘れて玄関に向っていた。

「はあーい。どなたですか？」

「私よ」

「えっ？ 新種の俺俺詐欺？」

「ち、違うわよ。ああ、もう健太よ！」

「マスター？」

「そうよ、早く開けなさい！」

玄関の外から『vino』のマスターの半切れの声が聞こえてくる。パパが電話をしていた相手はマスターだったみたい。ドアを開けて直ぐに閉めてしまった。

外にはマスターではなく背の高い女の人立っていた様な気がする。目の覚めるような緑色のドレープカットソーのワンピースにスリムなジーンズを穿いて、茶色いパンプスを履いている。

そして目深にワンピと同じ様な色のキャップを被ってざっくりとした生成りのニットポンチョを羽織っている、手にはピンク色のアルミ製の四角いケースと紙袋を提げていた。

そこまではつきりと見たのだから間違いないはず……

「美奈！ 怒るわよ。いい加減に開けなさい」

「ま、マスターなの？」

「だから健太だって言ってるじゃない。何度も名前を言わせないの！」

「……」

「早く開けなさい、さもないとドアを打ち破るわよ。3、2、1」
確かに声だけ聞くとマスターの声に間違いはない。

恐る恐るドアを開けてみると女の人が飛び込んできた。

「久しぶりにマジ切れする……きゃあ！ 賢狼が居るわ！」

「嫌あ！ パパ！ 助けて！」

女の人に突然抱き付かれて大声を上げてしまった。

すると背中にももの凄く冷たいモノを感じると今度は女の人の絶叫が玄関に響き渡った。

私が不思議に思っただけ振り返るとパパがいつもの様に『ん？』と首をかしげている。

女の人は何かに怯えるようにガタガタと震えていた。

そして今はリビングのソファアに腰を掛けている。

私はパパの隣にマスターみたいな女の人が私とパパの前に。

そしてテーブルの上には私が煎れて来たパパにはコーヒを女の人と私は紅茶、3つのカップそれぞれから湯気がゆっくり昇っている。

「ゴメンなさい」

「ん？」

女の人がマスターの声でシュンとうな垂れながら謝っている、いつものパパの受け答えがもの凄く硬く感じた。

「パパ、本当にあのマスターなの？」

「キャップなんか被っているからミーナに誤解されるんだ。キャップを取って顔を見せる」

「い、嫌よ。軽くお化粧だけしてきて髪の毛はボサボサなんだから」「それならもう良いや」

「取りますよ、取れば良いんですよ」

私がパパに聞くとパパは普段どおりの口調で女の人に言うと女の人
が渋々キャップを膝の上に置いて気まずそうに私の顔を見た。

その顔はとても綺麗なショートカットの女の人にしか見えない。

女の人が溜息を付きながら髪の毛を後ろで纏めて見せた。

「う、嘘！ 本当にマスターだ。キャップを被っていないくても判らなかつたかも」

「もう良いでしょ。私だって判つたんだから。そんなに怖い顔をし
ないで優ちゃんの怒つた顔は凄く怖いんだから」

マスターがパパにそんな事を言うけれど、私にはパパの顔が怒つて
いる顔には見えなかつた。

「いつまでもそんな冷たい目で見ないで頂戴。もう、何でも言う事
を聞くから。これで良いんですよ」

「ん、仕方がないか。ミーナは本当の姿を見た事が無いんだから」

「本当の姿つて、私は化け物じゃありません。ただ少し」

「人と違うだけか。お前はお前だろ」

「うん、ありがと」

パパとマスターの空気がなんだか柔らかくなった。

マスターが2丁目系の人だつて知っていたけれど『vino』以外
で会つた事がないから少しだけ驚いちゃつた。

それともう一つ驚いた事があるの、それはパパの喋り方なだけで
普段は落ち着いて丁寧に話しをするのにマスターと話している時は
ちよつと乱暴な喋り方をしているの。

「パパ、聞いても良い？」

「ん？ 何を聞きたいのかな」

「あのね、パパとマスターつてどう言う関係なの？」

「僕とマスターの関係？」

「うん、だつてマスターと話している時のパパっていつもと違つて言うか砕けてるつて言えば良いのかな。自分の事を俺つて言っているでしょ」

「幼馴染よ」

マスターが突然私の中に爆弾を投げ込んだ。

私を知りたがつていたパパの昔の事を知っている人がこんな身近にいたなんて、それも幼馴染つて言うくらいだから子ども頃から知っているつて事だよな。

私がパパの顔を見るといつもの調子でカップを手に取りコーヒーを飲んでいる。

「マスター。マスターも南の島で生まれたの？」

「南の島？ まあそうね、僻地よ。日本の隅つこの閉鎖的な所。2度と帰りたくない場所よ」

私が思い切つて聞いてみるとマスターはバツサリと言い捨てた。

もっと2人の生まれ故郷の事を聞いてみたいけれどあまり期待できそうに無い口調で、マスターは自分の生まれ故郷を心から嫌つていると言うより憎んでいる気がして。

それ以上は何も聞けなくなつてしまった。

「美奈は優ちゃんから何も聞かされてないのよね。あそこは何も無い所よ、あるのはまあ綺麗な海だけ。日本と言えば地理的には日本だけど文化からすれば日本じゃないわね。私はこの通り普通じゃないのは知っているわよね。今でこそ性同一性障害なんて言葉があるくらい認知されてきているけど、昔は異質な物として扱われたわ。特に私と優ちゃんが生まれ育つた島はとても小さな島で閉鎖的だと言えは閉鎖的でね。私は小学校の頃に自分の体に違和感を覚えて誰にも相談できずに悩んでいたの。でもどんな時でも優ちゃんは私に言ってくれたの『お前はお前だろ』つて」

「そうだったんだ、だからパパはマスターと話すときは友達として話すからつて。あれ？ そ、それじゃ私と話している時も他人行儀

なの？」

「あのね、美奈。幼馴染だって言ったでしょ。私と話す時は子どもの頃に帰るの。ただそれだけよ」

「でも。驚いちゃったな。マスターがそんなに綺麗な人だったなんて」

「もう、一体どんな風私を見ていたの？」

「ええ、格好良いけどクネクネした人だよ」

「ひ、酷い。優ちゃん、何とか言っつてよ！」

「まんまだろ」

「なんだか上手く言い包められた気がするけれどそれで言い気がしてしまった。」

「だって誰でも色んな顔を持っている、パパは仕事場ではバリバリの営業マンでお家では料理以外は駄目駄目の優しいパパで。」

「私だって家ではパパにデレるけれど学校では一応クーヤツンで通っているもんね。」

「美奈、ちよつと立ち上がってそこで回ってみなさい」

「う、うん」

「なんでパパがマスターを呼んだのか判らなかつたけれど。私はマスターに言われたとおりに衣装を着たまま立ち上がって1回転してみせる。」

「それから腕を動かしたり体を動かしたりして、マスターに言われてその通りに動いていた。」

「まあ、良く出来ているけれど。所詮素人が作ったものね、衣装としては上出来だけど洋服とすれば今一だわね」

「マスター、衣装と洋服って何が違うの？」

「そうね、それじゃ美奈はその格好で外を歩けるの？ 歩けないでしょこれはあくまで真似て作ったもの。決して本物にはなれないけれど舞台ではこれでも良いと言う事。私の言う洋服はその人の体にフィットして着ていても疲れない服の事よ。動きづらいでしょその衣装じゃ」

「う、うん。ちょっとだけ引つかかると言うか。何処が悪いのかが判らないから直しようが無いの」

「まあ、高校の演劇部の衣装なんてそんなものよ。本物の舞台の衣装はプロが作るんだもの。優ちゃん、ミシンはあるんでしょ」

「あつ、持ってくるね」

私がクローゼットからミシンを持ってくるとマスターは私が着ていた衣装のベストとスカートを手にとってじっくり見ている。

そして持ってきた可愛いピンク色のコスメボックスを開けると中には色んな裁縫道具が綺麗に入れられていた。

「うわあ、可愛い」

「私の商売道具よ」

「えっ？」

そんな事を言いながらあつという間に衣装をバラバラに解いてしまった。

私はその手つきに目を奪われてしまう。繊細に生地を傷つけない様に丁寧に解いているけれどももの凄く早さだった。

バラバラにし終わるとミシンを調整して縫い上げていくミシンの音だけがリビングにして、パパを見るとのんびりと眠たそうに欠伸をしている。

「出来たわよ」

「うわあ、着てみて良い？」

「良いわよ、シャツはこつちにしなさい」

マスターが紙袋から青紫色のカットソーの様な洋服を取り出した。

「うわあ、綺麗な色」

「でしょ、主役なんだからそれくらいのは着ないと駄目よ」

「ってこれブランド品じゃない、それも有名なイタリアのヴェルディって……」

「あら、安物よ」

マスターはサラッと行って退けるけどイタリアのヴェルディは凄く素敵だけど値段もそれなりに素敵な値段だった。

それでもマスターは笑ったまま私に服を差し出している、仕方なく自分の部屋で着替えをしてリビングに戻った。

「いい感じでしょ？」

「う、うん。それに動きやすい！ これなら大きな尻尾をつけても大丈夫かも」

「し、尻尾もあるの？ それじゃもしかして耳も？」

「うん、あるけど」

マスターの瞳が輝き出して断る事が出来なくなって大きな尻尾と付け耳を付ける。

「うう、恥ずかしいよ」

「凄くキュートよ。これであの可愛い廓詞で喋られたら男の子なんてイチコロね」

「うう、無理だよ。台詞は頭に入ったけれどそれは物まねで演技じゃないって先輩に言われたんだから」

「美奈なら大丈夫よ、一年生で主役なんて大抜擢でしょ」

「大丈夫な訳ないじゃん、友達が無理矢理に演劇部に詰め込んだんだから」

「へえ？ 美奈が自分から演劇部に入ったんじゃないの？ 私は時々蛙の子は蛙だと思っていたんだけど」

「ふえ？ 蛙の子は蛙ってパパが演劇部だったの？」

「優ちゃんが？ 笑わせないで。確かに優ちゃんは私になんか出来ない凄い事をしていると思うけど。美雪さんよ、美雪さんは大学では演劇部で主役級の人だったって聞いたことがあるの」

「ママが演劇をしていたの？」

「も、もしかして優ちゃんはそんな事も話してないの？ もう仕方が無いわね小夜ちゃんに聞いてみなさい。彼女は同じ大学だったのだから知っているはずよ」

今日は驚く事ばかりだった。

パパとマスターが幼馴染だった事やママが演劇をしていた事なんかを教えてもらった。

直ぐにでも詳しく知りたくて小夜ちゃんに衣装を着たまま電話をし
てしまった。

「もしもし、小夜ちゃん？ 今は平気？」

「平気よ。珍しいわね、美奈が電話をしてくるなんて」

「う、うん。あのね、ママが演劇をしていたって聞いたのだけど本
当なの？」

「ええ、本当よ。高校の頃から興味があって演劇部に在籍して居た
って言っていたし、大学でも演劇のサークルに入っていたもの。そ
う言えば美奈も演劇部に入部したんだって」

「う、うん。実は今度の文化祭の公演の主演に選ばれちゃってお家
で衣装合わせをしているところなの」

「はあ？ もう一度いいかしら？」

「あのね、主役にね」

「……………バキ！」

携帯の向こうで何かが折れるような音がして

「その格好のまま待っていなさい！」って電話が切れて。

しばらくするとマスターがマンションに来た時はチャイムが連打さ
れたけれど、今度はもの凄い勢いでドアが開いて小夜ちゃんが凄
い形相で飛び込んできたの。

それをみたパパとマスターの顔つたらないんだよ、この世の終わり
みたいな顔をしているの。

でも、2人に見ればこの世の終わりみたいな顔をしたのも頷け
る。

だって小夜ちゃんはソファに座ってパパとマスターは床に正座さ
せられて滾々とお説教をされているんだよ。

「どうしてこんな大事な事を私に言わないの？ 呆れたわ、2人と
も私の事を蔑ろにしていたのね」

「さ、小夜ちゃん。私は今日聞いたのよ。こんな仕打ち酷くないか
しら」

「電話くらい出来るでしょ」

「はあ、仕事の邪魔になるといけないと思ったし、てっきり優ちゃんから聞いているって思っていたのよ」

「優は何か言い訳はないのかしら？」

「ん？ 別に無いよ。まだ文化祭は先なんだし連絡をしなかったというか、まだしてないただだから」

パパは怒っている小夜ちゃんにも全く動じないでそんな風に言いきってしまう。傍から見ている私にも小夜ちゃんの顔が更に引き曇っているのが良く判った。

「まあ、これから連絡する気だったみたいだからいいわ。それよりちゃんと私のチケットくらいあるんでしょうね、美奈？」

「ええ、私なの？ だって私はパパの分しか貰ってないよ。だって小夜ちゃんは中学の文化祭に呼んでも来てくれなかったじゃん。子どもの遊びには付き合いきれないって」

「あ、あれはあれよ。今度は違うでしょ、美奈が主役で演劇をするんでしょ見に行かない訳が無いじゃない。どんなに急ぎで割りの良い仕事があったってキャンセルして見に行くわよ。で、私の分のチケットは？」

小夜ちゃんの問に対して誰も答えなかった。

私が貰った1枚だけのチケットは既にパパに渡してあるし。あれ？ それじゃマスターも見に来られないって事だよな。

「小夜は本当に見に来るの？」

「行くわよ、何が何でも」

「それならミーナと約束して」

「構わないけど。美奈、必ず文化祭の公演には行くからね」

「う、うん。ありがとう」

「それじゃ、これを渡しておくから」

そう言っただけでパパはテーブルの上に2枚のチケットを置いたの。どうしてパパがそんなにチケットを持っているんだろ、私にも理由が判らなかつた。

「うわあ、本当に良いの？ 優ちゃん」

「衣装を直してもらった御礼だ。まあそのつもりで呼んだんだし」「それじゃ、私も遠慮なく貰うわよ」

「どうぞ、渡しておかないと後々怖いからね」

「何が怖いなのよ」

「まあ、色々」と

私が着替えを済ませてリビングに戻ってくると小夜ちゃんはキッチンで何かをしている、お茶でも入れているみたいだった。

そしてパパとマスターは何かを話していたみたいだけど私が顔を出すと『頼むぞ』ってパパが言っただけで話が終わったみたい。

「ねえ、パパ。なんでパパが何枚もチケットを持ってるの？」

「ん？ 会社に行く途中で演劇部の子に時々会うんだけど。その度に公演を見に来てくださって渡されるんだけど？ もしかして待ち伏せされているのかな？」

「もう、本当にパパは役得と言うか天然でそう言う事をしているの？」

「ん？ そう言う事って。僕は別に何もしてないよ」

「優はね、押しに弱いだよ。美奈がちゃんと監視して無いと流されて何処かに行っちゃおうわよ」

キッチンから小夜ちゃんがそんな事を言ってきた。それは嫌だな、でもそれでパパが幸せになれるのならそれで良いのかも。

でも、その時に私は……やっぱり嫌かも。

「さあ、私はそろそろ帰るわよ」

「マスターはこれから仕事なの？」

「そうよ、お仕事よ。そうだと忘れる所だったわ、良い物をあげる」
マスターが持って来ていた紙袋を私にくれたの。中には洋服が入っていた。

「うわあ！ 可愛い。これってホロが着ているのと同じ洋服とパンツだ」

「うふふ、気に入ってもらえたみたい。久しぶりにワクワクしながら

ら作ってみたの」

「ねえ、マスターってソムリエじゃないの？」

「そうよ」

「でも、裁縫道具を仕事道具って」

「まあ、人は色々よ」

「怪しいなあ」

マスターがくれたのは民族衣装っぽい藤色の上着とゆったりとしたパ
ンツだった。

そこに小夜ちゃんが戻って来た。手にはトレーを持っていて美味し
そうなアップルパイが湯気を立てている。

「あら、素敵な洋服じゃない。流石、デザイナーが作った物は違う
わね」

「ええ？ マスターがデザイナー？」

「そうよ、知らなかったの？ ワインバーは趣味よ、本業は洋服の
デザイナーなの。イタリアのヴェルディって知っているでしょ。そ
このデザイナーで姉妹ブランドのHKはケンのブランドよ」

「HKって若い子に凄く人気のあるブランドだよね」

「そうね、私は大人っぽいヴェルディの服がお気に入りだけどね。

ケンに頼めば格安で手に入れられるしね」

「あのね、ソムリエが本業に決まっているでしょ。きゃあ、もうこ
んな時間じゃない。それじゃね、お姫様」

お姫様って…… マスターはそんな事を言い残して手をヒラヒラさ
せて帰ってしまった。

本当に今日は驚いてばかりだった。

小夜ちゃんが温めてくれたアップルパイを煎れ直した紅茶でいただ
く。

それとパパに台詞の練習相手になってもらいなさいって、ママもパ
パと台詞の練習をしていたんだって。

そんな事を小夜ちゃんに言われて小夜ちゃんは帰り際に私の耳元で
囁いたの。

「優が好きなら絶対に引いちゃ駄目よ」

ホームルーム

あつと言う間に夏休みが終わってしまった。

9月になると10月の半ばにある青高祭に向けてクラスで何をするのか決めなければならない。

ホームルームの時間にクラス委員長が皆に何をするのか聞いている。私は溜息を一つ付いて窓の外を見ながら夏休みにあつた事を色々と考えていた。

こんな時間が唯一ゆつくり出来る時間だった。

高校になると流石に授業をまともに聞いていないとあつという間においていかれてしまう。

そして放課後は部活動が待ち構えている、家に帰ればどんなに疲れていても当番の家事をしなくちゃいけない。

パパは疲れていたらしなくて良いって言ってくれるけれどパパだって仕事で疲れているはずだもん。

それにパパに任せておいたら部屋は直ぐに滅茶苦茶になってしまうんだから。

教室の黒板には喫茶店やらクレープ屋などと候補がいくつも書かれていて男子と女子の間で意見が分かれているみたいだった。

そんな事は今の私にはどうでも良い事だった。

「もう、相変わらずミーナはクラスの事には無関心なんだから」

「しょうがないでしょ。今は演劇部の事だけで精一杯なんだもん」

「で、台詞は覚えたんでしょ」

「うん、一応ね。演技の方は出来ているか判らないけどね」

「パパさんが練習相手なの？」

「だって他に居ないじゃん」

「羨ましい」

一応、麻美はクラスの方にも参加はするみたい。

私には無理かな。

それにパパと演技の練習をしているとどうしてもあの人とパパがダブってしまう。

それは夏の合宿での出来事が大きかったかもしれない。

パパの素顔を間近でみて、月明かりの下でのパパの顔はあの人の顔に似過ぎるくらい似ていた。

銀狼か……パパとは別人の筈なのに。

パパの事を知れば知るほどあの人の事が気になり始めている。

ホームルームが終わる頃には何をするのが決まったみたいだった。

「とりあえず飲食店は1学年で2クラスだけだから申請をして駄目だった場合はもう一度決を採りますので」

そんな事をクラス委員長が言っていた。

「ねえ、麻美。何に決まったの？」

「ああ、コスプレ喫茶だって」

「なんだ、本当に安易だね。どうせ今年の文化祭のテーマがあればだからって言う理由でしょ」

「本当にミーナは学校ではクールだよな」

文化祭は生徒会が毎年テーマを決めている。

今年のテーマは『変る』で生徒会長がテーマを発表する時に『今年はハロウィンも近いので来場者にも仮装をしてもらいましょう』なんて本気とも冗談ともれない様な事を言っていた。

そんな理由からコスプレ喫茶になったのだろう。

他のクラスも同じ様な事を考えているのだろうかと簡単に想像が付く。競争率は高そうだから再度決める事になるだろうと思っていた。

まあ、文化祭なんて模擬店やお化け屋敷なんかが定番といえば定番なのだから。

そんな私の考えと裏腹にクラス委員長がくじ引きで当たりを引いてきた。

コスプレ喫茶の割り振りを皆で決めていく事になり私は一応ホール担当になっっているけれど、演劇部のほうがメインだから関係ないと

……

「あら、大久保さんと神楽坂さんのクラスはコスプレ喫茶なのちよ
うど良いじゃない」

「へえ？ 尚先輩。何がちょうど良いんですか？ まさか」

「宣伝にもなるからクラスの方にも参加出来る様にしてあげるわよ」

「そ、それって衣装を着けてクラスに参加しろって事ですか？」

「あら、コスプレ喫茶なんですよ」

「は、はい」

麻美はそんな私と尚先輩のやり取りを楽しそうに見ている。

麻美はクラスでも演劇部でも裏方の担当になっていた。

私から見れば麻美の方がよっぽどお気楽に見えた。

10月になると本格的に青高祭の準備が始まり校内や校庭では生徒
達が実行委員の指示に従いながら慌しく動き回っている。

私は演劇部の衣装でホールをする事でクラスの準備は免除してもら
えることになった。

これは麻美がクラス委員長やクラスメイトに掛け合ってくれたんだ
けど、すんなりOKがでたところを見ると尚先輩と同じような事を
皆が考えていた様だった。

そんな理由で私は演劇部の練習に専念できるのだけど。

何もかも始めての事で戸惑ってしまう事が多い。

けれど周りに支えられながら何とかやれているような状態で駄目だ
しを出される方が多かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6024t/>

パパなんか大嫌い！

2011年10月29日02時14分発行